
薄闇の眠りを

吉舎街

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

薄闇の眠りを

【Nコード】

N6327S

【作者名】

吉舎街

【あらすじ】

フラグを立てない、立てさせない。私が私の道を決めるまでは。見も知らぬ世界に召喚され、酷い目に遭い、命からがら逃げ出した私を喚んだ男は死んだ。でもその血縁が、周囲が、ずっと私を……否、『巫女』だか『神子』だかを探しているらしい。保護？何を今更。お前達のことなど信じるものか……。異世界召喚、すれちがいもの。シリアス時々ギャグ。（はい、フラグフラグ）（……フラグのにおいがする）召喚側との間に立つ様々なフラグを回避しつつ、己の目的のために足掻く物語。恋愛要素は薄めです。

金色の髪、海色の瞳

漆黒の布があちこちで翻り、真っ白な花が街を包んでいる。賑やかな城下町はここ最近少し静かだ。

ふと、突風が吹いた。

その途端自分の視界に入った幾筋かの金色に、腸が煮えくり返るような激情が生まれる。

思わず細めた瞳はまるで海のように深い蒼色をしているのだろう。

みこ——『巫女』もしくは『神子』にふさわしくないからと言って、あの男は私から髪と瞳の色を奪った。

日本人特有の黒目黒髪だった姿はもう見る影もない。

当初何をされたのかいまいち分かっていなかった私は、逃げ出した先、今住んでいる部屋に置いてあった手鏡を見た瞬間に声を失い。即座にこみ上げる強い嫌悪感に、そのまま鏡を衝動的に叩き割ってしまった。

信じられなかった。意味が分からなかった。地面に散らばった破片に視線を向けることすらできないまま。

これは、誰だ？

疑問を口にしてしまえば、何かが壊れてしまうような気がした。

その日から、私は自分の姿を何かにうつして見ることはなくなつた。

当然、身だしなみにも殆ど気を使わなくなり、ただ肩を越す程度の髪を紐で常にひとつに纏めるくらい。下働きの私は接客しないので特に問題はなかった。生きる分にも、別に。

そしてもつと後になってから、この街で鏡が意外と高値で売れるらしいと耳にした。ああ、本当にもつたいないことをした。……割るくらいならいつそ黙って売り払ってしまえば良かった。

今の私は——文字通り、明日をも知れぬ身、だから。

「ラギ！悪いんだけどこつちもお願いしていい？ちよつと買出し追加出ちゃって、手はなせないの！」

「分かりました。じゃあこれも調理場に持っていけばいいんですよ？」

「ええ、お願いね。後でお菓子差し入れるから！」

「……楽しみにしてます」

苗字である桂木。の、下二文字を取って、ラギ。それっぽいものだったら何でも良いと就職時適当に決めた。そう呼ばれるようになってから二ヶ月と少し、漸くその名前に慣れてきたところだ。

忙しそうに走り去っていく彼女は私の同僚で、ネヴィというあだ名だけは知っている。
本名を聞いたことはないがわざわざ訊ねるほど親しくもない。……
なりたいたいとも、思わない。

さてと。私は気を取り直して頭にバンダナを巻き直す。

そして目の前にうず高く積まれた野菜の山からひとつを手に取り、冷たい水で泥を落とす作業に戻った。

私が城から逃げた先で比較的簡単に職に就けたのは、本当に運が良かったのだろう。

この街で五本の指に入るほど大きな食堂であるここは、下働き——つまり料理人ではなく、大量購入する食材の調達・下拵えなどを担当する雑用——を常に募集しており、この間も一人辞めてしまったため、身元もはつきりしない私でも何だか簡単に雇ってくれた。根気があるなら誰でもいいとのこと。

確かに、私一人でこの野菜の山と格闘する羽目になるとは思いもしなかったが。けれど苦ではなかった。単純作業は嫌いじゃないし、水場があるこの裏庭は店の人間しか出入りできないようになってい

それは逃亡者である私にとって酷く安心できることだった。

『みこ』の召喚。

それはとうの昔に廃れた法術だった筈——私は法術が何たるかすら知らないが——だというのに、召喚を成功させたひとりの男。彼は国王だと名乗った。事実、ひどく豪華な装飾を身に纏っていたのを覚えている。

国を救うためだと男は語った。

突然のことで何も分からない私に、彼は滔々と己の主張を告げる。けれど前提を知らない私にとってそれはただの脅迫であり、恫喝でもあった。人の上に立ち人を使うことに慣れている、そんな高圧的な態度で協力を迫る——鈍く光る凶器をちらつかせながら。このチンピラだ。あれは本当に国王だったのか？

……私には、何ひとつ分からない。……今でも。

城下町であるここに在る全ての店、民家、教会、学校、ありとあらゆる建物には漆黒の布が掲げられ、白い花が悲しみを昇華させる。国民は静かに、静かに、喪に服している。

そう、この国を治めていた王は三日前、亡くなった。——死んだのだ。

それなのに私の外見はいつまで待っても元に戻らない。

どういうことなのか、あの恐ろしい男は国王ではなかったのか、そもそも二度と奪われた色は取り戻せないのか。様々な考えが浮んでは消えていった。

ああ、もう何も考えたくない。帰りたいと思うことすら今の私には苦痛だった。前が見えない、前に進めない、進むべき道も選びたい道も思いつかない。こうやって泥作業で日銭を稼ぐことしかできない無力な存在に成り下がり、何も考えず働き続ける。ただ、ただ。

——生きるだけで、精一杯だ。

金色の髪、海色の瞳（後書き）

暫く、主人公と他の主要登場人物とは（一部を除き）あんまり絡みません。

夜を拒む世界

夕日が傾き、橙色の光が食堂に差し込む頃。

食堂というものは本来ならこれからが稼ぎ時——と思うかもしれないが、私達は閉店の準備に大忙しだった。食堂だけではない、この街に存在する全ての商店が営業を辞め、ひっそり家に閉じこもるのだ。国王が亡くなったこととは関係なく。それが常識的な習慣であるように。

どうして、と尋ねることが憚られるほど皆当然のように帰るので、私は今でもその理由を知らない。わき上がる疑問には目を瞑って黙って従った。目立つことはしたくないのだ、それによって、疑われることも。

もちろん、この三ヶ月……城から逃げてからは二ヶ月と約二週間、何もしなかったわけではない。この世界のことを知ろうと思っただし、『みこ』、が何なのか、何のために呼ばれたのか、どうやって帰れるのか、とにかく情報を集めようとした。市民に完全開放されているという図書館にも行った。

結果。

分かりきったことだったが、普通に字が読めなかった。あちこちに立てられた看板などを見る限りそうだろうな、と頭の隅

では思っていたが、言葉が通じることと僅かな希望を持ってもいたのだ。まあ、人の話を聞く限り識字率はあまり良くないため、私のような存在でも浮くことはない。

ネヴィでも読めないらしく、失礼にも安心してしまった。注目を集めることはない。

とにかくだ。字が読めないことでもの凄く、自分でも驚くほどにがつくり来た私は仕事に没頭するようになる。情報を集めるにしろ何にしろ、字を覚えるにしろ、まず先立つものが要だ。そして己の余裕も。だから私は給料を切り詰めての貯金から始めることにした。

昼と夜。

この国は、もしくはこの世界は、か。事実、極端に夜が長いように感じる。

逆に言えば太陽の出ている時間が短い。と、思う。人々は夜が訪れるとじっと屋内に閉じこもり決して出てはこないのだ。驚いたことに、そのまま直ぐ眠ってしまうという。

時計を持っていないため正確ではないが、一日を私の世界のように二十四時間とすると、彼らは少なくとも十二時間以上眠り続け、九時間活動し、残り三時間を家の中で過ごす。そんな生活をしているらしい。

十二時間眠ること自体は難しくないかもしれないが、それを毎日続けるのは流石に無理がある。それを日常としているこの人たちと私

とは、違う、と思った。

疲れているときはまだしも毎日十二時間以上も眠れるはずもなく。私は適当に眠る時間をずらし、決して部屋から出ないようにしている。一度部屋から出て外の空気を吸おうとしたら、眠りが浅かった。管理人のおばさんを起こしてしまい、凄じ剣幕で部屋に引き戻された。

眠れないのね、辛いでしよう、でも外は駄目よ。

と穏やかに、けれど拒否できない強さを秘めた声で窘められて。

いや、毎日十何時間も寝る方が健康に悪いと思いますけど。なんて言葉は、喉の奥に引っ込んだ。

そういうこともあつて、今は絵本を片手に文字を覚えようと奮闘することになっている。

本当に全く進まないが。

（――変な世界）

奇妙な人々。それは異世界だからか、おかしいと思う私の方が異常なのだろうか。

彼らは……何というか、……夜を、恐れているように見えた。暗闇に怯えて蹲る子供のように。

例えばいつかの早朝、全裸の男が路地裏で寝ていたそうだが、「夜、外に出るからだ……」と店の人が真剣な顔で言い合っているのを耳にしたことがある。それはただの酔っ払いが変態なんじゃないだろうか？ 激しく突っ込みたい衝動が湧いてきたがぐつと堪えた。

短い昼、長い夜。少し時間の長さが違うだけで私には全く異常を感じ

じない、何の変哲もない世界に思えるのに。城下町とは思えないほど、夜は静かだ。まるで世界にひとり取り残されたような気分になる。

「こら、ラギ！何ばさつとしてるんだい、早くしないと夜が来ちゃうよー！」

「……っはい、すみません！」

まずい、怒られてしまった。私は軽く頭を降って思考を止めると、箒とちりとりを手早く片付ける。うかつに注意されてしまうと減給に繋がる場合があるので気を抜いてはいけない。私はこれ以上注目を浴びないようにと、近くにひとつだけ残っていたゴミの袋を抱えて店の外へ逃げ出した。

ゴミの回収制度がある、という点は元の世界と似ていて、しかしどうやってゴミを処理しているのか物凄く気になるところではある。字さえ読めれば幾らでも調べられるのに。そう内心溜息が漏れた。無邪気なふりをして人に訊ねるには少々歳を取りすぎている、ような気がする。もしかしたら常識で知っておくべきことかもしれないし。

そんな他愛もないことをつらつら考えつつ所定の場所へと急いだ。店の表入り口から右手の、少し奥まった通路をまた右に曲がってすぐ。

その、薄暗くて用がなければ誰も近寄らない狭い空間に。

……何かが、倒れていた。

何か？いや、紛うことなきフラグである。

所々土に汚れてはいるものの、この距離からでも麗しいご尊顔が
拝めた。

絹のような光沢を持つ服に、……貴族以上の人間しか身に着けない
ような装飾品の数々。

腰には素人でもわかる、見るからに立派な剣が刺してあつて。

地面に降ろしかけたゴミ袋を、ゆっくりと音を立てないように持ち
上げる。そして。

決して走らない。決して振り向かない。何度も自分に言い聞かせて、私は即座に踵を返した。

……とは、いえ。

流石に完全に見捨てるのは、日本人としてまともに育ってきた私の良心がちくりと痛む。

明日出勤してきた時に、カチコチの死体とご対面するのは尚更ごめんだ。幸いにも戻った店の炊事場にはまだ幾人かが残っていて、和やかな会話が聞こえてきた。

私は隅の方でおしゃべりしている人々を確認し——そこに気立てのいい炊事場のリーダーであるおばさんとお人好しで誰にでも優しいネヴィがいるのを知ると、彼女達から見つけやすい場所に捨てずに持ってきたゴミ袋をそつと置いた。

どちらも仕事に対しては至極真面目で、だから、そうすれば何が起るかを分かっているの行為だった。

「さて、そろそろ帰らなくちゃね……おや？このゴミ、まだ捨ててなかったのかい」

「誰かが忘れちゃったのかも。じゃあ私、捨ててきますね」

「頼むよ。入り口で待つてるから早くおいで、日が沈む前に帰らないと」

「……ですね」

まあ普通そうなるわな。ゴミなんてものが残っていたら私達泥作業組が減給される。私は怪しくも近くの物陰で忍びつつ無事ゴミが運ばれていく様子を見届けると、おばさんが待っているところとは別の出入り口に向かって歩き出す。

薄情？何とも言えない。

私は、あの男と同じような耳飾りをつけているような人間と関わるつもりは毛頭ないのだ。

そう待たずに響いてきた可愛らしい悲鳴と共におばさんと呼ぶ同僚の声を背に、私はこそこそと家へ戻った。

慈愛と犬と騎士

おはようございます。こんにちは。ありがとうございます。ごめんなさい。写実的でお世辞にも可愛らしいとは言えないキャラクターが、笑顔で延々とその言葉を繰り返す。

——という、夢を見た。

十中八九、寝る前のお勉強タイムで使った「あいさつを学ぼう」基本編」という絵本のせいだろう。図書館に通い始めたばかりの頃、絵本のくせにいい歳した大人が借りていくのを見て気になっていた代物だ。字を覚えるための入門書の入門書、といったところか。もう少し絵を何とかしてもらいたかった。

名前の綴りと、挨拶を一通り。三ヶ月経っても私が確信を持って読み書きできるのは今のところそれだけである。後は……よく下拵えする食材なら、辛うじて雰囲気で分かるかどうか。私はこんなにも阿呆だっただろうか？

（まあ、別に死ぬわけじゃないし、……読めない人の方が多いんだし）

言い訳をする脳裏にまたあのキャラクターがじわりと侵食してきた。だから消えろあいさつまん。その笑顔怖いから。

ふ、と思わず溜息が零れる。読み書きに不自由しなくなる日なんて

到底来るようには思えなかった。とりあえず仕事仕事、と頭を切り替えてベッドから起き上がる。これは飢えとの戦いだから辞めるわけにはいかない。

手早く着替えて顔を洗い、さっと簡単に髪の毛を纏めると、私はそのまま食堂へと向かった。

——そういえば、昨日のフラグ美形男はどうなっただろう？

その答えはいつもの作業場でネヴィと顔を合わせたとき、自ずと知れた。

笑顔が素敵で可愛い部類に入る彼女は、寝不足ですと言わんばかりに、目の下に大きな隈を作っていたから。

「……おはよう、ラギ」

「おはよう……ございます。あの、大丈夫ですか？」

「ええ——その、ちょっと色々あって」

色々。含みまくった表現と、濁した言葉。やはりあの行き倒れのところかと私は思考を巡らせる。彼女と炊事場のおばさんは共に食堂の近くにある建物に住んでいて、だからこそ引き取る可能性は高いと思っていた。

どんなに怪しくても、関わったら厄介なことになるかもしれない女性^{ひと}も、目の前で倒れている人間を見捨てられない優しい女性。

「あ、そう、犬！」

「え？」

「怪我をしていた犬を拾ったの。その、朝まで意識が戻らなくて、」

犬呼ばわりされたフラグ美形男に同情すべきか、

明らかに今思いつきました感が漂う苦しい言い訳を笑うべきか。

「——ああ、それで」

私はどちらも選ばず、納得したふりをして頷いた。何にしても、私はその男を見殺しにせずにすんだ。そして厄介事を押し付けた自覚はあったものの、それでも直接頼んではない。結果的に選んだのは彼女だ。

「だったら、危ないから皮むきは私がします。その代わりこっちの野菜洗ってください」

「ラギ……いいの？」

「ええ、もちろん。ここで流血沙汰になったら、連帯責任で私まで減給ですしね」

「あつこら！可愛くないぞ！」

彼女は笑う。朝まで意識が戻らなかったということは、夜の間に、ずっと傍について起きていたことになる。普段十二時間以上きちんと眠り続けているだろうのに。……夜を、どこか恐れているのに。私の住む建物の管理人の言葉を借りるなら、眠れないことは辛いことであつただろうに。それでも彼女は笑うのだ。

知らず王族ならびに貴族、それに仕える官僚騎士エトセトラ、には絶対関わりたくない私の身代わりになって。

——ありがとう声に出せない感謝の言葉は、どこか偽善めいた響きを持っていた。

ネヴィはそれから数日間、寝不足から酷く憔悴していたようだったが、暫くすると元気を取り戻していった。彼女との会話で距離が縮まったか、というと実はそうでもない。ネヴィという女性はいつでも誰にでもあんな感じた。

ただ、一度だけ。“犬”はもう大丈夫になったから、とこっそり教えてくれた。

つまりは家に帰れるほど回復し、彼女の元を去ったということなのだろう。その時の少し寂しげな表情が物語っている。そして最後までではあればな“犬”呼ばわりが変わらなかったのは、きっと、フラグ美形男が本当にフラグだったから。街の人間であればそこまでして隠し通さなくてもいい筈だ。身分を、正体を、他人に知られたくない誰か――。

（やっぱり関わらなくて良かった。よし、この調子で行こう。……ん？）

内心ガッツポーズを決めていると、ふと。己の背後、食堂の辺りが何だか騒がしくなるのを感じた。普段通り泥まみれの野菜を洗っていた手を止め振り返る。ざわめき、と、それに混じる女の、いわゆる黄色い声。

何かがおかしい。私は全力でそちらから意識を引き剥がし、野菜に向き直って強く強く目を閉じた。

確かにここは城下町で五本の指に入るほど大きい食堂だ。だが、やはり客層というものは大体決まっている。庶民、商人、傭兵。少し柄の悪い輩も時々現れるが、乱暴に飲み食いしては大人しくお金を払って出て行く。味は別として評価のランクは中の下。数ヶ月働いていても、従業員のあんな声なんて聞いたことがなかった。

……招かれざる客だ。どこか冷静な頭が答えを弾き出す。この店に相応しくない客が今、ここに居る。しかし何の為に？『みこ』を探す為かと一瞬考えて即座に打ち消す。こんな騒ぎの中で何ができる
と？

「つきやあああああ！リカルド様あ！」

大合唱。うん、ここまで嬉しそうな悲鳴をどうやったら出せるんだろ。皆一オクターブ高いよ、声。ここに居てさえ耳に刺さるような気がした。それにしても、リカルド、…………リカルド？

「リカルド、って、どこかで聞いたような…………」

「あんた、騎士団長の名前も知らないのかい」
「はいっ?!」

ぎくりと肩が跳ねた。取り落としかけた野菜を何とか手の中に収め、声のした方へ慌てて顔を向ける。そこには呆れたような顔を隠しもせずに炊事場のおばさんが仁王立ちしていた。何故か、手にお菓子を持って。

「姿が見えないと思ったら、香気に野菜洗いとはね……全く」

「えっと……その、すみません?」

「ラギ。あんたもう少し、女らしくした方がいいよ」

余計なお世話だ。反射的に出かかった台詞を呑みこんで、私は引き攣った笑みを浮かべ誤魔化した。そんな様子に思うところがあつたのか、深い深い溜息を吐きつつも、手に持った袋詰めのお菓子を渡してくれる。

お菓子。それも、バターのいい匂いがする。私の世界ならまだしも、この街では高級品に相当する部類のものだ。

「さ、これ食べて仕事頑張りな。なんてったってリカルド様からの差し入れだからね!」

「……………はあ」

「反応薄いねえ……………」

「あ、いえ、本当に嬉しいです！美味しそうだし！」

差し入れという口ぶりからも、これはこの食堂の従業員全員に配られるものらしい。

カップケーキを配って回る騎士団長？何だそれは。何の詐欺だ。

だがこの国で夜を忌避することが当然であるように。
この事についても全く何も思っでなさそうなおばさんに、私は仕方なく口を閉ざした。

食欲をそそる良い匂いがするお菓子には確かに未練があった。

ただ、騎士団長直々にという意味不明な事実がやけに気になって、結局家に戻った後、管理人にあげることにした。

慈愛と犬と騎士（後書き）

まだまだ序章。

見ないふり、聞こえないふり

(……………まずいな)

ぐう、と鈍い音が胃の辺りから聞こえてくる。私は今、ぶつちやお腹が空いていた。この間差し入れて貰った怪しいお菓子、変に勘繰ったりしないで素直に食べておけば良かったかもしれない。

頑張っても頑張っても文字の勉強は全然進まない、起きていればいるだけお腹が空く。どうすればいいものか。かといって雀の涙のよくな貯金は崩したくないとくれば、もうお手上げ状態だった。ともすれば下拵えで皮を剥いた後のじゃがいものような野菜に齧りつきたくなるほど。生だけ。

昼食としてここで出されるまかないの量は本当に少ない。足りなさすぎる。

……………ああ、お腹空いた。

と、そこで勢いよく食堂に通じる扉が開き、いつも通り笑顔満開のネヴィがふわりとスカートを靡かせ走りこんできた。

「おっはよう、ラギ！遅くなったけど約束のお菓子持って来たよ——うあ?!」

天使だ。天使がやってきた。私は速攻で野菜を足元に放り投げその場に跪き、尊敬の目を彼女に向ける。お菓子、と言っても、粉と水と何かの甘味料だけで作られた素朴なものだったが、私にはそれが天上の御馳走に見えた。

「……っ女神様……！」

「え？え？なにどうしたの？え？」

閑話休題。

貰ったお菓子を全て腹に収めると、私は漸く一息つけた。と同時にらしくない姿を見せてしまった、とも思う。やはり空腹は敵だ。気をつけないと。

「ああもう、びっくりした。何かと思った。お腹空いてたんだ」

「……本当に、助かりました」

「ふふ、どういたしまして。でも君って意外とよく食べるよねえ。まかないとか一瞬だもん」

「それは——」

日本でのことを考えれば、私は完全に平均だ。小食ではないが決して大食らいでもない。と、声を大にして言いたかったが、確かに彼女達の食事を見るとただの間食かと思うほど少ない。それで充分満足しているというから驚きだった。

この世界の人達の摂取量は少なすぎる。活動する時間が短い所為なのかもしれないけれども。

「まあ、成長期ですから」

「胸が？」

「喧嘩売ってます？」

「うっん、全然」

にこにこと笑うネヴィの表情にはやはり全く裏を感じなかった。本気で言っているだけ余計性質が悪いと思うのは気のせいだろうか。彼女の胸は女らしく豊満であるゆえに、私のそれは小さく見えるのだろう。それでも結構着やせするタイプ……いや、関係ない関係ない。

「よし、今日もきっちり稼がないと。気合入れていくわよ！」

「そうですね。流石にごはん抜きはもうごめんです」

「や、やあねえ。あんなこと二度としないわよ、大丈夫大丈夫」

野菜がたっぷり入った大きな籠を脇に置いて、彼女は腕を捲り上げる。その気合は充分なことだが、気持ち我先走りすぎて籠ごと全部ひっくり返したことがある。昨日の話だ。運悪く片付ける前にその光景を見られてしまい、上司に報告され、罰としてまかないを貰えなかった。――傍にいなかった私でさえも下働きの連帯責任で。

少ない食事でもないよりは断然ましである。

そんな細かいことが重なって、今日のような飢えに繋がるのだから。

「……まあ、お菓子貰えるなら別に構いませんけど?」

「ラギ……。君、ほんっと単純……」

ほっとけ。私にはまだお菓子を買う余裕すらないんだっつもの。

そうやって遠回しに催促をすることを恥ずかしいとは思わなかった。ネヴィも大概貧乏だが私はその更に上に行く。一日、一日、食べるものをきちんと確保するのがどれだけ難しいことか。

泥作業組の給料は少ない。けれど特別な技術もいらない、誰の紹介でなくともいい。身元を保証されていない私に残された選択肢など、そうありはしないから。

「ですから、無意味なことだと言ってるんです！」

図書館入り口前、門の近く。「あいさつを学ぼう基本編」だけは辛うじてマスターしたので、本を返そうと思ってやってきた私は響いた怒号に思わず歩みを緩めた。

建物の前で入り口を塞ぎつつ、自分達の世界に入っている男二人――。

中に入りたい私にはものすごく邪魔である。かといってどいてくれるよう声を掛けようにも、片方の青年の剣幕に怯んでしまい、その勇氣などどこを探しても見つかりそうにない。不幸にも図書館へ行くこうと思っているのは私だけなのか、ちらほら視線を向ける人間は居ても、邪魔そうにしている誰かは見つからなかった。いや、むしろ、見て見ぬふりをしている？

その事実気付いた瞬間、わけのわからない漠然とした不安が私の

心の中に広がっていく。

「やめる、シウルツ。声が大きい」

「……すみません。……とにかく、私は賛同しかねます」

「それこそ無意味な話だろう。事は既に起こってしまった」

「だからといって、あんな方法で解決するとあなたも本気で思っているんですか？ 考えれば分かるでしょう。そうやって無駄な時間を費やすより、早々に見切りをつけて最初から無かったことにすれば

――

「あいつがそれを望むとでも？」

「……っ！」

声、今でも大きいですけど。周囲に丸聞こえですけど。聞かれて困るとかそういう意識はないのか。しかし、漏れ聞こえてくる内容からして思っていた以上に深刻な話のようだった。何とも物騒な会話である。

そしてよく見ると、傍迷惑な男の内ひとりとは綺麗な刺繍が散りばめられた豪華な服を纏っていた。もちろん、ついこの間行き倒れていたフラグ美形男には敵わないが、――貴族。あるいは、それよりももっと上の。

（……なんだろう。ものすごく、……フラグのにおいがする）

もう一人は全身黒尽くめだったが、明らかに騎士と分かる紋章のついた剣を腰に差していて。関わらないほうがいいような、絵本のことは諦めてさっさと回れ右した方が幸せになれるような、第六感な

んてものは持ち合わせていない筈だが、本当にそんな気がした。

だが彼らの視界に入っているだろう今この場で足を止めそうしたのでは怪しいかもしれない。私はざっと周囲を見渡して、……図書館の横に位置している広場に目をつけた。

そしてまるで最初からそこへ向かっていましたよと言わんばかりにゆるりと方向転換し、歩く速度を上げ、彼らから充分距離を取った状態ですれ違う。

「……光の——さえ見つければ、そんなもの。……我々には必要ありません」

「——」

……突風が、男達の声搔き消した。

広場にはたくさんの子供達が元気そうに走り回っていて、笑顔が何故かひどく眩しい。とりあえずあの二人がどこかへ行ってくれるまでここに居ようと近くにあった段差に腰を下ろす。後ろには小さな

川が流れていて、ささやかな水音が耳に涼しかった。

この国は、水資源が豊富なのだろう。食事を満足に得られない私が今も尚生きていられるのは、町のそこかしこに湧き水があつて誰でも自由にそれを飲むことができるからだ。初給料が出る前は一日のほとんどを水だけで過ごしたときもあった。

——懐かしい、と思えるほどにはまだ時間が経っていない。まして、そんな生活にいつ逆戻りするかわからない日々を送っている自覚もある。

私は、その不安定な生き方を止められる方法をふたつ、知っていた。

……どちらも選びはしないけれど。

黒い髪、黒い瞳

『——地味だな』

震える身体は止められなかった。だからせめてもの抵抗をと意地になって睨みつける。しかしそんな私を矯めつ眇めつ不躰に観察すると、あの男はどうでもよさそうにそう呟いてぱちんと指を鳴らした。その瞬間生まれた、身体中を侵食される感覚の気持ち悪さにぞっと背筋が凍る。

『……ふん、こんなものか。あれで——と——では、見栄えが悪い——』

「——だからって、私の顔に金髪碧眼は似合わないっつの」

ぼつり。零れた呟きはまだ薄暗い部屋に漂う冷たい空気に溶けていく。起きぬけの掠れた声。滑稽にも現実でさえこの身体は震えていた。夢を見たくらいで、ほんの少し思い出しただけでこのザマだ。首筋に触れた冷たい刃が今でもそこにあるかのよう——。

私はカーテンの隙間から眩しい朝日が差し込むまで、まんじりともせず時を過ごした。今朝は最低で最悪な目覚めだった。

黒目黒髪は『みこ』にふさわしくない、という戯けた主張は、全くもってあの男の独りよがりなものなのだろう。この世界に黒目黒髪を持つ人間が存在しないわけではないし、そもそも黒という色が特に冷遇されているわけでもない。太陽が出ている間に外に出て周囲をぐるりと見渡せば、そこに幾つかの黒を見つけることができる。ああ、確かに黒い髪と黒い瞳が揃っている人間は少なかった。数十人にひとりいるかいなか、そんな程度だと思う。それを稀少性があると言うにはちよつと大げさな気がした。

第一、あの男は間違いなく“地味”だと言ったのだ。私の生まれ持った髪を、瞳を。地味？見栄えが悪い？そんな下らない理由で色を勝手に変えられたのではたまったものじゃない。全く腹立たしいにもほどがある。

「行ってきます、アニーさん」
「行つてらっしゃい、ラギ。気をつけるんだよ」

不愉快な気持ちがおさまらないまま用意を終え、それでも仕事場へ向かう頃には多少落ち着きを取り戻していた私は、普段通り管理人のおばさんに声を掛け一步外に出たところで……そのまま思わず足を止めた。眼前にはいつもと違う光景が広がっている。

通りのあちこち、いや、至るところに溢れる黒、黒、黒。

「――」

今日、か。私は後ろ手に扉を閉め、動揺を押し隠して歩き出す。町中に貼られた紙が、風に吹かれてまるで嘲笑うかのように煩い音を奏でていた。

「――おはようございます」

「ああ、ラギ。おはよう。今日は朝から随分と騒がしいねえ」

「おはよう！え、でも仕方ないですよ、今日が初日なんだから。ね、ラギ？」

食堂に着いてもそのどこか浮ついた空気は変わらず、ひとり重く沈む心を持て余す。

「そうですね。確か、お祭り……でしたっけ」
「君ね、自分に関係ないからって興味なさすぎでしょ……」

ネヴィも炊事場のおばさんも今日から始まる“選定”が気になるように、窓の外にちらちらと視線を向けていた。視線の先にはやはり黒、黒、黒。人の流れはゆっくりと、しかし確実に城の方へと移動している。

国王逝去の後公布されたあるものに従って——黒目黒髪を持つ人間が、この町に集まっているのだ。

お祭り、と曖昧に言葉を濁したのは、私とその催しの正式名称を知らないからだ。食堂の皆の反応からするに、恐らく幼い子供でも知っているものらしい。聞けるわけがなかった。

だからこっそり噂話を盗み聞きするなどして何とか情報を集めた結果、季節が一巡りする間に二回、私の世界風に言い換えれば半年に一回あるというその催しは、一日中……つまり夜を通り越して朝まで続く宴だと判明した。それも屋外で、だ。

半年に一回、その日だけ、彼らは夜を忌避せずに過ごせる——。

どんな現象なのかさっぱり分からなかったが、今はとりあえずそういうものとして無理矢理納得することにして。

「そうさねえ、募集してる踊り子は黒目黒髪なんだろう？ 演目があればいい報酬貰えるのに。残念

だつたね、ラギ」

「いえ、人前で踊るなんて想像しただけで気絶しそうですからいいです」

「うんまあ、それは私も同感だけど」

町のどこでも、あのフラグ美形男が倒れていたゴミ捨て場にも貼つてあったお知らせ、という名の踊り子募集、という名の、……指名手配書じゃないかと私は思っている。もちろん字が読めない私は最初「何か貼つてあるな」程度にしか思っていなかったが、それらが貼られた次の日の食堂ではその話でもちきりだった。読めない人の方が多いので年長者が内容を読み上げてくれるのを私は隅の方で聞いていた。

祭りの演目に関しての一般募集——二回ある祭りのうち一回は、貴族ではなく一般市民が踊りを披露するのだという。練習の費用は国持ち、更には報酬も出るとなるとあの志願者の多さは頷ける。ただ。

「黒目黒髪の者男女問わず五十名」、それが今回の募集内容だと知ったときの、私の胸底から湧き上がった不快感は——。

「せっかく条件は揃ってるのに、挑戦すらしないなんてもったいないよネヴィ。あんたの容姿なら合格するんじゃないのかい。舞人に選ばれたらきつと店長も……」

「いいのいいの。緊張するし、別に食べるのに困ってるわけじゃないんだし、それに」

「それに？」

「……。……ううん、何でもない」

「……？」

そう。数十人にひとりいるかいないか、という黒目黒髪のひとりがネヴィである。私が奪われたその色を持つ彼女に、だから余計近づきたくはなかったのかもしれないと思う。親しくなりたくなかったのかもしれないと思う。今どんなに切望しても戻ってはこない、色。しかし反面、ここに来て複雑な気持ちだった。黒目黒髪を募集する貼り紙、紙自体の材質は荒いものだったが手作り感が溢れていて、このビラを作るだけでどれだけの費用が掛かったのだろうと斜めに邪推したくなる。

もし、わざわざ、国が“黒目黒髪の者を探すため”に黒目黒髪が必要な演目を選んだのだとしたら？

踊りの習得費用、報酬、それらのキーワードに、黒目黒髪を持ってこの国に召喚された『みこ』に対するメッセージが込められていたとしたら？

もし、もしも。全てが仮定の話だった。何もかも私の勘違いにすぎなくて、国は『みこ』に関して何も知らず全ては偶然の一言で片付けられることかもしれない。けれども、何がきっかけになるかなんて誰にも分からないのだ。

そしてもしこれがフラグだったとしたら、こんなに分かりやすいものはない。

「はいはい、今日も仕事仕事。さ、ラギ行こう」

「あ、前の連帯責任……」

「お菓子ね！ちゃんと持ってきたわよ、分かってるってば」

「あんたたち！……はあ。もう、監督に見つからないようにしなよ」

「あはは、了解ですっ！」

例えば、今、私が黒目黒髪のままだったとして。

今のように飢えと戦っていたとしても募集に乗ったりはしなかっただろう。保障なんて何もない、どこで落とされるか分からない。

あの男が居たところなど信じない。

（誰が行くか、……ばーか）

心の中で口汚く罵りつつ、私は大量の野菜を抱えていつもの裏庭へと向かう。

そして、今、金髪碧眼であることに感謝なんかしない。募集条件から外れていることに安心したりはしない。

——あの男がやったことに救われたなどと思うものか。

絶対に。

黒い髪、黒い瞳（後書き）

序章終了。

騎士団長とお菓子

私はお腹が空いています。私は喉が渴いています。——とて
も、

「何で余るの……？つて、もしかして副詞の位置が違うとか？」

小さな黒板とチョークもどき、加えて即席黒板消し。傍らに絵本を置いて。このセットが、とりあえず当面の私の勉強道具だった。私は今日も変わらずこの国の文字を勉強し続けている。

やっとこさあいさつを卒業して次の段階に進んだものの、やはり遅々としてなかなか捗らない。単に独学だから、なんて理由じゃ説明がつかないほど本当に理解ができなかった。覚えた端からぼろぼろと零れていくような。一度眠ってしまえば半分以上頭から抜け落ちるような。

ちゃんとやる気はあるんだけども。

（お腹、空いた）

胃がからっぽだった。水だけで空腹を誤魔化すのも限界がある。あれからずっと何の変化もなく、私の食生活は安定していない。ストレスが溜まるばかりだ。

彼らを真似してさっさと寝てしまえばいいのだろうが、中途半端にベッドの中で目が冴えてしまうと、その息苦しさは最悪に嫌な思い

出まで掘り起こしてくれる。忌々しいことに。

——暗くなりがちな思考を、ふと甘い匂いが包み込んだ。

今日持つて帰ってはきたがどうすればいいか分からず、かといって捨てるに捨てられず窓際に放置したままのお菓子の匂い。女性好みに可愛らしくラッピングされたそれは、しかしこの飢餓感においてさえも、手を出すことを躊躇われるような何かを秘めていた。

「これがフラグとか、マジでやめて欲しい……」

食べたいという本能を根性で抑え、私はそつと目を逸らした。

国王の死を悼む黒い布と白い花は気がつけばもうどこにもなかった。亡くなったと公示されてから一月も経っていなかったように思う。それが早いのかどうかも分からない私は何を思うでもなく毎日

を過ごしている。

「おじさん、この魚全部ください」

「あいよ！……ってえ、その服、あんた南の食堂の子かい？いつもの子は確か……」

「ええ、今日は彼女の代わりなんです。昼前に団体さんがいらっしやって忙しくて」

「そういや昨日、隣国に行ってた連中が帰ってきたとかなんとか。よし、こいつはおまけだ。今後ともご贔屓に、頼むぜ！」

「もちろんです。ありがとうございます」

活き活きとした得体の知れない軟体動物をものすごくいい笑顔で追加してくれたおじさんに、こちらも笑みを返しておく。これが調理の必要がない食べ物だったら黙って懷にしまっておくのだがこれではそうもいかない。仕方がない、素直におばさんに渡すか。

両手一杯に荷物を抱えた私は、頭の中で頼まれたものを復唱してひとり頷く。買い物は終わりだった。

町は初めて来た頃の賑やかさを取り戻し、そして、たくさん集まっていた黒目黒髪を持つ人々も姿を消した。黒目黒髪の男女問わず五十人——は特に何の問題もなく選ばれ、今はもう来る祭りの舞台の為に練習を始めているらしい。私が危惧していたようなことは何も起こらなかった。

幸か、不幸か。それはきつと後にならないと分からないのだろう。

丁度その時手が空いていたからと炊事場のおばさんに押し付けられ、もとい頼まれた追加の買出しを終え戻ると、食堂の前に人だかりができていた。きやつきやと騒ぐ声は女性のもので、集団の中心に一際鮮やかな色が見える。

夕日をもう少し赤く染めたような――そんな色をした髪。長身の男？――

なるほど美形か、と勝手に結論付けた私は、これ以上その集団に近づかなくてすむよう食堂の外側をぐるりと迂回するようにして従業員専用の裏口へと回った。ああいう人混みで誰かにぶつかり、折角買ってきた食材を地面に落とすものなら悲惨である。なけなしの給料が、いやむしろ首が飛ぶ。

「あ、ラギ。お帰りお疲れさま。ごめんね、ひとりで大丈夫だった？」

馴染み深い裏庭に入った途端、下拵えの作業に戻っていたネヴィに声を掛けられた。彼女は今日、珍しくも接客の方へ回されていて、その分の裏方の仕事が私に全部掛かってきたのである。

……お菓子を約束してくれたので全く損はないけれども。

「はい。でもさっき、食堂の入り口にたくさん人が群れてて通れませんでした」

「人？——っじゃあ、もしかしてリカルド様がいらっしやったの？」

「え……？……、……。……」

リカルド。リカルド。リカルド。

覚えのあるその単語を何度か口の中で転がして、数十秒。私はぽんと両手を打った。

「ああ、お菓子の人！」

「騎・士・団・長！」

即座に力一杯の突っ込みが入ったが。けれどネヴィは怒っている様子ではなくて、ただ呆れたように苦笑しただけだった。何を考えているか丸分かりな彼女の生温い視線を感じながら、私は内心軽く首を傾げる。

その騎士団長とやらはいったい、何をしにこの店に来ているのだろう？ 騎士が好んで来るような店ではないはずだ。ならお菓子を配るために？ そんな馬鹿な。

「ねえ、まさかラギ……」

「……な、なんですか」

突然、ネヴィにずっと迫られて私は思わず後ずさった。真剣な表情。緊迫する空気。

「この食堂の店長がリカルド様とご兄弟だって、知らなかったりする？」

「——。——初耳です」

「やっぱり！」

はあ、店長と兄弟。それで？私は無駄に緊張していた自分を恥じつつ、身体から力を抜く。というか、普通にふーんとしか言いようがない気がする。兄弟の店が気になってちよくちよく様子を見にきては、手ぶらじゃ寂しいからと毎回従業員に手土産をもつてくると？それは家族思いの人ですねと言えいいのか、ちょっと女性に媚を売りすぎなのではと思うべきなのか。まあ、お菓子自体は欲しいけど。

「そうじゃないかとは思ってたのよねえ。君、口を開けば食べ物のことばかりだもん」

「あのですね、それとのお菓子の人と何の関係があるんですか」

「だから騎士団長。……ほら、この店、従業員女の子多いでしょう」

？つまりは偶にいらっしやるリカルド様目当てにこの店で働いている子が多いってこと」

「高級お菓子欲しさに？」

「……そついう発想するのはラギだけよ」

いや、それは冗談として。流石に私でもわかる。

顔を直接見てはいないが、騎士団長という響きだけでイメージできるその女性への人気っぷりと、そんな彼に少しでも近づきたい乙女の恋心。クビになりたくないだろうからさぞ真面目に働くのだろう。そしてそんな女性を雇うことで男の客が増えてほくほくな店主――

うん？これだと騎士団長のメリットがいまいち分からない。けれど家族想いであれば売り上げに手を貸すこともやぶさかではないかもしれないし、まあ、どうでもいいか。

「そつか、ラギは本当にリカルド様目当てじゃなかったのか……うん。……そうよね、泥作業してる時点で違うもの」

「なにか途轍もなく失礼なことを言われてる気がするんですけど」

「え？え、えーと。あつ！ほらラギ、外へ行ってきたら？今ならまだお菓子残ってるかも」

「……。貰えるなら貰いますが、自分から貰いにいくのはちよつといえかなり嫌です」

「なにそれ、同じじゃない」

「全然違います」

群がる集団と同じようにくださいと言いに自ら赴くのは、その騎士団長に「個人」として認識されるということだ。大勢の中の一人にすぎないくせに、自意識過剰、と言われてもいい。国の防衛の中核——つまりは自衛隊のトップのような存在に、誰が好き好んで近づくものか。

それにそもそも、お菓子はお菓子でもちゃんと何の裏もない普通のお菓子だったら、の話である。

飢えと引き換えにしても譲れないものが、そこにはあった。

空腹は最大の……？

私がお菓子、お菓子と喚いているのは何もお菓子しか食べないからではない。甘いものは好きだ。焼き菓子も好きだ。でも、食事は普通のものがいいに決まっている。……しかし。ここが日本ではないように、そもそも世界が違うという話は脇に置くとして——この国の主食が小麦のような植物であることからしても、その食生活がどのようなものか想像がつくだろう。

つまり何が言いたいのかというと、……飽きた、のだ。

ここの食事に。たった三ヶ月で、と笑われるかもしれないが。塩とハーブと、特に代わり映えのない味付けと料理そのもののバリエーションの無さ。まずいと言わない、決して言わないがこのもどかしさは誤魔化しようのない苛立ちとなって毎日私を苦しめる。空腹が最大の調味料とか言っていたのは二ヶ月までだった。

そしてそんなことを誰かに愚痴ろうものならだったら作ればいいと一蹴されるだろう。そもそも、あちらでは人並みに料理ができた。食事を外で済ますよりよっぽど安上がりで経済的なのだから、やればいい。貯金もしやすい。そこまで考えてもちろん実行に移した私は、漸くそこで悟ったのだ。

——いくら料理ができると言っても素人は素人、レシピがなければただの人、と。

（あれは、不味かったなあ……）

できあがった料理は美味しいとは言えず、期待値が高かった分余計に落ち込んだ。食材を無駄にできる余裕は塵ほどもなかったのだ。

今後は料理を封印することに決め、飽きた味を生きる為に我慢して食べる。常に飢えている私には贅沢な話だった。

そんな中、まだ飽きずに美味しく食べていられるのがお菓子なのである。甘いものに飽きる自分が想像できない。だから私は今日もまた、ネヴィの頼みを聞いてその報酬にお菓子を要求する――。

「それだけ間食してて全然太らないって凄いわね。どういう身体してるの？」

太らないどころかどんどん痩せてますから。ちょっと弛んだお腹周りがすっきりしましたから。このままの生活が続けばいつか死んでしまいそうだと私は内心苦笑する。そしてむしろそれだけの量で栄養失調にならず毎日健康に生きているこの世界の人間の方が不思議だった。

そっちこそどういう身体をしてるんだか。もしかして、エネルギー効率が全然違うのだろうか。あるいは光合成でもしているとか。……宇宙人？

「ほら、まだ若いですから」

「ちょ、待って君いくつよ！私とおんなじくらいじゃないの？」

「……えっと」

「ラギ？」

「どう、なんでしょう……」

しまった。私は言葉を濁しながら誤魔化すように笑う。ここでの年齢の数え方を知らないし、そもそも季節が一巡りするのを「ひとつ」と考えていいものかどうかもわからない。どう答えたものかと逡巡していると、私を見つめるネヴィの眼差しが一層優しくなつて……そのままふわり、と花のように彼女は微笑んだ。

「数え方、知らないのね？」

「……はい」

「ふふ、私もちょっと前までは知らなかったわ。あら？そんな顔しなくていいのに。この国にはまだ、自分の年齢さえ知らない子供がたくさんいるもの」

「でも流石に子供、っていう歳じゃありませんし」

「……ええ、そうよね」

子供じゃないわよね、私も。ぼつりとそんな言葉を零して、ネヴィはそつと顔を伏せた。こちらから見えるその横顔は少し寂しげで、私は見なかったことにしてまたひとつ野菜を手にとった。

ここで踏み込まないのは、踏み込まれたくないから。暴かないのは、暴かれないから。

仲が悪いとは言わないが彼女とは単なる同僚、泥作業仲間だ。友達と呼べるほど親しくもない。私は彼女のことを何も知らないし、彼女も私のことを何も知らない。それでも拒絶はしないで、そこに流れる生温い空気が、きつとどこか楽だった。——お互いに。

二人黙って作業に没頭して、どれくらい時間が経っただろう。どこかしんみりとした空気はいつの間にか消えうせ、遠くに普段通り食堂からの騒ぎ声が聞こえる。日が翳ってきた。そろそろ片付けの時間だとラストスパートをかけていると、ふと、ネヴィが包丁を握った手を止めて思いついたように口を開いた。

「そつえば、聞いた？少し前から中央広場に面白い芸をする一団が来てるって」

中央広場といえは図書館の隣にある広場のことか。妙な二人組と接触しそうになった。

「芸？それって玉乗りとか、そういうアレですか」

「玉乗りって……？ううん、よくわからないけど。とにかく面白いつて評判で、今度の休みに食堂の皆で見に行ってみようって話になつてるの。ラギもどう？」

え。私は間抜けにもぼかんと口を開けて、彼女の方を見やった。何というか、思いがけないことを言われたような気がした。偶に話

はするものの——お菓子には別に単なる報酬だし——私達にとつてとても貴重な休みの日に、誘われる、なんて。それなりに一線を引いた付き合いをしているとわかるだろうに、たとえば仮に社交辞令だったとしても、休日になで顔を見てもいいと少しでも思っのたろうか。なんともおかしな気分だった。

「でも、行つて皆の邪魔になるかも……」

「じゃあ言い方を変えるけど。お菓子あげるから一緒に行かない？」

「私が全てにおいてお菓子で釣られると思つたら大間違いですよ」

「えええ、そうなの？」

「行かせていただきます」

「……ああうん、君がそういう子なの忘れてたわ……」

だから、飽きずに摂取できる食料は本当に貴重なわけですよ、ええ。

低い給料でこき使われ、いや、雇つて貰っている私達にも一応休みというものはある。それは店自体が休む日であつたり、真面目にやっているからとご褒美に貰えるものだったりする。今回の休日は前者であり、だからこそ皆で広場へ、という話が出たのたろう。

しかし、面白い芸とは何なのか。ネヴィの反応からして玉乗りという言葉が通じなかっただろうことを考えると、私が思う芸とはまた違うものかもしれない。最近図書館へ向かうときも、例の二人組がまた現れないかと変に警戒してしまい、用事を済ませたら脇目もふらず家に帰るのでそんなものが来ていたとは知らなかった。

「これでよし、と。後はこのゴミだけね」

「私が行ってきます。ほら、あそこでおばさんが待ちくたびれてますよ」

「あら……。ちょっとゆっくりし過ぎちゃったかしら」

今日は団体様のご来店のせいで皆疲れているようで、片付けのスピードも遅かった。西の空には夕日が一際赤い光を放っている。私も、急がなければならぬ。この世界で忌避されている夜が来る前に――、たとえ私には何の害もなかったとしても。

両手にゴミをしっかりと持って、小走りにゴミ捨て場へと向かった。

どうしようもないことは、ある。どうにもできないことも。

私がどんなに望んでも、偶然という名の下に巡りあってしまう。それを運命と呼ぶなんて馬鹿げたことはしないが。

「本当にここなんだろうな？つーかお前、よくこんな所で……シュルツが知ったら泣くぞ」

「やかましい。文句なら奴らに言え、俺に言うな」

「……しかし、兄貴の店に、なあ。運が良いのか悪いのか……」

耳に残るひとつの名前と、状況を示唆する単語の数々。今すぐ回れ右してダッシュでこの場を去りたい。しかしこの両手にあるブツがそれを許さなかった。ゴミを入れる袋には店の名前が入っていて、どこか別のところに放置すれば不法投棄になる。店には罰則が科され、それに従って私はクビ、無職、その果ては飢え死にだ。選択肢はない。

私はぎり、と唇を噛み締めると、足音をわざと大きくしてそちらに行きますよと宣言しつつ、見えてきた大きな背中、足を止めた。

「あの。申し訳ありませんが、道をあけていただけですか」

ただでさえ狭い通路をでかい身体でふさぐな、この、——赤毛の騎士団長とフラグ美形男め。

声

そこをどけ野郎共。という意味の言葉を、丁寧かつ穏やかに、そこはかとなく遠慮がちな色も含めつつ放り投げる。すると自分達の話に夢中だったのか、はたまたまさかこのゴミ捨て場に用があるとは思わなかったのか——いずれにしろ私の存在に気付いてはいたのだろう彼らは落ち着いた様子で呼びかけに振り向き、瞬間、目を瞬かせた。

彼らの不思議そうな視線はじつくりとなぞるように私の顔から身体、そして両手に持ったゴミ袋へと落ちて。

「あ、ああ！すまない！」

タイミングを見計らいつつがさりと袋を揺らしてやると、主に通路を塞いでいた赤毛の男が慌てたように飛び退いた。直後に響く鈍い音。何事かと視線をやると、飛び退いた際、腰に差した剣をどこかにぶつけたようでありに焦った顔が見えた。……間抜けである。私は騎士ですよと公言しているような分かりやすい格好をしているくせに、反応が鈍い。それとも、そんなに驚かせてしまったのだろうか？

「ありがとうございます。助かります」
「いや……」

「……」

私は軽く頭を下げると、奥に突っ立って沈黙を守ったままのフラグ美形男には敢えて意識を向けずにゴミの山へと近づいた。肌にしばしと突き刺さる視線を感じる。

——落ち着け。

私は何度も自分に言い聞かせる。堂々としていればいい。彼らが私について何か知っているのだとすれば、今、何もせずにただ見守っているわけがない。大丈夫。何も、何も疚しいことなんてないんだから。

既に積んであるゴミを崩してしまわないよう注意して、私はそつとゴミ袋を置き。

そのまま即行で回れ右を——

「失礼。貴女は食堂で働いているのか？……見かけない顔だが」

し損ねた。

先ほど漏れ聞こえた気安げな会話とは打って変わって、誰だお前と言いたくなるほどがらりと口調を改めたいわゆる騎士然とした赤毛の男。その発言からも恐らく彼が『騎士団長』かつ『お菓子の人』であることは間違いなさそうだった。

見かけない顔だなどといちやもんにはか思えない言葉を掛けてくるのも、食堂の女性従業員は全て把握している！なんて意味不明な自信から来ているに違いない。もちろん、私の勝手な想像だけでも。

「私は接客担当ではありませんので、お客様とお会いすることはな
いと思います」

「……？ 君が、調理を？」

「いいえ、主に食材の下拵えを。単なる裏方の一人ですから」

引き止めて何を言うかと思えば。私はにつこりと愛想よく受け答えしつつ、その男の顔を眺めてみた。恐ろしく美形というわけではないが、全体的にさっぱりとした爽やかな印象を受ける。恐らく顔だけでなく性格日常態度諸々を含めての俗に言う“いい男”なのだろう。騎士団長という地位もそれに華を添えている。

（まあ、それにしても素の口調がぞんざい過ぎるような気もするけど）

しかし、私が食堂の人間かどうかなんて制服を見れば分かる筈である。そして閉店直後にゴミ出しをしている時点で下働きだと気付

けばいいのに。よく分からない反応だ。……と、思えたのはそこま
でだった。

「——おまえ、」

「……?!」

「あ、馬鹿!」

突如ぐるりと視界が回る。次の瞬間には、何故かフラグ美形男が
私の顔を至近距離で覗き込んでいた。無造作に掴まれた腕は痛みを
訴えている。近いとか近いとか近いとかそれより前に、——こい
つ、私を、お前呼ばわりしなかっただろうか。

そのたった一言に滲み出る不遜さ。傲慢さ。人の上に立つことが
日常だと言いたげな尊大さ。それらが思い出したくもない「あの男」
の声と重なり、おぞましいほどの嫌悪感が胸いっぱい広がった。

——気持ち悪い。

「……っ……」

——気持ち悪い!

「アーク、やめろ！……怯えさせるな」

頭が真っ白になって、何も考えず反射的に彼の手を叩き落そうと動いた腕は直後に響いた声に勢いを失くした。同時に胸に湧き上がっていた黒い感情も消える。フラグ美形男は、その美しい顔に罰が悪そうな表情を浮かべるとそのまますっと離れていった。数秒の差はあったものの、腕を掴んでいた手も。

「……その、悪かった」

「……………」

いいえと言葉にはせず、私はただ黙って首を横に振る。嫌悪感が消えたがまだ動悸が治まらない。怖いわけではないけれど、苦しい。今すぐこの二人に背を向けて耳を塞いでしまいたい。あるいは、さっさと帰れと二人を追っ払ってしまいたい。

出来もしないことを思いながら、私はひそやかに息を吐いた。ああ、早く。早く、家へ戻らなければ。

「少し、聞きたいことがある。いいか」

——フラグ美形男の声は、「あの男」の声にひどく似ていた。

右手にフラグ美形男……アーク、と呼ばれていた。左手に騎士团长もとい『お菓子の人』……リカルド。そして背後には堆く積まれたゴミ袋の山。完全に退路を断たれた私に、単なる確認としか思えないお伺いに頷く以外何ができただろう。

私はせめてと強い不審を込めた視線を意識して二人に向け、彼らの罪悪感を地味にちくちく刺激しながら言葉を待った。

「それで、何のお話でしょう」

「お前……いや、貴女の職場に、黒目黒髪の間人は何人居る？」

「——」

ほづら来た。軽く首を傾げて考えるふりしながら、思う。フラグ美形男はやはりフラグでしかなかったか。下手に関わらないで本当の本当に正解だった。

「私の知る限りでは、ひとり、ですが」
「名は」

「知りません」
「……」

愛称は知っていても本名は知らない。それは本当のことだ。「あの男」がそうしたように、この会話がいつ脅迫に変わるかもしれない状況で我ながらよく間髪を入れずさりと答えられたものである。何かを探るように私を見据えるフラグ美形男と暫し視線が絡み合ったが、諦めたのは彼の方が早かった。……もしかすると、私から見えないところで騎士団長に諫められたのかもしれない。

(……あれ?)

はた、とここで私はあることに気が付いた。彼は今、黒目黒髪が何人か尋ね、私がひとりと答えたらその人物の名を求めた――。しかしこの時点で少なくともフラグ美形男だけは黒目黒髪であるネヴィと接触している筈である。ゴミ捨て場でぶっ倒れていたのを、そうなるよう私が誘導したとはいえ、彼女に助けられたのだから。だがそうなら彼はネヴィの名をわざわざ尋ねる必要もないだろう。本当に、名を、知らないのではなければ。

「何でもいい、その人物に関する情報が欲しい」
「もちろん謝礼は払うつもりだ。安心してくれ」

がつんと頭を殴られた気分だった。
守ろうと必死に抱え込んだものが見当違いの代物だったような、そんな。

（まさか、……この二人、彼女を探して……？）

本来、黒目黒髪であった『私』——ではなく？

声（後書き）

すれ違いと勘違い。

恋愛相談ですわかります。

畳みかけるように身を乗り出してきた二人に圧され一歩退く。しかし足元でがざりと音を立てたゴミ袋にそれ以上後ろに下がることはできなかった。このままでは生ゴミの山に背中からダイブすること請け合いである。

私はびくりと肩を震わせ……たように見せかけ、怯えたように見えるよう両手を胸元で握りしめてから下を向いた。頭の中ではぐるぐると答えのない思考が回り続けている。

この店で唯一黒目黒髪を持つネヴィの情報を知りたいと彼らは言う。しかし、騎士団長自ら店長に尋ねればいいのでは？身内なのだから簡単に答えてくれるだろう。この世界に個人情報保護法なんてものがあるとは思えない。それとも聞けない理由でもあるのだろうか？

そもそも何故彼らは——フラグ美形男は、彼女の名前さえ知らないのだろう。彼らの言葉を額面通り受け取るならの話だ。地位が高いのだろう自分のことを話せないから、と尋ねなかったから？あるいは、逆に語られなかったか、だ。ネヴィ自身がそれを隠した可能性もある。

……何のために、などと今は考えない。

（あと……、どうしてこんなに勢い込んでるのか）

まるで情報源が私しかないと思わせる態度だった。さつき、私は何を言っただろう。食堂で働いていて、接客をしておらず、食材の下拵えをする下っ端である——などと、特におかしな部分もないはずだ。

「……リカルド。貴様まで脅してどうする」

「なっ、あんたにつられただけだったの！ 大体、いつもそうやって愛想の欠片もないから怖がられるんだよ！」

「へらへら笑えというのか。くだらん」

「誰がんなこと言っただよ？！ええ？」

——待てよ。そういえば今日は団体客で忙しくて、ネヴィは少しの間接客に出ていた。私は買い出しを頼まれて……帰ってきたときに、入り口で屯する集団を目撃したわけだ。騎士団長もネヴィを探していたのなら、あの時に見つけられなかったのか？ううん、女性集団に捕まって足止めを食らっている間に入れ違いになったのかもしれない。

おまけにこのフラグ美形男。騎士団長より更に場違いな彼はこんな店に来れば浮きに浮くだろう。だからこんな時間にやってきたのか？……ゴミ捨てに行ったのが私でなく彼女だったなら、彼らの目的は果たせた、と。しかし、何故——。

（黒目黒髪、だから？）

ひそひそと話す二人を放置して俯いたまま色々考えていた私は、突然わざとらしく響いた咳払いに身を固くした。

「本当に、すまない。貴女を怯えさせるつもりはなかった。信じてくれ」

「……俺は、彼女のことを知りたいだけだ。頼む」

穏やかに、宥めるように。声だけを聞けば誠実で紳士的な印象を受ける。くそ、下手に出られてしまった。片方だけでもあのまま高圧的に強引に話を進めてくれれば、怯え続けるふりをして夜を待つこともできたのだが。あ、危険だから送ろうとか言われて家を持定されても困るか。

どうする。どうやって、この場を切り抜ける。私はゆっくりと顔を上げて、どこか困ったような笑みを浮かべる騎士団長と、無然としつつも反省している様子のフラグ美形男を交互に見やった。

当然のことながら、ここで断ることもできた。どちらも——ひとりはいまいち信用できないが——常識を弁えているようで、恐らくは、暴力に訴えることはないのだろう。自分達が強引に話を進めていることを十分理解している。

ただ断ってしまえば、その言葉の選びようによっては相手に不信任を抱かせることになりかねない。せっかくネヴィにしか目が向いていないというのに、こちらに飛び火するなんてことは避けたかった。

人身御供？薄情者？そんなこと、あの日彼女をゴミ捨て場に追い

やったときから分かっている。

「……………あの、」

——でも。

知っていることなら全部話してやればいい、この状況から一刻でも早く解放されるなら。悪魔の囁きにも似た、そんな切実な欲求を押さえ込んだ感情がここにある。ああ、やはり、私は甘い。というより罪悪感を覚えたくないのだ。罪人になりたくない。責めを負いたくない。

見捨てるのなら最初から、途中で手を差し伸べたりしてはいけない、同情なんてもつてのほかだ、自分が助かりたいなら！……………ああ。所詮、私はどちらも選べない中途半端な存在だ。

「私が言うべきことじゃないかもしれませんが、そういうの、……………
… 良くないと思います」

私のその言葉に、男二人が息を呑む気配がした。

この場をどうやって切り抜けるか？彼女の情報を漏らさず、かといつて彼らを完全に拒絶しないにはどうすればいいか？上手くいかどうかなんて分からなかった。でも始めてしまったものは仕方がない。

私はでき得る限り真剣な表情で、否、きらきらと目を輝かせて真っ直ぐにフラグ美形男を見つめた。ターゲットにするなら、こつちが適任だ。……騎士団長はどうせものすごく女慣れしているに違いないのだから。

「な、……なんの話だ？」

「いえ、ですから。彼女のことを知りたいんですよ？でも、駄目ですよ。周りから聞いたって彼女のことなんて分かりっこないです」
「……え？」

あ、空気が固まった。はっは、よもやそっちに話を持つていくとは思わなかっただろう。さっきフラグ美形男はひとつ失言を犯した。最初は単に黒目黒髪、その人物、と個人を特定しない曖昧なことを言っていたくせに、今度は“彼女”と確実に限定してしまったのだ。語るに落ちたなフラグ美形男。

さて、ここからは大概の年頃の女性が得意とする妄想で話をねじ曲げる。あの強引さはその心に秘めた強い想いゆえ。——何も分

からない様子でばかした言い方をしていたのは、一目惚れだったからだと。

「好きなら、直接会いにいかないと！」

「ばっ……！だ、誰が好きだと?!」

「いえ、まずそこは認めましょう。何事もそこから始まるんです」

「待て！誤解だ！」

「……ええと、……えー？あれ？」

はいはい照れ隠し照れ隠し。仕向けたこっちが驚くほどかあつと赤面したフラグ美形男に、私は手応えを感じ、心の奥底でひそかに安堵した。一か八かの賭だった。もしこれで「は？お前頭大丈夫か？」「戯言を。貴様など切り捨ててくれる！」なんて反応をされたら完全に終わりだった。お偉いさんでプライドが高そうとくればと勝手に作っていたイメージがここまで見事はまってくれるとは。

つまりはあれだ。……このフラグ美形男、案外分かりやすい。ネヴィに助けられたことで、自覚のない想いを抱いた可能性はある。

「彼女は……忙しいときには接客にできることもあるので、それだとあまり話せないかもしれませんが、きっかけにはなると思います。頑張ってください！」

「……」

「あー……そう、か。なるほど。はは……」

ばつと私から顔を逸らして黙り込むフラグ美形男。その耳は薄暗いこの通りでも赤く染まっているのが分かった。よし、諦めたな。そして騎士団長、あれだけ女性に囲まれていたら分かるだろう、女の恋愛話に水を差すのは止めておいた方がいいと。すっかり氣勢をそがれた風の男達に、私はにっこりと愛想を振りまいて先手を打った。

「えっと、もう夕日が沈んでしまいますので、私はここで失礼します。では」

「あ、君！」

まだ何かあるのか。そんな思いで私は足を止める。

「はい？」

「これを。夜も近いのに、時間を取らせたお詫びだ。どうか受け取ってほしい」

「——」

本当にすまなそうな顔で差し出されたのは、一度だけ見たことのあるお菓子の袋。どこから出したのか、取り出された途端、……いい匂いが通路に広がった。しかしそれもすぐに背後からの生ゴミの匂いと混ざりあい台無しだったが。

「新しく作ったやつだね。店で売り出そうかと思っているんだ」

誰が。どの店で。

「今度よければ感想を聞かせてほしい。そう、次の機会に」

ねえよそんなもん。色々突っ込みたいことは山ほどあったが、多分この界限の人間なら常識的に知っていることなのだろう。この断られるとは思ってなさそうな雰囲気からして。私はさっさとこのゴミ捨て場から、二人から離れたい一心で、差し出されたお菓子を丁寧に頂戴すると何とか笑顔を保ったまま踵を返した。

…… ああ、長かった。

「おい、アーク。ちょ、マジ戻ってこい！」
「……」

そしていつまで赤面してるつもりだフラグ美形男。

甘い誘惑、見えない思惑

こつ、こつ、と何度もチョコクもどきで机を叩きながらも視線はお菓子から外せなかった。お腹が空いているのは当然のこととして、この物体。

どう好意的に見ても——怪しすぎた。ものすごく。

あれから私は一度たりともゴミ捨て場の方へ振り向かずに食堂へ戻り、荷物を持って帰途についた。いつもより少し薄暗さの増した通りは少し怖くて、家が見えてくる頃には小走りに急いでいた。なんだろう、日本ではこの程度の暗さなんか全く何ともなかったのに、余計な明かりがないからだろうか？周囲のざわめきは現実味がなく、こちらとあちら、その違いをまざまざと見せつけられる気分だった。

……あの二人。騎士団長とフラグ美形男。

むろん、あれで誤魔化しきったとは思っていない。私は女優じゃないただの一般人だ。演技力なんてたかがしれている。どうしたって不自然さは拭えないし彼らを警戒していることも丸わかりだったろう。それは仕方のないことだった。

ただ、自分達が最初に不審な態度を取ったからそういう対応をされたと、ほんの少しでもそんな風に誤解していてくれればそれで良かった。

「なんだかな……」

左手に持っていた絵本をばさりと放り出して背もたれによりかかる。と、座り心地の悪い椅子がみしりと嫌な音を立てた。フラグ美形男はまだしも、——あの騎士団長。どうもやけに身が軽い。最近ちょこちょこあの食堂に顔を出すのは何の為だ？私があそこで働きたしてから二ヶ月強の間、ちらとも姿を見たことがなかったというのに、なぜ、今。

そしてなぜ、……ネヴィを？

黒目黒髪だからといっても、国が祭りの踊り子を募集したときに見たように、黒目黒髪は集めればたくさん存在しているのだ。それだけが原因だと言うなら、なにも地位のありそうな人間がふたりも関わってまでネヴィ個人にこだわる必要はないはず。何か他の——

——助けてくれたから、というのは理由の一端になるだろうか。フラグ美形男が本気でネヴィに惚れたからとかいうんじゃないだろうな。それなら勝手にやってくれという話ですむけれど。

私は静かに目を閉じて、訪れた仮初めの暗闇の中、今日起こったことを順々に整理していく。何度反芻してもやはりあの二人とのやりとりが頭から離れなかった。

騎士団長がネヴィのことをどうして店の人間に聞かなかったのか
が本当に分からない。黒目黒髪を探していることを誰にも知られた

くなかったから？もし召喚された人物を探しているとして、しかしその召喚という事実を周囲に知られぬよう隠していたいのならまだわかる。

私は城で、喚ばれてから逃げ出すまでの間ずっと、「あの男」としか接触しなかった。「あの男」が死んだ今、誰も彼も私の顔姿かたちを知らないからこそ見つけられないし認識できない。だから……そう、誰も知らないうちに見つけ出したら、誰も知らないうちに……なんてこともあるだろう。

私は深く溜息を吐いた。考えても考えても物騒なことしか思い浮かばない。刃を突きつけて脅してきた男の身内や部下など所詮どう取り繕ったところで同類に決まっている。信じるだけ無駄なことだ。国を救うため——なら、何をしてもいいと思う連中など。

（あーもう、もやもやする）

第一誰にも知られたくないのなら。だったら、どうして私には声をかけたのだろう。黒目黒髪は何人か。ひとり、ならばその名はなにか、などと。黒目黒髪を探している事実を隠すとすれば得策ではないはずである。判断基準が分からないが、やっと見つけた情報源わたしかもしれない存在わたしでも。

——ふわり、甘い甘い匂いがする。

「……………」

私はぱちりと目を開くと、まるで吸い寄せられるようにそれに視線を向けた。美味しそうな匂い。まるで早く食べてほしいと言わんばかりの、甘い、甘い、甘い……。

思わず出る涎とは裏腹に、たらり、と冷や汗が流れた。はは、まさか。まさか、ねえ？一度生まれたある疑念は瞬く間に胸中で広がり、無視できない焦燥を連れてくる。いやまさか。そんな都合のいいことあるわけがない、と、言い切れないのは、現に私の生まれ持った色が「あの男」の手によって奪われているからだ。法術がどんなものか、どんな種類が存在していてどんな効能がありその能力がどういった範囲まで力を及ぼせるのか、私は知る由もない。

しかし人間ひとりを異世界——つまり次元の違うところから引っ張ってくるなどというふざけた能力があるなら。人の記憶をピンポイントで術者にとって都合のいいように消すことなんて簡単じゃないか？そうだ、これは騎士団長に呪われたお菓子かもしれない。

感想を聞かせてほしい、次の機会に、なんて言われてしまったら大抵の人間は食べるだろう。私のような貧民なら尚更のことだ。まして女性に人気がある彼の言うことなら……？

——怪しい。

疑惑を向ければ向けるほど、食欲をそそる香りが強く更に甘くなったような気がした。

——怪しすぎる。食べたいけど、食べたくない。

でも次に会ってしまった時、普通に感想を聞かれたらどうすればいい。あるいは、本当に記憶を消す効能があつて、食べないでいると探られたり怪しまれたりするかもしれない。

「……もつたいないからまだ食べてません、で当分誤魔化すか……」

知らない人からお菓子を貰つてはいけません。世間の常識。でも皆が当然のように知っている人からだったらどうすれば。皆が心から信頼している人だったら。とはいえ私を守る為に回避できるフラグは全力で回避するべきだと信じている。私は勢いをつけて椅子から立ち上がると、そのまま窓際に遠ざけていたお菓子に近づき、恐る恐るつまみ上げ机の引き出しの中にしまいこんだ。

とりあえず、今日食べるのはやめておこう。……色々な様子見も含めて。

ネヴィ。泥作業組にして私の同僚。

彼女はフラグ美形男に何を話して、何を話さなかったのだろう。

彼女は忙しいとき以外裏に引っ込んでいる。普段店に来ても表からは見つけられないとくれば、つまり接客以外を担当しているという結論に達するのは簡単だ。騎士団長が厨房を確認しようにも、店主と兄弟だからといって部外者が調理場に足を踏み入れることを店の人間は許さなかったのかもしれない。飲食店にとって台所とは聖域だから。

もしくはネヴィが自分の職業を話していたのだとすれば、私の言葉から同じ「泥作業組」であることを見抜き、ああやって勢いよく乗りだしてきたのかもしれない。

さて、どうするべきか。彼女の数日にわたる保護の間、男の側から名乗らなかったのだとしても、彼女もまた自分の名前を教えなかったのだとしたら？ タイミングを逃して、ではなく。敢えて教えなかったのだとしたら、……この状況をどう判断すればいい。

高そうな衣服と装飾具を身につけた見目麗しい、ただし口と態度に難ありな青年と『お菓子の人』が、黒目黒髪を——というより、ネヴィその人を探していた、と馬鹿正直に教えてあげるべきか。恋に悩む青年とその友人らしき人にネヴィのことを知りたいと請われたと冗談混じりに揶揄うべきか。

それともただただ口を噤んで、事の成り行きを見守るべきか。

話すか、話すまいか。私は早々にどちらかを選ばなければならなかった。ネヴィが心配だからというよりも、遥かにその事実が私にどう影響するかを心配する気持ちの方が大きい。これ以上二人に関わりたくない。しかし食べていく為に仕事はやめられないし今のタイミングで止めたらそれこそ怪しい。ああ、全く。ゴミ特有の嫌

な臭いが充満しているあの場所でいったい何を語ることがあったのやら。場所を選べばいいのに。もったいない上に傍迷惑だ。

暫くはゴミ捨て場に近づかないようにしようと私はそう決意する。リカルド、アーク。その名を私が口にすることがないように。

「……フラグは立てない、立てさせない。これは基本。これは絶対に守る」

私は、私の平穩を守るためならきつと手段を選ばないだろうから。己の甘さゆえに中途半端に首を突っ込んで、きつと最後は譲れない。

机に放り投げた絵本に手を伸ばすと、チョークもどきを手に取り、再び机へと向き直った。

明日は明日の風が吹くことを祈って。

甘い誘惑、見えない思惑（後書き）

ぐるぐる。

ほんとつに怖いのは？

昨日の夜は散々だった。引き出しの中にしまいこんだ筈の焼菓子に足が生えてじりじり迫ってくる——なんていう馬鹿げた悪夢を見て、夜中に何度も目が覚めあまり眠れなかった。朝になっても結局それを部屋に放置していくのが嫌で、私の荷物の中に入れて食堂に持ってきてしまった。

これが呪いだというなら恐るべきものである。

「おはよう、ラギ。どうしたの、なんだか顔色悪いみたいだけど」

「いえ、ちょっとお腹空いてるんで」

「また?!」

「そんなに驚かなくても……」

今日もまた仕事が始まる。自分に割り当てられたカゴを裏庭に持っていく、洗って皮を剥いては厨房へ、毎日その繰り返し。休憩やそれが近いとき、客が少なくても余裕があるとき以外は特に私とネヴィの間に会話は無い。いつもならその沈黙を心地よく感じていたというのに、今はただ、……重い。

……駄目だ、仕事に集中しなくては。ミスをしてご飯を抜かれようものなら、あの呪われたお菓子に手を伸ばしかねない。

ふう、と知らず溜息がこぼれた。

「ね、ラギ」

「……え、はいっ」

「ふふ。今日もお買い物頼んでいい？お菓子つきで」

たとえば、毎度彼女が持ちかけてくる頼みごとだって、最初の数回はまだしも、もしかしたらもう本当は頼まなくても大丈夫、とか。彼女からすれば異常なまでにお腹を空かせ続けている私への同情でしかない、だとか。目を逸らし続けていることはたくさんあって、それらをただ甘受する私がどれだけ浅ましい人間かなんて自分が一番知っている。

「是非お願いします。……でも、最近妙に餌付けされてる気分なんですけど」

「あ、それは私も。ラギを餌付けしてる気分」

「……」

「そうねえ。野生の動物を飼い慣らす感じ？たまに威嚇してきたりとかして」

「威嚇、してます？」

「あら、店に来たばかりの頃はぴりぴりしてたじゃない」

「そう……でしたっけ」

「そうよ」

そう、だろうな。そうなんだろう。多分今でもそうかもしれない。私はたまに、この世界の人間が何か別の得体の知れないイキモノの

ように感じることもある。夜を恐れ、食物の摂取量も極端に少なく……。こうやって意志疎通できることが信じられないくらいに。違う、と何かにつけて思う。

「んー、ちょっとは懐いてくれた？ほらほら、甘えていいよ？」

「……にゃー？」

「……。ごめん、それ全然似合わない」

「っ、この恥ずかしさをどうしてくれるんですか！」

「あっはは、うそうそ。可愛いわよ！」

だから、だろうか。食材を洗う水の冷たさだけがやけにリアルで、他の全てが夢幻のように、揺らぐ。目立たないようこの世界に馴染もうと努力しても私は文字ひとつ満足に覚えられない。そんな自分が果たしてこの国を救うなんて可能なのだろうか？

『みこ』がどうか、全部「あの男」の空想話にすぎないんじゃないのか？国が黒目黒髪を探しているというのも私の被害妄想で、本当は何も起こってなど……。なんて薄暗いことを考えていると。

「ラギ。ちょっと、ラギったら！」

「……え？」

「そのまま行くと自分の皮剥いちやう！」

「うおわっ?!」

乙女にあるまじき奇声をあげて我に返った。間一髪だった。今度
は私が流血沙汰で減点、とか洒落にならない。お菓子あげるから
も頼むから買物行つて頭冷やしてらっしゃい、とネヴィに包丁を
取り上げられた私は、すすすこと昨日行つたばかりの市に向かうこ
とになってしまった。

まかない抜きは無理。ほんと無理。飢え死にだけは勘弁してくだ
さい。

ざわざわと人がたくさん行き交う中をぬつて、目的の場所へと急
ぐ。ああ、そういえば昨日おまけに貰ったあの得体の知れない軟体
動物は、親切な炊事場のおばさんによつて捌かれ、まかないにもう
一品つくという素敵なご褒美に様変わりした。……ぶっちゃけ、大
して美味しいものではなかったが腹の足しにはなった。……ほんの
少しだけ。

「おじさん、今日もこの魚全部ください」

「おつ昨日の嬢ちゃんか。ありがとよ！ちよつと待ってな、今その
カゴに――」

でも流石に昨日の今日でおまけをくれたりはしないだろうとは思ったが、一応そのお礼として今回もこの店を利用することに決めた。ざつと見る限りどの店も鮮度は変わらず、値段もさして違わないように思ったから。所詮店のお金だし。予算内なら文句はでない。元気いっぱいのおじさんがいそいそと魚を力ゴに入れてくれるのをぼんやりと見ていた、——まさにその時だった。

「あんた、わたしを騙したのね?! ふざけないでよ!」
(っ?!)

衝撃は後頭部に。何が起こったのか全くわからなかった。ただ首筋を流れるどろりとした感覚が異様に気持ち悪くて、私は全身を硬直させる。なに。なにが。……ん、なんか熱い、というかすーすーする。ええ? なんかでろでろする、いやこれ本気で気色悪い……! ぐらり、と視界がぶれた。次いで激しい酩酊感が私を襲う。まるで酒に酔ったような——アルコール? でも、後頭部から酔うなんて聞いたことない……と、思う、のに。

「ああ、なんてことを……! 早く流さなくては。君、どきなさい!」

いまにも闇に落ちそうだった意識の中で、そんな声を聞いた。

——ばっしょん。

ぽた。ぽたり。激しい水音が周囲に響いた後、しんと広がる静寂。

「——」
「じよ、嬢ちゃん……でえじょうぶか……？」

己の濡れた金糸からぽたぽたと滴が落ちている。さきほどまでの感覚が嘘のようにすっかり醒めた頭は、状況を正しく理解してくれた。太陽がまだ高いこの時間、市は人でごった返しているというのに、夜と違って煩いほどの賑やかさはすっかり消え、私を中心としたこの一帯が不気味なまでの静けさに支配されていた。

「……おじさん、魚、ください」
「っでもよ！……あ、いや、わわわかった。もうちょい待ってる」

「……………お願いします」

髪の毛全くと背中にかけてがずぶ濡れだった。下着まで濡れていないのは唯一の救いか。私は髪の毛をぎゅっと絞ると、下拵えのときに使うバンダナでひとつに纏めた。まだ気温は高い。背中には放っておいても乾くだろう。

「君は今自分が何をしでかしたのか分かっていますか？原液を人に使つてはいけないと言っておいたでしょう。下手をすれば意識が戻らないことだってあるんです。そんなことも忘れたと？まったく、君の熱心さに絆された私が馬鹿でしたよ」

「何を言うの！こんなもの、最初の説明と全然違うじゃないの。似非ものを売っておいてよくもまあぬけぬけと！」

「嘘は言っていないですよ、嘘は。使った後は君次第だと忠告しましたよね？無理だったということは、単に君の力不足です。あ、魅力不足と言い換えた方がいいですか？」

「っなんですって……！」

赤の他人に謎の液体Xと水をぶっつけたのだから何を差し置いてもまず謝りに来るのが筋だろう。そう思っていた私は、聞こえてきた会話に振り向こうとしていた身体を思わず止めた。ヒステリックに叫ぶ女と嫌みたっぷりの男の声。どちらも若い。

分かった。もう大体は理解した。多分、私の後頭部に直撃した謎

の液体Xは男が売った怪しい薬で、効能に疑問を持った女が男を問い詰めていたのだろう。激情に任せて投げたのかもしれない。とにかく、私はそのとばかりを食らったのだ。それに驚いた男が、応急処置としてどこからか調達した水を勝手に私の頭からぶっかけたと。

あの症状からして、皮膚から吸収できる即効性の睡眠薬もどき——だろうか。やばい。なにその代物怖すぎる。女はそんなものを一体誰に使ったんだ。そして男はそれに輪をかけて危険だ。そんなものを作り、平然と売る職業なのか？絶対、絶対絶対関わりたくない。謝罪なんか最早どうでもいいからさっさと戻ろ。今すぐ戻ろう！

「悪い、待たせたな。でもってこれ、おまけだ。持っていくな」

「え？あ、ありがとうございます。嬉しいです」

「ああ。それより、……いいの？」

「はい、気にしてませんから。全然気になりませんから」

「……なら、構わねえけどよ」

何やら未だ声高に言い争っているらしい男女に気取られないよう、私はこっそりとその場を後にする。どちら也讓らない、打てば響くような口喧嘩に、住民の注目も私から二人に移ったのが幸이었다。

（もう、買い物……行くの止めようかな……）

おまけに貰った蛇のような魚と、目があったような気がした。

ほんとつに怖いのは？（後書き）

主要キャラは男の方。でも今はニアミス。

現実逃避を繰り返して

何かから逃げるように急ぐ、急ぐ。野次馬の囲いを抜けた瞬間から言い争う声が聞こえなくなるまで、私はとにかく走り続けた。まさか追って来るのではと道中不安に思っていたが、結局誰も私のことなど気にかけていないようだった。それはそれで虚しかったけれども。まあ謎の物体Xはよく水に溶ける成分だったのか、あの気持ちの悪い感触はすっかり消えている。後は肌にはりついた服が乾けば何の問題もないだろう。

上がってしまった息を整えつつ、次第にスピードを緩めた。気付けばもう見慣れた道まで戻ってきている。食堂はすぐそこだ。私は魚と野菜がいっぱい入ったカゴを持ち直すと、意識を切り替えて一歩を踏み出し、

「リカルド様！昨日の焼菓子、ほんとうに美味しかったです！」

そしてそのまま動きを止めた。待て昨日の今日だろうありえない幻聴だこんな昼間から——巡り巡る、現実を認めたくない私の無駄な抵抗は、続いて耳に飛び込んできた言葉に粉碎された。

「あたしもそう思いました！あの、香ばしくって、歯ごたえもよくって、お茶にぴったりだと思います！」

「あのっ食べ損ねたんですけど、いつ売り出すんですか？私、必ず

買いに行きます！」

「リカルド様、次はどんなものを？」

また、……出た。また、出やがりましたか「お菓子の人」！あとひとつ角を曲がれば食堂……というところまで来て、昨日と同じようにまたもや聞こえてきた黄色い声に嫌な予感がしたと思えば。かの長身のおかげで私の立ち位置からでも赤い色が目の端にちらちらとうつる。本当に何しに来てるんだろ、あの人。騎士団長なんていう偉い職業に就いている人間が、連日、しかもこんな時間からふらふらしていいのか？この国、本当に大丈夫か？

（休暇だったら、あんな格好してるわけないし）

しかし女性の話からすると、昨日配っていたのは試作品のようだ。つまりはゴミ捨て場で私が貰ったのもそのひとつ？もしかして誤魔化したんじゃない、本当にただの試作品だったのか、あれ。楽しそうな女性達の声に何だかがつくり脱力したい気分になってくる。

……いやでも、それは呪われていないという証明にはならないな。

……うん。

「君達には普段から助けられてばかりだ。本当に、いつもありがとう」

「ああ、リカルド様！」

「私達でよければいつでも協力します！」

落ち着いた声は耳に心地いいが、同時に不可解だと思う。素の口調がどんな代物だったにせよ、女性に対してきちんと礼儀正しいしあんな風に囲まれても苛立ちひとつ見せず愛敬を振りまく余裕がある。最初はどんなチャラ男か遊び人かと思ったものだが、ハーレムが目的かと今こうやって注意深く観察しても特にそんな雰囲気でもない。

本気で焼菓子に対する反応が気になるのか、それとも、

（――仕事、か）

己の思考に、ぎくり、と肩が跳ねた。角から様子を窺うのを止め、私は軽く頭を振って嫌な予感を追い出す。考えたってどうにもならない。私にできるのは関わらないよう行動することだけだ。

私は来た道を少し戻ってから昨日と同じルートを辿って裏庭へと向かった。

――ああ、何もかもが煩わしい。

「…………あれ？」

予想に反して、静寂のみが私を迎えた。今の時間ならまだここで食材を洗っている筈のネヴィがない。また団体客でも現れたのか？それとも、騎士団長のせいで騒ぐ従業員の分の仕事をやらされているのか？もしそうなら、その仕事は本来私がやるべきことだった筈だ。いささか罪悪感を覚えつつも、とりあえず手に入れた食材をまず厨房へと持っていくことにした。

常に火が焚かれている厨房に入ると、その熱気にほつと身体から力が抜けるのが分かった。……少し、背中が冷えていたのかもしれない。ぱちぱちと薪が弾ける音がどこか暖かい。と、背後からおばさんに声を掛けられた。

「ラギ？つあんた、どうしたんだいその格好！びしょ濡れじゃないか！」

「さつき往来で、その、痴話喧嘩らしきものに巻き込まれて。それでこの惨状です」

「おやまあ……、それは災難だったねえ。ほらこっちへおいで。このままじゃ風邪引いちゃうよ」

痴話喧嘩？当然、そんなものではない。ただ実情はどうあれ、被害者^{たし}を完全に無視してあそこまで言い合える二人はとてもお似合いだと思っただからだ。あと詳しい説明が面倒でもあったので適当に端折って話を流した。

炊事場のおばさんは近くにあった布を取り、私の頭や背中を丁寧に拭いてくれる。その優しい手つきに身を委ねていると、ことごと

と料理が煮立つ音に混じって、どこからか微かにネヴィの声が聞こえた。

「あの……ええと、貴方は……？」

「ああ、申し遅れました。私は町役場に勤めている者です。今回の――を主催しております」

それに応える男の声。その音が、その響きが、己の脳に届いた瞬間に私は、おばさんの手を跳ね除ける勢いで顔を上げた。厨房の入り口近く、食堂全体からは奥の隅の方で向かい合う二人の姿が見える。一人はネヴィ。そしてもう一人は。

「こら、じつとしてな……っあ！ちよいと鍋見てくるからラギ、自分でしっかり拭くんだよ、いいね！」

鍋が焦げ付く気配を感じたのか、おばさんは慌てた様子で厨房の奥へと引っ込んでしまった。私はそれにろくに返事もせずお礼も言い損ねたまま、自然と視線がそちらに向かうのを止められなかった。厨房の入り口に近い席に座るひとりの青年と、トレイを胸に抱え込んだまま可愛らしく首を傾げる我が同僚。

絡まれている？ここからは分からないが、それよりもっと重要なことがある。

今、あの青年は何と言った？町役場の人間？——嘘だ。だって彼は、いつか図書館への道を塞いで喚いていた迷惑極まりないインテリ男じゃないか。あの時着ていた服からして、主に平民が働く町役場の人とは到底思えない。黒尽くめの騎士とも親しく話していたようだし、城の関係者には違いなだろう。だが今よくよく見ると、あの日とは違って確かに平民らしい服を身に纏っている。特に華美な装飾もない。言われればそう信じてしまふくらいにはそれっぽいと頷けるような。

……全く暖かみの感じられない声色を除けば、だが。

何を話しているのだろう。そう気になるのは自然なことで、けれどわざわざ格好を変えてまでここに来る青年があまりにも怪しすぎて私は布を頭から被ったままその場に立ち尽くした。外が騒ぎになっているせいか食堂内の人もまばらで、もしやそれを狙つての接触かと勘ぐりたくなるほど、本気で怪しい。

「はは、突然すみません。もう選考は終わってしまいました、あまりに——の役にぴったりだと感じまして。思わず声を掛けてしまいました」

「まあ、……——の役だなんて、光栄です」

距離があるからか？単語がいくつか聞き取れない。耳を澄ますように思わず意識を向ければ、何故かきいんと耳鳴りがした。

「ご謙遜を。貴女なら文句なしに採用されたでしょうに、選考には来られなかったんですか？」

「……っ……それ、は」

足が自然とそちらへ向かう。何かに呼び寄せられるかのように、戸惑い俯く彼女の元へ。そう、彼女はどうしてもか顔色を失くしていた。聞かれたくないことを聞かれたとでもいうように。それを受けた青年もまた分かりやすく空気を尖らせ、そのまま畳み掛けるように言葉を紡いだ。

「どうしても祭りを成功させたいと雇い主が言うものですから、今回、賞金を奮発しまして。お陰で国内に住む殆どの黒目黒髪がいらしてくださいましたが……残念なことに、貴女は興味がありませんでしたね」

声だけを聞いている私にも、含まれた意味は理解できた。こんな所で働いているくせにお金欲しくないなんてあり得ない、と。細くて綺麗な手を長時間水にさらし土で汚して日銭を稼ぐ生活から抜け出すまたとない機会なのにと。

「それとも他に、何か、理由でも——？」

鋭く深く、抉るような、言葉だった。彼はこの一言の為に来たのだろうと思わせるほどの強い意志が込められている。問われているのはネヴィだというのに、まるで彼女を通り越して私に向けられているかのように錯覚してしまう。

私ははっと我に返ると、図書館前での時と同じように足を止めないままさりげなく裏庭へと続く扉へ方向転換した。聞かなかったことにしよう。見なかったことにしよう。耳を塞いで目を閉じて、何も分からないと言い続けていれば誰にも見つかりはしないのだ。彼らは何も知らないのだから。

一步一步、前へ進むごとに二人との距離は近づいていく。もう少し。あと少し。布で顔を隠したまま向かい合う二人の横を何事もなく通り過ぎた、そう思ったとき。

「これ、実は……自前じゃ、ないんです」

「——え？」

（え？）

……なに？

捜し求める人々

裏庭へ向かう足を止めるわけにはいかなかった。
身体が鉛のように重い。一步ごとに遠のいていく二人の声。

「――昔――の――」
「っ、それは――」

自前じゃない？……髪が？瞳が？言葉通り受け止めれば、ネヴィの黒目黒髪は生まれ持ったものではないということになる。私が奪われ、今も尚切望するその色。――ああ、この場に留まってもつと二人の会話を聞きたい、けれど今立ち止まれば私の最も近づきたくない部類の人間に気付かれてしまう。

私が耳をそばだてていることを知れば、きっと青年はその鋭い目をこちらに向けるに違いないのだ。穏やかさを装った冷やかな視線、世間話のふりをした尋問。どれを取っても歓迎したいものはない。私はともすればその場にうずくまってしまいたい自分を叱咤して、何とか裏庭への扉に手を掛けた。

「偽りの色を纏って舞うなんて、……そんなこと、神様への冒瀆だ
と思いますから」

どこか虚ろなネヴィの声が、頭の中で何度も何度も反響していた。

湧き水のせせらぎを聞きながら、私は自分の定位置へと腰をおろした。水分を吸った布の重みで自然と頭が下がる。目を閉じれば少し前まで町中に貼られていた踊り子募集の紙が思い浮かんだ。

（……やっぱり）

ぐ、っと息が詰まる。分かつてはいた。気付いてはいたのだ。ただ考えないようにしてただけで。毎日充分な食事を得ることができない辛さもそれに拍車を掛けた。余計なストレスを溜め込めば生きること自体苦しくなる。私は顔を両手で覆って、深く深く息を吐いた。

国が本当に、真実、黒目黒髪の『誰か』を捜しているかどうか？それは今、役人に扮装したインテリ男——シュルツといったか——が自らの行動を以って教えてくれた。

踊り子の選考は城で行われる。だからこそ城下町であるここにたくさん黒目黒髪達が集まったのだし、あれだけ大量の貼り紙が作られた。支払われる報酬もあわせて全体に掛かる費用は莫大なもの

だっただろう。まあ、この国の予算が圧迫されようが私にはどうでもいいことだが。

青年が町役場の人間だと仮定して。立ち寄った店でたまたま見つけた黒目黒髪が選考に来ていたかどうかなんて、彼に分かるだろうか？もしかしたら行って落ちたのかもしれない。本人に聞かない限り普通は分からない。それはないと言い切るとすれば、彼自身が選考に深く関わっていた……か、あるいは、その情報を得られる立場にいる、ということ。

少なくとも、日本で言うところの“町内会”程度の規模でしかない町役場に勤めているとはどうしても思えなかった。

（胡散臭いにもほどがある、っての）

大体報酬云々の話にしたって、ネヴィが物凄く給料の低い泥作業組であるかどうかなど、その時点では接客をしていた彼女を見て気付くだろうか。……土で薄汚れた爪を見れば分かるか？とはいえそこまで瞬時に判断して尋問するなんて普通の人間なら絶対にしないと思う。

——つまり、彼は、ネヴィに関して知りすぎている。

最初から彼女のことを調べていたと考える方が自然だった。もっと邪推するなら、騎士団長を使って店から人を出し、二人きりで会話しやすい状況を作った、とか。考えればいくらでも思いつく。不愉快なことに。

そもそも、何故、ネヴィなのか。

今日まで幾度もその疑問が浮かんでは消えていった。しかし今、私の頭の中でいくつかのピースが合わさり、ひとつの答えを導き出していく。あながち間違っではないという確信もありながら。

踊り子の募集は確かに黒目黒髪を簡単に集めるいい方法だったのだろう。さきほど青年は国内にいる殆どの黒目黒髪が選考に訪れたと言っていた。それで見つかるなら御の字、けれど奴らは見つかるなんて最初から期待していなかったのかもしれない。なぜならこうして、その募集に“来なかった”黒目黒髪を調べにきているのだから。地位の高い人間が、わざわざ自ら出向いてまで！

（でも、ネヴィの黒目黒髪は本物じゃなかった。……ってことは、当てが、外れた？）

彼女が黒目黒髪を自前ではないと言った時の彼の反応を思い出す。まさか、という失望の響きが宿った声。ああいう系統の人間は相手の嘘を見逃したりはしないだろう。だから多分、本当のことだと思う。そして青年の驚きようからして、彼は生粋の黒目黒髪を捜していたのだと分かる。

「っあーもう、こんがらがってきた！」

私は苛々して頭に被っていた布を地面に叩きつけた。考えれば考えるほどわけがわからない。とにかく、国が黒目黒髪を捜していることは事実として確定した。『みこ』がどうとか、国を救うためだ

とか「あの男」がぼざいたことからしても恐らく私のことなのだろう。

だから？そう頭の冷静な部分が囁いた。

名乗り出る義理がどこにある。どうせ求められることは変わらないのだ。国のこれからに興味はない。私のこれからは——まあ、この不安定な生活が改善されてから考えればいい。

ぱん、と一度両手で顔をはたいて気合を入れなおす。仕事はまだ終わらない。ネヴィと青年とを私が引き合わせてしまったかもしれないことに謝罪の気持ちを込めて、彼女の分まで下拵えに精を出すことにした。

今日も今日とて食材の下拵え。接客担当の五分の一くらいの給料で、私達は毎日を生き延びている。特に代わり映えのない日々が続く。唯一変化があったとすれば——あの日から、ぱったりと騎士団長こと「お菓子の人」が店に姿を現さなくなったことくらいか。

「ラギ？　なに、そんな溜息吐いて。大丈夫？」

「……最近、来ないですね。お菓子の人」

「騎士団長だってば。……まさかまたお腹空いてるの？」

「人間、お腹が空かない日はないと思います」

「そういう意味じゃなくて。って、分かってるでしょ！」

ゴミ捨て場で貰ったクッキーは、もうとっくの昔に私の腹の中に収められ消化され跡形もない。人間としてどうかとは思ったが、いつか食堂の前で騎士団長に「食べ損ねた」と嘆いていた女性従業員を捕まえて、半分お裾分けしてみたのだ。彼女はとても喜んで大事そうに持って帰り、翌日、本当に美味しかったとお礼を言いにくれた。

……毒見させたと言われても仕方がないことをしたと思う。彼女の健康や話し方に何の変化もないことを確認して——次、空腹を我慢しきれなかったときに、食べた。

何も起こらなかった。普通に美味しかった。日本で散々クッキー類を食べ続けていた私にとっては、驚くような味ではなかったけれども。

「そつえばラギ。明日、本当に楽しみね」

「中央公園前現地集合。はい、お菓子が待ってますから絶対忘れません」

「えーその言い方可愛くない。どうしよっかなあ」

「冗談です私も心から楽しみにしてます！」

「……つぶ、あはは！心配しなくてもちゃんと持っていくわよ、もう。必死なんだから」

ネヴィが笑うのにつられて私も自然と笑顔になった。そこに炊事場のおばさんが加わってたまに雷を落とされて。そんな日常。ああ、とても妙な気分だった。一方では笑顔で誰かを利用し、一方ではこうやって厭っていたはずの交流を楽しんでいる。どちらも表面的な関係にすぎないのに。決して何も生まないのに。

『みこ』。国を救うために召喚された存在。
何から救うのか、どうやって救うのか、それ以前に真実か否かなんてことさえわからないこの状況で。

私がこの国を救いたいと思う日が、いつか、来るのだろうか？

探し求める人々（後書き）

肝心なところが聞こえていないし情報量も少ないのでどこかずれてる。

下半身を鍛えるべきでしょう。

図書館の隣に位置している大きな広場。その奥から一本の道で繋がれた場所、それが中央公園である。普段から誰でも自由に出入りできるが、楽団など国々をまわって興行する団体の場合、管理所に申し込みさえすれば無料で長期間の占拠を許されるという。緑豊かな自然に四方を囲まれた空間は、どこか日常から切り離されたような不思議な感覚を私達にもたらしている。

ネヴィとの約束——といっても、時計なんてものは存在しないので、個人個人で正確な時間を知ることができない。唯一、一日に三度鳴らされる教会の鐘の音で大ざっぱな時刻を知るくらいだ。今日の待ち合わせだって、昼の鐘が鳴る頃に中央公園前に集合、という何ともいい加減なものだった。もっと酷いときには、太陽がどこそこ辺りに来たら……なんて誤差の大きそうな約束も交わされたりする。それを日常としている彼女達に私は何も言えず、ただ遅れるのが嫌で少し早めに部屋を出た。

公園には入らず、広場の方でネヴィ達が来るのを待つ。ここからでも、道の奥に広がる公園が賑わっているのが見えた。ど真ん中に大きなテントが張られ、漂う独特の雰囲気があるでサーカスのようだと思ふ。もしかしたら本当に玉乗りとかそういう大道芸のような見世物なのだろうか。ネヴィの反応からしてもその認知度は低そうだし……珍しく思われても不思議じゃない。

(でも、……あんまりこの場所には似合わないかも)

落ち着いた空間の中に、大きな胡散臭いテント。そのアンバランスさに戸惑いを覚えるのは私が異世界の人間だから？それに面白いと評判だったと彼女は言っていたが、何がどう面白いのかさっぱり

伝わってこない評価は少し奇妙な印象を受けた。

フラグ美形男も、騎士団長も、——似非役人も、あれから一度たりとも会わないし見かけることもない。最近になって、やはりあの数日間とは異常だったのだと思う。普段すれ違うことすらありえないような連中と何度も出くわした事実は、そこに意図的なものが含まれていたことを示したようなもの。似非役人との邂逅からネヴィの周囲はすっかり落ち着きを取り戻した。

それは同時に私の平穩にも繋がり、空腹がいつまでも解消しないことを除けば、それなりに心安らかに暮らしている。

「あつ、やっぱりもういた！ラギ、こっちこっち！」

聞き慣れたよく通る彼女の声に呼ばれ、私は広場備え付けの椅子……らしきものから腰を上げ振り向いた。広場の入り口ので、後ろに食堂の従業員仲間を幾人か引き連れたネヴィがぴょんぴょん飛び跳ねている。なんだか、いつもより随分とテンションが高いような気がする。お互い走り寄って合流すると挨拶もそこそこに私達は公園へと向かった。

中央公園、テント前。やっぱり近くで見てもどこか異質なものを感じた。“らしく”ないというか。やっぱりこの町には似合わない外から見えないようぴっちり隙間なく閉ざされた入り口も、閉塞感を助長させる。

「……変わった建物ね。外国のものかしら？」

「うーん、見た目は南国っぽくない？」

「あ、分かる分かる。そんな感じするよねえ」

「あつちで説明してるみたいよ。行ってみましょ！」

「……………」

私のイメージする「南国」にはかすりもしないぞ、これは。と彼女達の会話を聞きながら全体図を眺めた。価値観の相違というものだろうが、皆特に怪しむ素振りもなく近づいていく。私は微妙に気が進まない自分を持て余しつつ、入り口付近で客寄せをしている男——人の興味を惹くためか、顔の半分を何かの頭蓋骨で隠し頭から毛皮を被るという奇抜な格好はどこからどう見ても怪しさ爆発状態だった——の方へと足を進めた。

客寄せならここじゃなくて広場か、図書館前あたりでやればいいのに。あ、子供は泣くかもしれない。

「さあさ、今入らないとそろそろ満員だよ！　おっと、そこのお嬢さんたち——」

目敏く私達を見つけた男から、中の見世物について軽く説明を受ける。お代は帰りに気持ちの分だけ。中は暗いので段差に気をつけるように。連日満員御礼で今日は特別に飲み物を入り口で配っているからそれを受け取って欲しいこと——。変な格好にしては口調がしつかりして言うこともまともだった。外見で判断して悪かったな、と反省しつつ、説明を終えて入り口へ誘う男をもう一度見やる。すると向こうも私を見ていたのか目が合い、そのままにたりと笑われてどきどきしてしまった。

……悪い意味で。

中には、予想に反して対面式の舞台があった。テントの形状からサーカスだと頭の中で思い込んでいたせいか、いわゆる全方位に客を配置する円形構造かと勝手に思っていたのだ。狭いとは思わなかったが決して広くもない造りをしている。満員御礼など言うからもちぎゅうぎゅう詰めになるのを想像していたが、そうでもないようだ。今回だけがそうなのか、それとも、この世界での満員とはこういうものなのか。いまいち釈然としなかったが顔に出さないよう努力した。

入り口で呼び込みをしていた男がひとりひとり、丁寧にジュースを配ってくれる。無料サービスとはまた至れり尽くせりな話だった。タダより高いものはないと良く言ったものだが。薄暗い中では正確な色は分からなかったけれど、爽やかな柑橘系の匂いが鼻をくすぐる。私の隣で美味しい！と感動したようにネヴィが叫ぶので、どれ、と私もコップに口を付けた。

「…………おねえちゃん!!」

どすっ。

「ぶほあっ!」

「えあっ?!」

腰に重い、重い衝撃が来た。日々酷使している身体は見事耐えきった……なんてわけもなく。座つての作業が多いため酷使しているのは主に上半身だから仕方ないことか。とにかく私は何の前振りもなく襲いかかってきた横からの力に耐えきれずたたらを踏み、口に含んだばかりのジュースを前方にすべて吐き出し、傾いだ身体を支えようとしてくれたネヴィを巻き込んだ拳句、彼女のその右手に握られていたコップの中の液体を顔面からもろに被った。

それはまるで一連のコントのようだったと、後々思い返しては悶絶して転げまわりなくなるほど恥ずかしい出来事だった。

「ラ、ラギー?!　だ、だ大丈夫? 顔からいったよね、ああごめん、ごめんね!」

「……い、いえ、大丈夫です。私こそすみません」

顎からぼたぼたと落ちる滴はひどく甘い匂いを放っており、ああもったいないと思うず口の端をべろりと舐めてしまった。ああ、これ、確かに美味しい。奇跡的に私のコップの中のもののは半分以上残っていることに安堵を覚えた。

ふと、そこで気付く。あの衝撃は一体……いやそれ以前に私の腰辺りに巻きついていっているものは何なのだろう。私はジューズ塗れになりながら恐る恐る、ぎりぎりどと軋む首をゆっくりと下に動かした。

——子供、だ。

小さな女の子。豪快に全体重をかけてタックルをかましてきた少女は、私に抱きついたままぴくりとも動かず離れない。むしろ、

(……震えて……?)

お姉ちゃん、と、呼ばれた記憶は薄っすらある。もちろん私に姉妹はいない。ここでも、あちらでもだ。もしかしてこの子は迷子だろうか？この薄暗い中家族と離れ離れになったのならそれは心細いことだっただろう。

この人にも話してお姉ちゃんとやらを探して貰おうかと首を巡らせれば、突然、ネヴィに引っ張られた。……少女ごと。

「なにぼさつとしてるの、ラギ。早く洗わないと駄目じゃない!」

「ええそれはもう、私、外で洗ってきます。あのですからこの子――」
「うん。皆、ごめん。すぐ戻るから気にしないで見ちゃっててね！」

いや、それは私の台詞なのですが。喉まで出かかった言葉は結局声になることはなかった。迷子を誰かに託したら一人で出て行くつもりだったけれども、ときばきと話を進め皆に行ってくると宣言してしまったネヴィに、そして行ってらっしゃいと送り出す皆に、私は大人しく従うしかなかった。

三人でテントから出ていく際、ジュースを配ってくれた怪しい格好の男にももの凄い目で睨まれてしまったのが死ぬほど怖かった。開幕の邪魔をしてみません、騒いでもみません、でも始まる前だからいいですよ？……ね？

下半身を鍛えるべきでしょう。(後書き)

新展開突入。

事件発生、行動開始

せっかく無料で手に入れた貴重な美味しい食料だからと中身が残ったコップを恭しく川べりの岩に置いて、私は——正確に言えば私と、テントを出てからもずっと私の腰に抱きついたまま離れない少女は、公園をぐるりと囲むように流れる川のそばにしゃがみこんだ。恥ずかしいので人目につかないようテントの裏側を選んで。

濃厚な果汁の匂いは本当に食欲をそそるものだったが、自分から薰っていたのではありがたみも失せる。今ではところどころべとついてきたので早くさっぱりしたかった。ただ、川の水があまりに透明で綺麗だったので直接汚れた手をつ込むのも何だか気が引けてしまい、持っていた適当な端切れを二枚ほど濡らして拭うことにする。汚れた布は持ち帰ってから他のものと一緒に洗おう。

「ラギ。ちょっと上向いて」

「……こうですか？」

「ん、そのままそのまま」

ネヴィは私の背後で膝立ちになり、ひどく丁寧に髪の毛を拭いてくれている。炊事場のおばさんにも思ったことだったが、その手つきが本当に優しくて、自分がまるで幼子に戻ってしまったような羞恥を覚えた。

……やっぱり迷惑を掛けてしまった。

ふと、そう、思う。肝心なときに限って空回りしてしまうのは私の欠点だった。いくら不意打ちだったからといって、他人を巻き込ま

ないよう注意するぐらいのことはできたかもしれないのに。

「よし、と。とりあえずこんな感じでいいかな？どこかまだ気持ち悪いところとかない？」

「いいえ、特に。かなりさっぱりしました。……ありがとうございます」

「どういたしまして！」

笑う彼女の目は私への同情に満ちていて、普通はこうだよな、と内心頷く。あの怪しさ爆発の客引き男はいったい何だったのか。騒いだこちらが悪かったかもしれないが、大丈夫ですかの一言もなくあんな射殺しそうな目で見てこなくてもいいのに。頭蓋骨の穴の隙間から見えた片目が異様に血走っていたように見えて、軽くホラーだった。怖すぎるわ！

一応客商売だろうにそういうところには教育が行き届いていないようで、サーカス団もどきの印象が少し悪くなる。私は顔と腕その他をあらかた拭き終わると、気を取り直して傍で俯く少女にできるだけ優しく声を掛けた。

「ねえ。あなた、お姉ちゃん、探してるの？」

「……………」

「はぐれちゃった？」

「え？ この子、ラギの妹なんじゃなかったの？！」

「違いますよ。多分迷子かなにかだと思っんですけど……………」

背格好が似ていたとか、恐らくはそんなところだろう。人違いだともうとつくに分かつているだろうに必死でしがみつく少女がいじらしくなって、私は思わず口元を緩ませた。——とはいえ、まだ見世物が始まっていない状態で家族とはぐれたことに気付かないなんて、余所見をするにもほどがあると思うのだが。しかも大して広くもない空間であれだけ大きく響いた「お姉ちゃん」コールに何の反応もないというのも……おかしい話だ。

不思議に思つて首を傾げると、似たような表情を浮かべたネヴィと目が合った。……やっぱり、おかしい。お互い同じことを思ったと、何故か確信した。

ネヴィはおもむろに少女ににじり寄ると、にっこりと華やかな笑顔を浮かべながら口を開く。

「ね、ね。君、お名前は？私はネヴィ。こっちのお姉さんはラギよ」

「……。……ルカ」

「ルカ？あら、可愛い名前ね。教えてくれてありがとう」

少女——ルカ、は、恥ずかしいのか数秒躊躇ったあと、それでもはつきりと自分の名前を答えてくれた。ただ離れてくれる気はないらしく、むしろ更にぎゅっと抱きつかれてしまった。だからといって無理矢理引き剥がすほど鬼ではないし邪魔でもないと思うので好きにさせておく。ふわふわの亜麻色の髪を撫でながら、少しでも彼

女が安心できるように。

「君のお姉さんとは、どこではぐれたの？覚えてるかな？」

「……あの……」

「ん？」

「……いなく、なっちゃったの。ここで」

ルカは私のすっかり贅肉がなくなってしまった腹に顔を埋め、更にぎゅっと——というよりはぎりぎりとは締め上げてきた。まずい。このままの状態が続けば今日食べた昼食が口から産まれそうな予感がひしひしとする。ああもつたいない、いや、汚い。そんな私の切実な葛藤を知ってか知らずか、ネヴィが笑顔を崩さぬまま次へと話を進める。

「そのときのこと、詳しく話してくれる？私達きつとルカのお姉さんを見つけてあげるから！ね？」

「……っ、お姉ちゃんたち、ありがとう！」

ぎりぎり、ぎりぎり。あの、そろそろ本当に限界なんですけどどうすればいいですか？

見つけてあげるといふ言葉に安心したのか、私の腰と胃周辺はようやく解放された。子供の力と侮るなかれ、皮下脂肪を順調に消化していつている今の状態ではかなりきついものがある。これで成人男性に思い切り抱き締められようものならあばらなんか簡単に折れてしまいそうだった。骨粗しょう症になっていたらもう目も当てられない。さり気なく腰まわりをさすりつつ、ル力の話に耳を傾けた。

曰く、彼女は一昨日姉とその友達と一緒に中央公園へ訪れた。目的はもちろん噂の“面白い芸”。今日の私達と同じように客寄せに誘われ中に入る。しかし、珍しい見世物を楽しんでいる最中にル力の姉の具合が悪くなってしまった。ふらふらしてまともに歩けなかったので、ここの人の申し出に甘えて奥で休ませてもらったという。

「終わっても良くならなくて、お医者さまにつれていこうって、でも、わ、わたしお薬のまなきやいけなかったから」

涙を滲ませ、時折しゃくりあげながら彼女は語る。断片的なそれを繋ぎ合わせると、つまり、姉を医者につれていくことになったがル力は薬を飲み、家に帰らねばならず、姉の友人のひとりに任せて

公園で別れてしまった。

「それで、いなくなった……？」

医者に行った形跡もなく、送っていったはずの友人もまた行方が分からないという。……どう考えても誘拐あるいはそれに準ずる事件に巻き込まれたとは思えないのだが、そうになると、私達の手に負えるものではない。ネヴィも分かっているのか、私に向かってひとつ頷くと少女に向き直った。

「ルカ、それは誰か——あ！そう、騎士団に相談した方がいいと思うの」

「きし……だん？」

「市民を守ってくれる人達のことよ。すっごく強いんだから！必ずお姉さんを見つけてくれる。もちろん私達もできることは協力するわ。えっと、そうね、この人には話してみたの？」

「……ううん、まだ。……ちよつと、こわくて」

「確かに、あの格好はないですよね」

「や、やだもうラギったら。そんなこと言っちゃ悪いでしょ？」

「顔、笑ってますよ」

「……えへ」

まあ外見はアレだが喋ればまともだから聞けば答えてくれるだろう。とそこまで考えて、脳裏にあの血走った目が甦りまた悪い意味でどきどきした。憎まれているのかと錯覚するほどの視線の強さ。ジューズを零したことに怒ったのか、騒いだことに怒ったのか――

「どちらにせよ、もしかしたら元凶である私は話さえ聞いてもらえないかもしれない。そうでなくてもあんなに睨まれた後では会いたくないというのが本音だった。」

そういうこともあって、私はここではなく比較的良心的だろう公共の施設を頼ることにした。なんとかそっちに誘導できるよう、ネヴィに質問を投げかけて。

「どこか、こういうことを相談できるところってあるんですか？」

「そう……ね。確か、相談専門の部署が騎士団の中にあったと思うんだけど……」

相談専門。言葉の響きから町役場の方かと思ったが、騎士団の中にとはまた斬新だった。腰に剣を差したいわゆる騎士然とした青年がおじいさんおばあさんの悩み事をきく、なんて阿呆な想像をしてしまい私は慌ててそれをかき消す。人が二人も行方不明になっているこの状況で考えることではない。

「じゃあそこへ行ってみませんか？私達だけであまり無闇に動いても……」

「そう、ね。うん。分かってる。――ルカ、ちょっといい？」

「なあに？」

「とりあえず、私達にお姉さんのことを教えてくれる？」

——外見とか、その時の服装とか。

そんなネヴィの言葉に、少女は涙を自分で拭って力強く頷いた。

選択した行動はキャンセルされました。

テントの中から、わあつと歓声が聞こえてくる。公園に来たばかりの頃は確かに中の見世物に興味があつたが、最早今は全然気にならない。……そもそも気持ちとして現実に出せるお金は雀の涙のようなもので、それも身を切るような思いで貯金したものだったから——正直助かったのも事実だった。だからこそ余計この可哀想な少女を見捨てられない。たとえ騎士団という私にとっては厄介かもしれない場所に赴くことになるうとも、だ。

まあ、相談所なんてところはあまり地位の高い人間を使つたりはしないだろう。市民との繋がり、いわゆる窓口でしかないはず。人々のどこか驚きの混じつた歓声を背に、人気のないテントの裏で私達は顔をつき合わせて話を続けていた。

「おしごとの帰りにみんなで来たから、服はおそろいだつたんだよ」
「お揃い……制服つてことね。お姉さんはどこで働いてるの？」

「っ、……」

「ルカ？」

「……………東の、あかいお店」

東といえば、——花街か。今まであまり探索したことのないこの城下町を思う。どこで誰に会うかも分からない、どこでどんな厄介事に巻き込まれるかもしれないと考えただけで外出する気は起きなかった。それに泥作業という重労働は案外負担で、貴重な休みは身体を癒すことに費やすのが日常だ。しかしそんな私でも、管理人

のアーニーさんから受けた一通りの注意……忠告、のおかげでどこに何があるのかは大体把握している。城下町で東といったらいわゆるそうついた店が並ぶ場所、と暗に意味するくらい有名なところだった。

もし私があの時食堂で雇ってもらえなかったらいつかはそこに身を墮としていたかもしれないと思えば——、……いや。私は、そうしてまで生きることには執着しただろうか。生きるためなら何でもすると割り切れただろうか。なんとなく、そういう自分が想像できない。

(……死ぬのは絶対嫌だけど、ね)

それと同じくらい、痛いのも苦しいのも辛いのも本当はごめんだっ
た。

「そつかあ。じゃあ、お姉さんはどんな人？」

ルカの姉がどういった仕事をしているか分かってても、ネヴィは眉を顰めることなく、たださりと流して次の話題を振った。少女は何か言われると思ったのか俯き震えていたようだったが、あっさり話題が移ってしまうと大きな目をぱちくりと瞬かせて私達を交互に見やる。私もどうこう言うつもりなどなかった。娼婦を底辺だというのなら泥作業組も底辺を彷徨うもの、どちらも大して変わらない私達だって所詮使い捨て——何かあったら即刻首を切られる程度の存在でしかないのだ。

そう内心自嘲しつつ、私は戸惑った様子できよろきよろするルカ

の頭にぽん、と手を乗せ、宥めるように撫でてあげた。こんな些細なことに笑顔を取り戻してくれる少女はなんて素直に育ったいい子なんだろう。

「お、おねえちゃんは若くて、優しくて、ええと」

「ほらほら落ち着いて。ゆっくり喋っていいから」

「うん！あのね、あのね、きれいなみどり色の目をしてるの。宝石みたいにきれいなんだよ！」

熱心に語る彼女のきらきらとした瞳が、本当に姉が好きなんだなと思わせる。その姿はやけに眩しかった。やっぱり四の五の言わずにさっさと騎士団相談所とやらに行くべきなのだろう。失踪したのが一昨日ならまだ希望はある。最悪の可能性？そんなもの、他の誰かが考えていればいいことだ。

「それから、えっとそれから……」

言いたいことがありすぎて混乱しているのか首を傾げて悩む少女の様子はとても可愛い。つられてもう一度くしゃりと頭を撫でるとル力はくすぐったそうに身をよじって私を見上げ、そしてぱあっと顔を輝かせた。その視線の先にあるのは、私の、髪？

「あとね！おねえちゃんは、ラギお姉ちゃんみたいに髪の毛がきらきらしててね、お店でもいちばんなんだって！」

「私みたいに？——ああ、それで、間違えたんだ？」

「……う、あの、ごめんなさい。ほんとにおねえちゃんかと思っちゃって……」

「いいよ、もう平気だから。私は気にしてない、だからあなたも気にしない、ね？」

「……うん」

視界に入ることすら嫌悪してしまう己の金髪を少女が羨望の眼差しで見えることに、私はずきりと胸が痛んだ。いつまで経ってもこの色には慣れないし、心の奥底に飲み込んだ激情は密やかにくすぶり続け決して消えることはない。うまく笑えているかどうか自信がなかった。ただただ、自分のものではない色が忌々しい。

——ふと、さっきからネヴィが黙りこくっているのが気になった。

暗くなりがちな思考を止め、一体どうしたのかと彼女が立っている場所へ視線を向けた私は思わず目を見開いた。ネヴィの顔色が蒼白を通り越して土気色になっていたからである。なにか恐ろしいものでも見てしまったような——恐怖と、焦燥に染まった漆黒の瞳。桜色の唇が戦慄く。

「……若くて、金髪で、……みどり翠色の目？」

感情の窺えない声で、ネヴィは呟くように言った。何も言えずに

見守っていると彼女はどこか苦しそうに表情を歪め、胸の前でぎゅっと両手を握り締める。ジュースで汚れた布切れが乾いた音を立てて地面に落ちた。

「お姉ちゃん？どう、したの？」

この痛々しい沈黙はなんだ。私はどうすればいい。困り果てて今度私は私が二人を交互に見やる羽目になった。ルカの心配そうな問いかけにも応えずただ俯くネヴィの瞼にきらりと光るものが見える。

（つて、泣いてる?!）

今の会話のどこに泣く要素が？とひとり慌てていると、突然、彼女がぱつと顔をあげた。

「ラギ……」

そしてじつと私を見る。見る。見続ける。視線がぱつちり合ったかと思えばふいつと横に逸れ、また目が合う。その繰り返し。さきほどの台詞からして、私の髪と目を見ているのだろうか？その意味も分らず見つめ返せば、透き通るような漆黒の瞳が何かを堪えるように揺らいだ気がした。

「あの、私は金髪ですけど、目は翠色じゃないですよ?」

たぶん。と心の中で付け加える。最後に見た私の瞳は、海のように蒼かった。

「分かつてる……伝承に従えば対象から外れてると思う、でも、それも十二年前までの話よ」

「え?」

「ラギは十二年前の儀式、見なかった? 今代の光の巫女は金色の髪（いんじき）に碧い瞳（あお）を持つてるの。翠だけじゃないってもう証明されてる」

「え、……ええ?!」

みこ——。一番聞きたくなかった単語がネヴィの口から零れでた。そしていったいなんの話をしているのかがさっぱりわからない。予想外の展開に私がどんなに焦っていても、何故かそれ以上に焦っている彼女が気付くことはなかった。それどころか問答無用とばかりに私とルカの腕をがっしり掴んで、大真面目に叫びだす。

「早く……早く騎士団のところへ行きましょう。危ないわ!」

「何がですか!」

「君がよ! この辺りでルカのお姉さんがいなくなったら、ラギだって狙われるかもしれない」

「ひ、人さらいが出るってことですか? こんな真っ昼間から——」
「昼間やらずにいつやるの?!」

そりゃあ夜とかでしょう。流れで普通にそう答えかけて私はぎりぎりで踏みとどまった。この世界は違うと気を抜けばいつも忘れそうになる。私の常識でものを考えてはいけない。珍しく声を荒げたネヴィの剣幕に圧されつつ、そうですね、ともごもご口の中で誤魔化しておく。

「朝も夕方も夜の影響が強いんだから。一番治安が悪いのは昼ですよ？もう、ラギって本当に食べ物のことしか興味がないのね！危機感足りないわよ！」

「う、ごめんなさい……？」

わからない。今、ネヴィは確かに『ひかりのみこ』と言った。ひかり、が光だとして、『みこ』は「あの男」が言っていた『みこ』と同じものと考えていいのだろうか。でも私は本来黒目黒髪であり、『みこ』であるはずだ。彼女の言葉から察するに金髪に翠の目、あるいは金髪碧眼だけが『光のみこ』なのだとしたら、それは。

そこまで考えたところで、私の後頭部を軽い衝撃が襲った。はっとして顔を上げると、今まで見たことのないような怖い笑顔でネヴィが眼前に仁王立ちしている。

「おおお姉ちゃん……？」

「ごめんごめん、ルカも私達と一緒に行くからね。こらラギ！ぼさっ

としない！」

「う、うん！」

「……えーっとじゃあ、あの飲み物取ってきます」

「っだからね、状況分かって——」

なにしろ、騎士団のところへ行ってルカの姉のことを頼まなければ考えることすらままならない。でも狙われているなんて、そもそも偽者の私には関係のないことだ。私は未練がましく例の美味しいジューズを置いた岩場へ舞い戻り、今度は絶対零さないと誓いながらコップを手にとった。

——その背後から。

「お嬢さんたち、早く戻らないと演目終わっちゃうよ？……いいの？」

笑みを含んだ、声、がした。

選択した行動はキャンセルされました。(後書き)

巫女、と、『みこ』。

悪口は本人のいないところで

ぞわつと背筋に悪寒が走り、私は持ち上げたばかりのコップを静かに元に戻した。聞き覚えのある――と言えるほど耳にしたことはない声、けれど振り向かなくてもそれが誰のものであるかは気付いていた。芝居がかった口調に潜むどこか冷たい響きに振り向きたくない気持ちが強まる。

美味しい飲み物をわざわざ無料で配ってやったんだ、さつさと戻って金を置いてけお客様とでも言いたいのか。それともやはり、私が口から吹き出したジュースで汚れてしまっただろうテントの絨毯を賠償しろとかそういう話か。私は色んな想像を巡らせながら恐る恐る振り向いた。

「…………どうもお騒がせしました」

やっぱり。私は口だけの謝罪をしながら心で密かに呟いた。想像通り、怪しさ満載のテントを背にしてあの頭蓋骨仮面男が立っている。ちようどうまい具合に逆光になっていて彼の表情は窺えず、更に胡散臭さが増している。そしてその右手には…………何故か、一本の鞭が握られていた。…………猛獣使い？

「ああ、これ？さつき演目で使ったんだよ。せつかく君達みたいな可愛い女性に見てもらえると思ったのにな」

私の視線に気付いたのか、男は聞いてもいないのに親切ごかしに

説明すると見せつけるように鞭を振るった。鋭く空気を裂く音に思わず肩が跳ねる。——なんだろう、この雰囲気は。テントを出てきた時とは違ってこちらを睨みつけることもなく、ただおどけた様子で笑っているというのにどうして、私は、こんなにも緊張しているのだろうか。

「今からならまだ間に合うからさ。ここまで来てくれたんだし、少しは楽しんでいってよ」

「つすみません、でも、私達ちょっと用事ができてしまつて。また次の機会に來ます」

「——へえ？」

「っ！」

男の両目がすつと細められたかと思うと、空にもう一度鞭が舞った。その聴覚を襲う暴力にルカが小さく悲鳴を上げしゃがみ込む。はつと我に返った私は慌てて彼女に駆け寄り、そのまま男を睨みつけた。明らかにそれは客に対する態度ではないし、平和な国で生まれ育った私でもここまでされたら流石に分かる。——脅した、と。

「……あなた、何をっ」

「ち、——っ近寄らないで！」

（ええ?!）

私の、今持てる勇氣をあるだけ振り絞った詰問をよく通る声で遮ったのはもちろんネヴィだった。出鼻を挫かれたことと彼女のはつきりとした拒絶に驚いたことで私は勢いを失って黙り込んだ。しか

も彼女はルカと私を庇うように男の前に立ち塞がったのである。…
…その全身から敵意を剥き出しにして。

「え？ ごめんごめん、鞭が怖かった？ つい癖でさ、持ってたら振り回したくなるんだよね」

「とばけないで。この子は絶対連れていかせない」

叫ぶでもない、怒鳴るでもない、ただ何か強い思いの込められた静かな声が空気の色を変えた。へらりと営業スマイルを浮かべていた男は真顔になり、瞳に不穏な光を宿らせてこちらを見据える。この子、とは明らかに私を指していた。偽りとはいえ金髪碧眼を持つ存在を。ということは、さつきネヴィが言っていた“私が危ない”とは、このこと……？

「……何の話？ 俺はただ、演目を見てほしいって言うてるだけだよ」

「嘘！あと、ルカのお姉さんをどこにやったのよ！」

「ルカ？ 誰それ。言いがかりはやめてくれるかな」

混乱する私と怯えるルカをよそに二人だけで話がどんどん進んでいく。ただネヴィには悪いけれども、正直、会話を聞いていると男に分があるように感じた。彼女の態度は鬼気迫るものがあつたが男の言う通り単なる言いがかりにしか聞こえない。彼が——あるいは後ろの団体そのものが、人さらいだって？彼らがここ中央公園に拠点を置いていることからしても、到底そうは思えないのだが。

「えっと……流石にそれは無理があるかなー、なんて思っんですけど……」

「何が！」

男を牽制していなければネヴィはきつと私を睨みつけていたに違いない。こめかみにたたりと冷や汗が流れるのを感じながら、私は暴れる心臓をおさえて何とか反論することに成功した。ここで引いたら負けだ。

「い、いやその、この公園使うのって申請しなきゃ駄目なんですよ？その、管理所に。言い換えれば——国に」

私達はこういう者で、こういう事をするのでこの場所を貸してください、と。ここは公園だから大元は国が管理していることを考えれば、つまり、彼らは自分達の身元を上にはっちり把握されているわけである。怪しいものだったら許可が下りるわけがない。まあ実体がある組織を隠れ蓑にするという方法もないわけではないけれど。

「そもそも、こんな国のお膝元でそういう暴挙に出ます？ 普通。騎士団とかに速攻で気付かれるんじゃないですか」

「っ、それは……。人を集める場所だからこそ逆にやりやすいこともあるわ」

「人が集まるからこそ噂も広がりやすい、とか。図書館の近くだから人通りも多いしこそそこそ動くには向いてませんよ。それにそもそもまだ誘拐だと決まったわけじゃないですよね」

「……いいえ、ラギ。これは間違いなく誘拐よ。そうでしょ？ 金髪に翠の目とくれば誰だって気付くもの！ 子供だってわかる！」

すみません、私にはわかりません。そう言えたらどんなに良かっただろう。私は何も言わずにただ沈黙を守る。子供だって、の台詞で隣にいるル力をうかがうと、ネヴィと同じくらい強張った表情で男を睨んでいた。彼女も理解しているのだ、私とは違って。子供だって知っているという常識——焦りばかりが募り、頭をフル回転させても中々答えは見つからなかった。金髪に翠色の目。『光のみこ』。今代の『光のみこ』は金髪碧眼。単語だけがぐるぐると廻っている。第一、わざわざ誘拐するほど金髪に翠の目、あるいは金髪碧眼が珍しかっただろう？ 黒目黒髪よりはよほどたくさんいるんじゃないのか？ そう何となく思い返して……初めて、私は、気付いた。

食堂で働く人々、炊事場のおばさん、管理人のアニーさん、魚屋のおじさん、フラグ美形男騎士団長似非役人その他——の、瞳の色を思い出せないことに。

ネヴィはわかる、黒目黒髪だ。それは私が失った色だから余計気になっていた。けれどそう、今、私に縋ってくれているル力のそれでさえもはつきりと断言できないことに私は愕然とした。

（私は、……今まで、なにを）

私は——。城を逃げ出してから、今まで。ほとんど誰とも目を合わせずに生きてきたというのか。茶か黒かわからなくて迷うなんてそんなレベルじゃない。こうだったかな、なんて推測もできない。真っ白だ。

「ラギは渡さないわ！金儲けの道具になんて、絶対にさせない！」
「——しつこいなあ、キミ」

再び響いた鞭の音が私を現実に取り戻した。ネヴィが挑発し続けたせいか、空気が更に冷たく重くなっている。事の真偽は別としてあの必死さは私を守るためのものだ。男が痺れを切らしたように一歩前に出たにも関わらず彼女は動かない。どうしてそこまで必死になれるのだろう。どうして、……身体がそんなにも震えているのに私はぎり、と唇を噛み締めると、ルカの頭をひと撫でしてゆつくりと立ち上がる。——怖かった。多分、ネヴィに負けず劣らず私も震えているのだろう。こんなことガラじゃないし、状況がわからない私が出て行っても意味なんかないかもしれない。ただ、……ただ、あの凶器が、ネヴィに向かって振り下ろされる様を見たくないだけ。

「やっぱり、この人たちのせいだっというのは短絡的じゃないかと思えます」

数歩進んでネヴィと並び、私も男と向き合う。とにかくまず不機嫌そうな男を落ち着かせることが先決だった。

「ラギ……？ どうしてそんなこと言うの？」

「彼らがこの町に来たのは結構前ですよ。組織立っての犯行だとするなら、犠牲者がルカのお姉さんひとりだとは思えない。金髪に翠の目、探せば案外いるんじゃないですか」

黒目黒髪のように。そうかまをかけてみると、彼女は黙って頷いた。よし、この調子でどんどん話題を逸らしていこう。

「だとしたらやっぱりおかしいですよ。子供でも知ってることは騎士団だって知ってる。何かしらの対策をとってないはずはないし、ひとりふたり、とにかく金髪で翠の目を持つ人が失踪した時点で気付かないなんてありえません」

理論が破綻していることは重々承知しているとも。突っ込みどころも多いだろう。それでも私はつらつらと思ってもないことを並べながら、盲目に騎士団を信じるふりをする。騎士団の実力とか仕事内容とかは全くわからないため想像で語るしかないが。

「ちょ、ちよつと、でも騎士団だって完璧じゃないんだし、うまく隠蔽されたら気付かないってこともあるんじゃない？」

「市民を守るのが騎士団の義務なんでしょう？そんな騎士団が今の今までこの人たちに何もしなかったなら、きつと無関係ですよ」

「……………」

頭蓋骨仮面男は私達のやりとりに毒気を抜かれたような顔をして、何の言葉も返してこない。こいつが本当に黒幕だったなら私のことを心の中で馬鹿だ阿呆だと思っているんだろうな。とにかく、このまま時間を稼いで演目が終わるまで引き伸ばそう。どちらが正しいにしても、もう一度テントに戻る気力はなかった。男を信じる気にもなれないからだ。

「まあ、もし、もしもこの人たちが犯人だったとしたら、騎士団はとんだ無能集団ってことになりますけどね。犯罪者を野放しにして

市民ひとりも守れない騎士団なんて、あってもなくても同じじゃないかと」

「え、あ、っちょ、……っ！……もう、ラギ！」

「でもって、そんな騎士団を抱えてる国も言わずもがな。推して知るべし。こっちは無能とかそういう話じゃなくて、」

私は流れが自分にあると調子に乗って更なる言葉を紡ぐ。その暴言が半ば八つ当たりであつたことは、潔く認めよう。

でもまさか——。まさか、まさかこんなことになるとは本当に夢にも思わなかつたのだ。

「単に、国として終わってることです」

「——まったくだ」

「ぐ……っ！」

「……え？」

「あの男」への積年の恨みとばかりに吐き捨てた私は、視線を地面に落としていた。だからその声が誰のものかわからなかったし、どこから聞こえてきたのかもいまいちわからなかった。慌てて視線を元に戻すと、そこには頭蓋骨仮面男を後ろ手に拘束する、たつた今私が思いつきり悪しざまに罵った騎士団に所属するだろっ男が立

っていた。

——この人、確か図書館前で道を塞いでた二人の片割れじゃないか？

似非役人じゃない方の、黒尽くめの——騎士？

「めんなさい。」

突然、世界に音が戻った——そんな気がした。悪口に精を出していたからかさつきまではちらとも耳に入ってこなかった音が、今うるさいくらい周囲に響いている。怒号、悲鳴、何かがぶつかり合うような金属音。テントの周囲には見るからに騎士だとわかる男達が控えており、あちこちに鋭い視線を送っていた。

（えーと、……なにごと？）

私は、ただその光景を見守るしかない。ぼかんとあいた口はさぞ間抜けだっただろう。心臓が口から飛び出そうなほど緊張しながら意味があるとも知れない時間稼ぎをしたのはほんの数分前のことだ。いつあの鞭が私に向かって振るわれるかとびくびくしながらの精一杯の強がりだったというのに——。

私が衝撃から立ち直るには暫くの時間を要した。私同様驚きで固まっているネヴィヤルカも、状況を理解してはいないようだった。

「くそ……っ放せ！ 俺が何したって」

「動くな」

「っ！」

一片の感情すら読み取れないそのたった一言が異常に怖い。頭蓋骨仮面男もそう思ったのか一瞬で抵抗をやめ黙り込む。男の鞭に対して感じたものとはまた別の、身震いするような怖気が私の全身を駆け巡った。先の見えない時間稼ぎに終止符が打たれたといっても黒尽くめの騎士の、荒事に慣れていると思わせる行為に助かったと

安心するよりもまず不安が募る。怖い。彼の腕一本で私なんか簡単にねじ伏せられてしまうだろう、ことが、……ひどく怖い。

私は内心冷や汗をたらだら流しながら突然現れた男達、特に男を拘束している騎士をうかがう。覆水盆に返らず。口から出してしまった言葉をなかったことには……してくれないな。調子に乗りすぎたと後悔してももう遅かった。

「——あまり騎士団をなめてくれるなよ」

それはいつたい誰に言ってるんだ、私にか。じっと見ていることに気付かれたのか男の顔が動く気配をみせたので視線が合う前に私から目を逸らした。もうほんと怖いこのひと怖い。

無能集団。あつてもなくても同じ。もちろん、ありえない仮定に従った単なる冗談の範疇だと言いつきはさせてもらいたい。そう、あくまでも騎士団がその義務を果たしていない場合、の話で、別に真実そうだと言いついたわけではない。実際そうでないことはちゃんと証明されたのだ。他でもない彼ら自身の行動によって。

名誉毀損で訴えられたらどうしよう？ただそれ以前に、「国として終わってる」などと、王制を敷いているだろうここで反逆罪とも取られかねない発言をしてしまった私は、そもそも生かしてもらえるのだろうか。いまいちこの価値観が分かっている私でもそれ

なりに、いやかなりやばいと想像はついた。どうにかして逃げてしまいたい、私の発言をばつちり聞いていた黒尽くめの騎士の両手が塞がっている間に。

私の切実な葛藤をよそに、テントの方では頭蓋骨仮面男のように変わった格好をしている人達が後ろ手に縛られて連行されていく。公園に集まった騎士共は誰もかれも厳しい顔つきをしており、これが彼らの“仕事”であることはわかる。組織丸ごと検挙したのなら本当にネヴィの言ったことが正しかったわけか。しかし国の中枢がある城下町に来てまでやらなければならないようなこととは思えなかった。人さらいなんてもつとこっそりやるものだろう？

（金儲け、って言ってたし……）

売り飛ばされる、のか？最悪に嫌な想像をしてしまい、私はそれ以上考えるのを止めちらりと前方少し下に視線を戻す。あの黒い人も犯人とやらを連行してどこかに消えてくれないかな。……ああでもその前に一応助けてくれたお礼を言っておかなければ、と焦りはするものの、この一帯に流れる微妙な雰囲気がそれを許さない。沈黙が重すぎる。

私のせいかな。私のせいなのか。……仕方がない玉碎覚悟で！そう勢いをつけて顔をあげた私の目が、公園の入り口に立つひとりの歳若い少女を捕らえた。太陽の光を反射して金色に輝く髪と——この距離でさえわかる、まるで翡翠のような瞳……。

「——ミラルカッ！」

突如、公園に響き渡った声。え、と思うと同時に、私達の傍で蹲

つて怯えていたルカがはじかれたように身を起こした。信じられないといった様子で大きく目を見開いた彼女は、見る間にその瞳を潤ませていく。視線の先を辿れば誰を見ているか一目瞭然だった。金色の少女が泣きそうな笑顔を浮かべてこちらに走ってくる。じゃあ、ミラルカって、まさか。

「お、ねえ、ちゃん？」

「うん、そうだよ。遅くなってごめん、……ただいま、ミラルカ」

「……っ、お、……おねえちゃんっ！」

「ごめんね、心配かけちゃったね。もう大丈夫だから、……」

いきなり始まった展開についていけなかった私は、何度か目を瞬かせて二人抱き合い再会を喜ぶ様子を見守る。情報が脳全体に浸透するまで少し。ああ、そうか。見つかったんだ。私やネヴィが何もしなくたって無事だったんだ。——騎士団のおかげで？

ルカの姉だろう少女の傍らで、純朴そうな青年が心底安堵した様子で笑っているのが見えた。あれも、騎士だろうか？腰に剣をさしてはいないようだけれど、服装はそれっぽい。私は暫し目の前にいる黒い騎士のことを忘れそちらを注視していた。青年が、少し申し訳なさそうな表情を浮かべながら、腰を屈めてルカに視線を合わせる。

「君のお姉さん、悪いやつに捕まっててさ。俺達が昨日のうちに保護していたんだけど、体調が戻らなくて騎士団で預かっていたんだ。……知らせが遅れてごめんな？」

「うっん、お兄ちゃんたちが助けてくれたんだよね？ わたしは平気だよ、ありがとう！」

「ん。どういたしまして」

漏れ聞こえてくる会話に、私は多少引っかかりを覚えて思わず半目でその平凡な青年を見やった。なにそれ。連絡が遅れたのは姉の体調が悪かったから？どこの誰だとかそういう話もできないほど重体だったなら、昨日の今日で今そうやってここに来ること自体おかしい気がする。妹がいることさえ聞き出せていれば、こんな小さい子供がひとり町を探し回るなんて危ないことを防げただろうに。しかもルカはこうやって犯人のところへ乗り込んで来てしまった。下手に犯人と接触したり、姉のことを尋ねたりしていたらどんな目に遭っていたか――。

そう考えると、わざと、ルカへ連絡しなかったこともありうる。まわりまわって情報が漏れないよう。連中の逃亡を阻止するために。

一度自分の中に湧いた疑念はどんどん別のところへ飛び火していった。そもそもあの黒い騎士が現れたタイミングだっとうなんだと思う。全部計算していたんじゃないのかと穿ちたくなるくらいだ。そりゃ証拠とか色々集めないと駄目なんだろうけど、仕方がないことなんだろうけど、こうも利用された感が強いと不愉快ではないと言ったら嘘になる。それともこの感情は、こいつらが「あの男」に近い騎士団だから――。

そんなどうにもならないことをつらつら考えていた私は、怪しいテントからするりと出てきた人物が視界に入ったことで凍りついた。正確には、その赤い色を見て、だが。

「ルート、もういい。そいつを連れていってくれ」
「……ああ」

黒い人の名前とか二人の上下関係とか色々判明したものはあった。知りたくもなかった。そんなこと知らなくてもいいから私はただ平穩に何事もなく安定した生活を手に入れたいと願っている。一度でいいからお腹一杯になりたい。空腹に苦しめられず辛い仕事もしなくていい、そんな時間が欲しい。その為にも必要最低限の繋がりがあればいい——つまり、こんな予定外の出来事^{フラグ}はいらないのだ。

「っええ、リカルド様?!」

「うん?……っと、君達は——」

ああ、ネヴィ。わざわざ注意を引いてくれなくてもいいのに。声を掛けられて不思議そうに振り向いた「お菓子の人」もとい騎士団長は、私達の姿を確認すると驚いたように目を見開いた。

さきほどの暴言は地面に伏して謝りますから、なんかもう、帰っていいですか。

タダより高いものはない

騎士団長はまずネヴィの姿を確認して驚きの表情を浮かべると、次に私に視線を移し、そして暫く経ってから思い至ったようにひとつ頷いた。そのまま複雑な表情を浮かべるのを見れば、彼がどんな思考を辿ったのか手に取るようにわかる。どうせ私のことなどすっかり忘れていたに違いない。思い出したら思い出したで反応に困ったのだらう。確かにあのゴミ捨て場でのやりとりは自分で思い返してもコメントし辛いものだった。

「君達は……食堂の？」

「あ、はい！ いつもお世話になってます」

「……こんにちは」

ネヴィが居るぶん、余計にである。フラグ美形男とのことを言うべきかそうでないか結論が出ないままずるずる引き延ばしてしまつたため、もう私は全部忘れることにした。何にしても今更すぎるからだ。そんな気持ちが伝わったのか、騎士団長もそのことに対して特に反応することはなかった。ただ探るように私の顔を、――髪を、眺めて？

「金髪に――碧^{あお}か。なるほど」

下種共が。じっと眺められるのが嫌で自然と俯いてしまった私の耳に、とても小さく呟かれた騎士団長の乱暴な言葉が風に乗って届

いた。押し殺した怒りと隠しきれない嫌悪が滲む声。やはり騎士団もなぜそういった容姿の人間が狙われるか知っているのだ。そして攫われた者達が辿る道も。

「あの！ やっぱりこの子が狙われたんですか？」

「恐らくはそうだろう。連中はあちらの女性の他にも、二十名ほど拉致していたようだ」

「っ、酷い……！」

唇を噛んで悔しそうに顔を歪めたネヴィの姿に、私はひとり取り残されたような気分になる。狙われた自覚が全くないというのが一番の理由だろう。巻き込まれたことに変わりはなくとも、危険だったことは確かでも、所詮偽者の私には他人事でしかない。なんだかどつと疲れて盛大に溜息を吐いてしまった私をどう解釈したのか、騎士団長が宥めるように笑う。

「すまない。我々がもう少し早く動けていたら、君に怖い思いをさせることもなかった」

彼の、嘘ではない誠実な態度が私のささくれた心を更に抉る。ここで、そうだそうだ！ 遅すぎるわ！ なんて騒いだら助けられたことに感謝もできないただの痛い人になってしまっじゃないか。怖くなかったなんて嘘でも言えない私は、いえ、とか特に、とか言葉を濁してその場を流した。

（――で、いつまでここにいればいいの？）

ルカは無事家族と再会した。本来の目的はもう果たせそうにない。とくれば、私達がこの公園に居続けることになんら意味はない。慌しく動き回る騎士連中を見守りながら、私はネヴィと二人、テントの裏でぼんやりと立ち尽くしていた。

「騎士団長！ 全員、捕獲完了しました！」

「団長、奥の部屋からこんなものが……！」

黒尽くめの騎士は頭蓋骨仮面男を引つ張ってどこかへ消え、騎士団長は次から次へと入る報告に対応するのに忙しく、私達のことなど眼中になさそうだった。私はゆつくりと、しかし悟られないよう慎重に周囲を見渡してみた。どうやらこちらを見張っている暇な騎士はいないようである。これはチャンスかもしれない……。再び視線を正面に戻すと、ちょうど私を見ていたらしいネヴィとぼつちり目が合った。

――帰っちゃう？

――ええ、今のうちに。

アイコンタクトなどという芸当ができるほど親しくなったとは思

えないが、けれどその時ばかりは、私達の心はひとつだった。と、テントの中にいるだろう同僚と合流してひとまずここから出ようと頷きあった、その瞬間を狙われたのではないかと思うほどの、いいタイミングで。

「ああ、ちょっと待ってくれ！ 君達にはまだ聞きたいことがある」

声、だけでなく本体までがやってきた。

私は今、猛烈に叫びたい。騎士団長、あんたさっきまでテントの傍に居ただろう。背中が見えてたんだから私達を視界にすら入れてなかったんじゃないのか。後ろに目がついてるのか、ええ？それとも騎士つてもものはそれくらい簡単に出来ないと駄目だとかそんな規定でもあるんだろうかちょっと化け物じみてるよその反射神経と身体能力！と。

心の中で罵倒にも似たつつこみを入れられているとは露とも思っていないだろう赤毛の騎士団長は、汗ひとつかかず裏のありそうにない爽やかな笑顔を浮かべた。

「といつてもここじゃ落ち着かないだろう。すまないが、一緒に騎士団まで来てくれないか」

「……今から、ですか？」

私は視線を巡らせて太陽の位置を確認すると、それが一見お願いの形を取っているだけの命令だと理解していながら、あえて首を横

に振った。

「明日は仕事があるので嫌です。騎士団に行く時間がありません」

「え、……いや、」

「もうそろそろ帰って休まないと、明日の仕事に差し支えるかもしれません」

「それは、俺が兄貴に話を通しておくが——」

「いえそという話でなく」

ぐつと力こぶしを握って、深呼吸をひとつ。常に、そう今も空腹であることが私に力を与えてくれる。演説の最中は隙を作らないことが大切だ。間は大事。そして全ては勢いにある。説得力なんて勢いさえあればきっと後からついてくる！

「どんな理由があるにせよ、遅刻したりヘマをしたら結局給料は下がるんです。その下がった給料は何だと思います？ 私の糧であり命そのものなんですよ！ 命が削れたらいつか死にます。飢えて死ぬ。嫌な死に方だと思いませんか、私はごめんですよ。毎日私がどれだけぎりぎりで生きてるとか知りませんよね？ たった一日、その給料が貰えないだけで私は死の淵に立たされることになるんですっ！」

「……………」

おお、一度も途切れずに言い切れた。謎の達成感に包まれていると周囲に何とも言えない沈黙が広がるのがわかる。この国に有給などという制度はない。体調不良以外で休んだら特別な事情がない限り

リクビもありうる。これ以上余計なストレスを負いたくないというのが本音だった。もちろんそれ以上に——騎士団なんかに行きたくないという思いはあったけれども。

「ですから、申し訳ありませんけど次の休みにしていただけますか」
「……っ、次の休みというのは？」

「さあ、私にはわかりません。それこそ店長に尋ねていただければ」と

休暇というものはあまりにも不定期で、次なんて私には本気でわからないからこそ特に追及されなかったのだと思う。騎士団長は幾秒か逡巡する様子を見せたものの、私達から一度視線を逸らすと何事か口の中で呟き、肩の力を抜いた。あ、諦めたな。

「なら、ひとつだけ聞かせて欲しい。ここで奴らに何か貰わなかったか？」
「貰う？」

どこかやつれたような声に同情しつつ、その質問を受けて思わず私はまたネヴィと顔を合わせた。そして自然と視線はとある方向に流れる。——そう、川べりの石に大事に大事に置いたあの美味しいジューズ。特別だからと無料で配ってくれた……のは、誰だった？

騎士団長の言わんとしていることは理解できる。つまりルカの姉が狙われたように私も狙われていたのなら、誘拐手段は同じはずだ。彼女は公演途中に気分が悪くなったという話だった。それが、連中が仕組んだことだったとすれば、自ずと答えは出る。毒か——も

つと他の何か。

「あれがそうか。証拠として我々が持ち帰らせてもらうが、いいな？」

「えっ」

「え？」

「……ちよつと、ラギ！」

反射的に声が出てしまっただけで、回収されることを別に拒否したわけではない———という言い訳は、私の腕を引つ掴んで少し離れたところまで連れて行ったネヴィのその不思議な表情に霧散した。何もかも見透かした可哀想なものを見るような視線と、真剣で、どこか辛そうに揺れる目の奥に潜む……後悔の色。

「もしかしてとは思うけど、まさかアレ飲むつもりじゃないでしょうね？」

「いや、後で飲もうと思って大事に置いてたんですけど」

「でも毒入りかもしれないってことなんですよ？　だから飲まないわよね？」

「……ええと」

飲まない、と断言できないのは、未練があるからだ。美味しいジュース、しかも無料。あれだけ美味しいものは久々で本当に飲むのを楽しみにしていたというのに、いやもう飲まないけど、飲めなくなっただけど、でも苦しいものは苦しい。

「目を覚ましなさい、ばか！ そんなもの飲んで調子悪くなったら働けなくなるわよ」

「それはわかってます！ でも」

「でも、なによ！」

ああ、本当に飲みたかった。

「——せっかくタダで貰った美味しい食料なのに！」

なのにーなのにーのにー。わざわざ距離を取ってこそそそと話していたのが全く無駄になるくらい、嫌になるほど声が公園中に響き渡った。再び広がる沈黙、ちらほら集まる生暖かい視線。ネヴィにがくがく身体を揺すられながら、私はひとしきりジューズを失うことに対する愚痴を言い続けた。

結局、痺れを切らしたネヴィが私を押さえつけて勝手にジューズを引き渡し、そうこうしている内にテントの中から同僚が出てきたので、騎士団長とのやりとりは終わった。挨拶もそこそこに皆で帰路についてもなぜか、特に引き止められることはなかった。

どうしてこうなった。

あの美味しいジュースが大きな体躯を持つ男達に攫われ、追いかけても追いかけても捕まえられない——そんなくだらない悪夢を見てしまった。逃した魚は何とやら。虚しさ空き腹を抱えながら起きた私は、多少のたるさを感じながらもいつも通り変わらない朝を迎えた。

いっぱい食べるんだよと暖かい笑顔でふるまわれる朝食も、食堂につく頃には消化されきってしまうのではないかと思うほどに少ない。いわゆる西洋料理のランチコースで出される前菜の三分の一の量、とでも言えばいいだろうか。できるだけよく噛んで満腹中枢を刺激するのが精一杯だった。

私は食事を終わると部屋から荷物を取って、早々に食堂へ向かった。昨日別れ際にネヴィから約束のお菓子を貰っていたので今日は特に飢えに苦しむ心配はないだろう。決して満腹感を得られはしないだろうが、いつものことだと割り切るしかない。余計な体力を使う羽目にならないよう時間に余裕を持って出勤した私は——食堂前の曲がり角まで来て、いつかと同様ぴたりと足を止めた。目の前に広がる光景に止まらざるを得なかったからだ。

(……………なんですと?)

見覚えのありすぎる赤が視界の端にうつる。そしてその隣に黒ま で加わっているのはなぜだ。意識せずとも口の端が盛大に引き攣った。唯一違和感を覚えたのは、彼……ら、の周りに誰ひとり女性がないところか?いつもなら既に囲まれていたっておかしくないと思う。開店前だからと店長にきつく言われたのかもしれないが、それはよく分からないしどうでもいい。とにかく関わらない方がいい

と頭が強く警戒音を発している。私は迷うことなく踵を返し、食堂の裏口へと向かうことにした。……私には関係ない。そう、関係なんかあるものか。

裏庭にネヴィはまだ来ておらず、私はひとり山のような野菜を抱えて定位置に腰をおろした。右手には鈍く光る包丁——この仕事についたばかりの頃は、城で拘束されていた頃のことを思い出して刃物が怖くて仕方がなかったものだが。日本で普通に使っていた包丁でさえも、持つだけで手が震えた。

（人間、慣れれば慣れるものって？）

元に戻った、とまでは言えない。思い出せばまだ、辛い。だから騎士なんて連中とこれ以上関わりたくない。腰に携えられた剣がいつ抜かれるかと思っただけで怖くて怖くて仕方がなかった。

（……弱い、なあ）

「あの男」に刺されたわけでも切りつけられたわけでもないのに、何度も自分をそう宥めても、刻まれた恐怖は決して消えてはくれない——。野菜を泥を落とし、へたを取って皮を剥く。その単純作業を繰り返せば少し心が落ち着くような気がした。

しかし、今日も変わらず続くと思われたその穏やかな時間は突然終わりを告げる。どたばたと慌しい足音が響いたかと思うと、食堂へ続く扉がいきなり乱暴に押し開かれたのだ。

「ラギ？……つラギ！？ ちょっとあんた、なにやってんだい！」
「え、なにつて、仕事ですけど」
「呑気に仕事なんかしてる場合じゃないよ！ 騎士様方があんたを呼んでる。……ああ、聞いたよ、昨日大変だったんだって？」
「——はい？」

呼んでるつて、いや、でも、え？ 疑問符が頭を支配する。だが口答える暇もなく包丁を奪われ、野菜も奪われ、至極真面目に働いていた私は、急かすおばさんに半ば引つ張られるような形で食堂へと連れて行かれた。その道すがら、可哀想にねえ、でも無事で良かったよとほつとしたように笑うので私は何も言えなくなってしまう。純粹な好意は単純に嬉しい。……心配、してくれることも。

まだ開店前だというのに、食堂の隅には極普通の顔をして騎士団長と黒尽くめの騎士がお茶を飲んでいた。二人の間には捕虜よろしくネヴィが座らされており、見るからに居心地が悪そうな顔をしている。ああ、そうか。ネヴィはちゃんと正面入り口から出勤したから捕まったのだろう。そうだな。関わりたくないと思っっているのは私だけであつて、ネヴィには騎士団を避ける理由がない。たまに見せる反応に引つ掛かるものはあるけれども。

「ほら行つといで。大丈夫だよ、リカルド様はお優しい方だから」
「……………はあ」

じゃあもう一人はどうなんだ。そう思いつつ、おばさんにばしんと背中を叩かれてしまつては前へ行くしかない。塞ぎ込む己を自覚

しながらゆつくりした足取りで彼らに近づく。と、私に気付いたのはネヴィが一番早かった。俯き気味だった顔を上げると、見事にはあつと顔を輝かせて笑ったのだ。心底安堵したと言いたげに。

「ラギ！おはよう、もう来ないのかと思ってた！」

「おはようございます。……私、もう仕事してたんですけど」

「え？ そうなの？」

裏口から入ったので、ということは今口にはしない方がいいと思つて黙つておく。まさか直接指名してくると思つていなかったんだ、昨日の今日で。私の話を聞いていなかったのか騎士共よ！我慢できずに胡乱気な視線を向けると、黒い方は特に反応を見せなかったが、赤い方——騎士団長は、明らかに怯んだ様子を見せ、それを取り繕うように慌てて笑顔を浮かべた。

「い、いや、昨日の事件でやはりその、確認を取っておきたい。店長に許可を取ったから——協力してくれないか」

「……私は」

何が許可だ。とりあえず嫌味のひとつでも言つてやろうと口を開いたところに、新たな声が割り込んだ。

「あらあ？ そろそろ開店だつていうのに、まだ話纏まつてないの？」

私の遙か頭上から聞こえてきた——涼やかな響き。目を閉じさえ

していれば、多少の低さを考慮しても、麗しい女性を思わせる、それ。思わずぐくりとして見上げると、正確に計ってはいないが、二メートルはゆうに超える長身の――がっしりした体つきの男性と目が合った。ここまで外見と声がちぐはぐな人間にはついぞ出会ったことがないと皆が口を揃えて言う中年男性。仕事と金にはとても厳しいことで有名な、そう、彼が、我らが食堂の店長である。……特にそっち系であるという噂は聞かない。

「やーねえリカルド。このろま。ぐず」

「ぐつ、だ、誰がつ！」

「あと、ラギ。事件に巻き込まれたのはアンタ達のせいじゃないでしょ？ 市民には騎士団の要請に協力する義務ってものがあるじゃない。アタシはそこまで鬼じゃないわよう。特別手当あげるからいつてらっしゃいな」

「特別……手当、ですか？」

「今日の給料、さっぴかないでいてあげる」

「……っ」

しまった。店長の言ったことを理解して、私は内心舌打ちしたい気持ちでいっぱいだった。お金がないから、給料が貰えなかったら飢え死にするから行かないと言えば、じゃあ金を渡せば来るとかいふ結論に至るのは当然のことだ。店長を説得すれば話は簡単、家族である騎士団長には造作もないことだっただろう。そんな単純なことを考えなかった自分が腹立たしい。思いつきのその場凌ぎは、本当にその場凌ぎにしかない……。

私は一切の反論を封じ込められて、少し考えるふりをしながら黙り込んだ。ここで行きたくない駄々をこねるのは私にとって得策ではないだろう。――でも、と私は思う。

でも、やっとわかった。昨日どこから騎士たちが見ていたかは知らないが、あの頭蓋骨仮面男と私とのやりとりに限って言うなら、大した罪に問うことはできないはずだ。所詮彼は私達を鞭で威圧しただけで傷を負わせたりはしていないし、誘拐がどうかの話も私にはほとんど関係ない。だって、結局何も起こらなかったのだからたとえジューズに何が仕込まれていようと、私はそれを飲まなかったのだから。

（それをなに、わざわざ金にがめつい店長を説得してまで話を聞くって？怪しすぎるわ。たぶん目的はそれじゃない）

——私は、ただの口実なのだろう。

（何のために？ ……まさか、ネヴィ、とか？）

当事者である私だけでなくネヴィも、という話なら——それは疑いようもないことだった。

給料を下げないという約束を取り付けられてしまえば、事前に“理由”を提示してしまった私にはどうすることもできなかった。騎士団の場所的に城には入らないだろうという希望に縋って大人しく承諾した。それを受けて、外で待っている、と騎士達が立ち上がるのを曖昧な笑みを浮かべて見送り、荷物を取りに裏庭へと戻る。その後ろからネヴィがとことことついてきた。

「待ってラギ！　ねえ、どうしてそんなに不機嫌なの？　行くの、嫌？」

「嫌ですよ！ 知ってますよね、私が散々暴言吐いたこと」

「そ……っ、うん、まあ、アレは間が悪かったわよね……」

「不敬罪とかで市中引き回しの刑とかなったらどうしようとか、色々考えてるんです！」

「ななななに怖いこと言ってるのよー！」

内容が内容なので、周囲を憚りながら二人して小声でぼそぼそと言い合う。不敬罪、確かにそういう可能性がないわけではないのだ。忘れかけていたというのに黒尽くめの騎士を見て思い出してしまつて憂鬱になる。そもそも、騎士団長自らやって来る事が信じられない。あれだけたくさん部下がいるくせに、被害者——しかも未遂、のだ——と証言者を連れてくるだけの仕事をどうして自分でやる。兄の説得だけしていればいいだろうに。

だいたいネヴィは今回のことについて何も思わないのだろうか？ ちらりと視線を向けても、笑い返されるだけで何も分からなかった。

「ちょっとアンタたちいつまでぐずってんの？ さっさと行けつつてんでしょうがつ！」

「うあはいっ！」

「今すぐ行きます、すみません！」

食堂の方から聞こえてきた店長のその言葉には、明らかに、「行かなかつたらクビにするわよ？」の意味が込められていたと思う……。

事情聴取という名の

騎士団へは、彼らが用意していた馬車に乗って行った。城下町は広いといえど、食堂から目的地までは徒歩でも十分な距離だと思っていたからその扱いには少し驚かされたものだ。しかもこじんまりとしたそれは二人乗りで、騎士達が前後に護衛よろしくつくという豪華な……いささか過剰な待遇に気が引けたのも事実だった。

なにぶん馬車初体験な私に乗り心地の良し悪しを語ることはできないが、舗装された大通りを進んだので一応マシな部類だったのだろう。断続的に響く振動に多少気分が悪くなったものの吐いたらもつたないので根性で我慢しておく。食堂を出る前に、お菓子をひとつふたつ口に放り込んで腹ごしらえをしておいたからだ。事情聴取だけで半日以上かけるほど騎士団も暇ではないはずだが……念のため。空腹は私にとって何よりも思考を鈍らせる。隣に座るネヴィに余計な心配をかけないよう、私はそつと静かに深呼吸した。

目的地について馬車から降りる段になったとき、どうぞ、と差し出された手を数秒無言で注視してしまったのは仕方がないと思う。ここが異世界であることを差し引いても、庶民がこういったレディ・ファーストを受けることはまずない。ネヴィは騎士団長が、私は黒尽くめの騎士がそれぞれ支えてくれたのだが、自分より遥かに大きく骨ばった手に、その体温に、どきどきするというよりもぞわぞわしてしまった。決して不快ではなかったが——不思議な感覚だった。

「二人共、こちらへ。足元に気をつけてくれ」

なにはともあれ、落ち着こう。先立つて歩き出す騎士団長についていながら強く自分に言い聞かせた。ここ最近の目まぐるしい日常に振り回されてか、どうも無駄に騒いでしまったような気がする。私が目指さなければならぬのはとにかく目立たないことなのだ。そう思いはするものの、色々うまくいかないのが現状だけれども。

騎士団は、思っていた以上に簡素な造りをしていた。騎士団長が纏う衣装の上質さからは想像もつかないほど地味で、緑も少なく、一望ただけで全体が把握できるシンプルな機能的重視構造……といったところか。ネヴィも物珍しいのかきよろきよろと周囲を見回している。石造りの廊下はやけに足音が大きく響く。

——と、一つ目の角を曲がったところで、突然馬鹿でかい声が私の脳天に突き刺さった。

「遅い遅い遅い！うぬら、真面目にかかってこんかあ！」

きいんと耳鳴りを残しつつ、周囲の石壁に反響して消えていった怒鳴り声。次いで何かが地面に倒れる音がする。思わず視線をやると、そこには、見事なつるつぱげの集団が何やら固まりになって……訓練、かなにかをしているようだった。ただの殴り合いにしか見えなかったが。太陽の光を受けて時折後頭部がぺかーと光るさまは眩しさに目を逸らしたくなるほど。

「げ、元気いっぱいだね……」

ネヴィが若干引き気味で微妙なコメントを残すのを、私は曖昧に笑うことで受け流した。

あの奇怪な集団を見ても特に何の反応もせずただ通り過ぎた二人の騎士にとって、あれは日常に過ぎないのか。その間ずっと無言なのが、逆に触れて欲しくないと言っているようにもとれる。とにかく置いていかれまいと訓練場と呼ぶべきだろう広場を横目に暫し移動を続けた私達は、もう一度角を曲がった先に見えた部屋に通された。分厚くて丈夫な扉だ。滅多なことでは壊れたりしないだろう。

またもやレディーファーストラしく騎士団長の手で開かれたそこに、お邪魔しますと小さく呟いて足を踏み入れると、事務的な内装が視界に入った。中にはひとり――確か、ルカの姉を中央公園へ連れてきた騎士らしき青年が座っている。私達は彼に促される形で、部屋の中央にある大きなソファに腰を下ろした。

「えっと、まずは――ごめん」

開口一番、名も知らぬ青年に謝られて私は目を瞬かせる。

「昨日、君が危ない目に遭ったのは俺達の責任だ。本当に……ごめん」

「危ない目ってそんな、大げさな。結局は未遂ですし」

「それは関係ないよ」

関係ない。彼はもう一度、噛み締めるように繰り返した。沈痛な表情と静かな声。真摯な態度で真実謝罪しているのだろうと分かるその様子を、どこか冷めた目で見つめる自分がいる。もし青年の言う“責任”が、連中の拘束が遅れたという意味であるのなら余計にだ。

ある意味結果オーライ、途中経過にぐちぐち文句をつけるほど私は子供ではない。……どうせ無意味なことなんだから。なんて直接伝えるわけにもいかずうまい言葉を返せないでいると、彼は更に落ち込み、暗い空気を纏いはじめた。

「エル、その話は後だ。先にやることがあるだろう」

「あ……っ、了解、です」

これは流石にちょっとうざいかもしれない、などと失礼なことを思いそうになったぎりぎりのところでのフォローだった。騎士団長の鶴の一声で、エル——ルカ、と同じようにあだ名なのだろうか——という名の青年は表情を引き締め、私達に向き直る。その瞳に宿るいつそ不可解なほどに痛ましいものを見るような光は、いつまでも消えることはなかったけれど。

事件の性質上、あんまり広めるわけにはいかないからここに来てもらったんだけど、という彼の口上で始まった事情聴取。それは穏やかに、スムーズに、そしててきぱきと行われた。この後の予定が詰まっているのか、やけに急いだ印象を受ける。

騎士団側に求められた説明は、私達が公園に入ったときから少女に体当たりされジューズを零し、テントの外に出て頭蓋骨仮面男に声を掛けられるまでの一連のやりとりを最初からなぞるようなもの

だった。つまりは、話の整合性を図るための単なる確認作業でしかないということ。彼らにとって目新しい情報など到底あるとは思えなかった。そしてこの説明にネヴィの存在が必要不可欠かと問われれば、大概の人間が首を横に振るだろう。

（だったら、……いつ？）

本題は、いつ、どこで、切り出されるのか。そこに私はいるのかいないのか。それ以前に本題とは何か。そのことが気になって集中力が欠けていく。何も考えずに答えだけ得られたらいいのに、そもそも思考するという行為だってカロリーを消費するのだから、難しいことは考えない方が私の胃には優しいはずだ。そう、空腹的な意味で。

「……………ラ、ギ！」

「いつ?!」

突然の痛みはふくらはぎに來た。ネヴィに蹴られたのだと認識すると同時に、四人——今日ほとんど喋っていない黒尽くめの騎士までもが、何とも言えない視線を私に向けているのを理解した。やばい、ものすごく恥ずかしい。

「す、すみません。ぼうつとしてしまつて」

「いや、いいよ。ずっと喋りっぱなしだしさ、……あ、そうだ！今、お茶淹れるね」

場を和ませるように青年は人好きのする笑顔を浮かべて、自らお茶を淹れに部屋の外へと出ていく。ああ、気を遣わせてしまった。私は一旦自分の世界に入るとその他を遮断してしまう癖がある。人前ではしないよう気をつけているというのに――。朝補給したカロリーがもう頭に回らなくなったのかもしれない、と溜息が漏れた。

「ねえ、ラギ。またお腹空いてるの？お菓子、あげよっか？」

「昨日貰ったお菓子があるので、まだ大丈夫です……」
「……ほんとに大丈夫？」

私だって羞恥心というものは持っている。毎日会うネヴィならまだしも、名前と職業以外何も知らない誰かの前で卑しい姿を見せるのは気が引けた。昨日は――昨日はどうかしていたんだ、きっと！思い返しただけで悶絶しそうな台詞を吐いた記憶はばっちり残っていて、もう二度とあんな失態は犯さないと誓った。私は目を覚まそうと一度両手で頬を叩き、ふと、思う。そういえば、あのジューズはどうなったんだろう、と。

「あの、ひとつ聞きたいことがあるんですけど」

「え？ああ、何かな」

「例の飲み物、結局何か入ってたんですか？」

私は行儀よく片手を挙げてから質問を言った。気分は生徒のそれだ。思い立ったが吉日、というよりむしろ尋ねる機会は今しかない、と、もう今日を最後に会うことはないのだと切に信じて。

「その……ルカのお姉さんがそうだったみたいに、飲んだら調子が悪くなるようなもの、とか」

「……っ！」

しかし、一瞬、だが確実に言葉に詰まった騎士団長の様子に私は内心首を傾げた。この反応はどうしたことだろう。すると続いて部屋の外で、がちゃんと嫌な音が響く。あれは食堂でも偶に耳にする、そう、食器類が割れる音だ。今の状況から考えれば、お茶を淹れて戻ってきた青年がそれを落としたとしか思えないのだが――。思い当たった私より先に、ネヴィが大丈夫ですか、と立ち上がる。そうして動くタイミングを完全に逸したところに、降る、声。

「いや……それはまだ、結果が出ていない。………すまない」

（――嘘？）

そう、感じた。どこかに嘘がある。己の思考を悟られたくなくて私はネヴィに続いて開かれた扉の向こう、廊下に盛大に破片をまき散らかした青年を手伝いに歩き出す。嘘。どこが？わからない。何度も自問自答を繰り返す。嘘。どこが？

――まさか、何も入っていなかった？

漠然と思いついた、正しいとも間違っているともわからない答えに胸が苦しくなった。もしそうなら、私がここに来る必要なんて、ない。私が狙われていなかったのならこの事情聴取に意味なんかない。なに、それ。私は完全に、ひと欠片の必然性もなく、ただネヴ

イを連れてくる理由としてここに呼び出されたっていうのか。そうまでして、彼女を……。

——私は、とことん利用されてるって、こと？

石畳の床に広がった液体につつまれる自分の姿に、私は、慌てて目を閉じた。

やっぱりタダより高いものはない

どんなずっこけかたをしたのか、四方八方にきらきら光る破片が飛び散っていた。大きな破片や零れたお茶の片付けは二人に任せ、私は近くに立てかけてあった箒で細かい欠片を集める。ああもったいないもったいない。ガラスや陶器は鏡と同じで高価なものだというのに。自分が壊したわけでもないのに気分が落ち込んだ。……なんとなく、私の発言のせいだと思ってしまいそうなタイミングだったから。

（かといって食い下がるのは……）

藪をつついて蛇を出す――よりは、何もしない方がいい。ここはひとつ馬鹿なふりをして流してしまおうか。いつの間にか紙袋を持ってきてくれていた黒尽くめの騎士の外見に似合わない親切さに驚きつつ、頭の隅でこれからのことを考える。どうすれば一番自然に、普通に振舞えるのか。自分を客観的に見るというのは本当に難しい。

「あああ、本当にごめん！ あと手伝ってくれてありがとう。すぐ新しいのを淹れてくるから！」

「それじゃあ私手伝いますよ。それでもお茶淹れるの上手なんです。ね、ラギ？ ちょっと行ってくるね！」

「え、ああ、……行つてらっしゃい？」

用済みになった箒を元の場所に戻しながら、畳み掛けるよう矢継ぎ早に掛けられた言葉に返事をする。それを受けて、にっこりと同

じ種類の笑顔を浮かべた二人が仲良く小走りに去っていく姿を何となしに見守って――はた、と自分の置かれた状況に思い至った。私以外誰も居なくなった廊下、部屋の入り口には戻ってこいとばかりに無言のまま目で語る黒い人。その奥にはラスボスよろしく騎士団長が待ち構えているではないか。……え、もしかして引き離された？

（こんなあつさり？ いやいや、でもネヴィは今明らかに自主的に行ったわけだし――）

用があるのはネヴィだけのはずだ。そう、だから別に、私が緊張する必要はない。彼女はお茶を淹れるだけですぐに戻ってくるのだから。たとえどれだけこの部屋が不気味な沈黙で満たされていようと。私が入った瞬間に閉められた扉の音が、どれだけ重く響いてもネヴィひとり、純朴な青年ひとりいなくなるだけでなぜこつも息苦しくなるのか。私は次第に己の鼓動が早くなっていくのを感じつつ、ゆっくりとソファに戻った。

「……ラギ、と呼んでも？」
「――……、どうぞ」

「ご自由に。お好きなように。どう呼ばれるかに執着は全くない。だからそのおつそろしいほどの真剣な顔をやめてもらえないだろうか。悪事を働いた覚えはないというのに、追い詰められる犯人の気分を味わわされる。目を逸らしたいと思う、けれど彼の眼光がそれを許さない。私は瞬きひとつさえ憚られる静寂の中、騎士団長が語る言葉をただひたすらに待つしかなかった。」

「ラギ。これから言うことを、どうか怖がらずに聞いて欲しい」

奥行きのあるこの部屋のどこかで、かちりと小さな金属音がする。

「——そして、誰にも口外しないことを約束してくれ」

私は、騎士団に来てからずっと押し込めていた感情が、胸底でゆらりと蠢くのを感じた——。

内容による。と、私は声を大にして答えたかった。詳細を少しも話さないうちからそんな予防線を張られると無駄に構えてしまう。騎士団長の口調は誠実でいつそ優しげではあったが、肯定以外の答えを求めていることは明白だ。では、ここで否定を返したらどうなるだろう？ 彼はその剣を抜いたりするのだろうか、……「あの男」のように？

（……は、馬鹿みたい）

思考の飛躍が被害妄想そのものだ。そう判断できるだけまだ救いはある。私は彼らから見えないよう、一度だけ強く拳を握った。返す答えなど最初から決まっている。

「えっと、それは構いませんけど、……何の話ですか？」

「君が奴らから受け取った——飲み物のことだ」

「何が入っていたか、は、まだ結果は出ていないんですよね？」

「すまない。可能な限り、話を広めたくなかった」

「……」

だったらネヴィを連れてくるなよ。反射的に心の中でそう突っ込みながら、半目になりそんな自分をぐつと抑えた。そしてこの騎士団長、今遠回しに私の言葉を否定しなかったか。自分で言いたくせに無責任もいいところである。

「マリア嬢——ミラルカ嬢の姉、が記念品だと言って渡された飴に、痺れ薬が仕込まれていた。彼女の症状は間違いなくその所為だろう。だが君の飲み物にはそういった類のものは見つからなかった」

ああやつぱり嘘だったのか——と納得しつつ、何が広めたくないのだと意味深なことを言ったのだらうと純粹に疑問が生まれる。何も見つからなかったら見つからなかったで、ネヴィを呼び寄せる材料にしたかったのだとしても、今私に告げる必要性はない。目的を果たしてから、ほとぼりが冷めてから言えればいいし、あるいは権力者らしく握りつぶせば済む話だ。——どうして？その答えはすぐに知れた。

「ラギ。落ち着いて、よく聞いてくれ。……あの液体には、遅効性の毒が入っていた」

「——はい？」

ちこうせいのだく、とは何ぞや。表情を硬くさせた騎士団長と暫し見つめあう。この人、琥珀色の瞳なんだ、と場違いなことを思った。ちこうせいのだく。漢字変換がうまくできない。脳が言葉を認識しない……理解しようとしてくれない。私は本当にわからなくて、いや、聞き間違いだと思ったのかもしれない。首を傾げて彼に尋ね返した。

「すみません、もう一度言っていただけですか？」

「……っ、つまりは、君の」

「毒ですよ、毒。分かりますか？ 君は彼らに殺されそうになったという話です。あるいは——今も？」

「っ!？」

全く予想もしていなかったところから響いた声に、その内容に、私は事実跳び上がって驚いた。足を机にぶつけてしまった痛みに意識が流れ、一瞬だけだが冷静さが戻る。声は私の右後方から発せられた。急いでその方向へ振り向くと、いつからそこに居たのか、見知らぬ白髪の男性が気だるそうに立っているのが視界に飛び込んできた。……もしかして若白髪だろうか、外見からして。なんて呑気に考えている場合じゃない！

「ど、毒……?」

「そう。効果が現れるまで七夜かかる、遅効性の毒です。効果が出る前に解毒薬を飲めば確実に助かりますが、ちゃんと致死量を摂取すれば案外ころりといけるいい薬なんです。しかし致死量に満た

ないと……生き地獄が待っているという。まさに『天国と地獄』、その名に相応しい毒だと思いませんか？」

「……………」

そんな物騒な内容を笑顔で語られても反応に困る。いや、それより毒ってなんだ、私が飲みかけたジュースに入っていたって、意味が全くわからない。考えようにも頭が全く働かない。突然現れた新たな男性にどん引きするだけで精一杯で言葉が出ない私に焦れるでもなく、闖入者は優雅な所作で騎士団長の隣に腰を下ろした。

「あ……の、なあ！入ってくんのが早いんだよ！」

「君がいつまで経っても話を進めないからでしょう。隣で聞いているだけで苛々しましたよ。ああルート、黙って突っ立ってるくらいなら手伝ってください」

「……………」

黙々と、渡された何か怪しい物体たちを机に広げる黒い人。口やかましく言い合う騎士団長と若白髪。彼らの間にかなり親しげな雰囲気を感じ取れた。私はまた一人取り残された気分を味わいながら、ただ呆然と事の成り行きを見守る。毒。そう言われても、その事実を現実として受け止めることができなかった。騎士団長が深刻な顔をすればするほど。突然現れた若白髪の、ふざけているとも取れる言葉も、何もかも。まるで他人事だった。

騒ぐ気にもならず彼らの作業を眺めていると、やがて緑……辛うじて緑という色が残っている、ように見える、泥水に似た液体が出来上がった。わざわざ透明なガラスの器に注がれたそれは、若白髪の胡散臭い笑顔と共に、私の前にどんと置かれる。

「君は運がいいですね、本来ならこんなことはしないんですが、仕方がありません。うちの顧客が迷惑を掛けたお詫び、ということで……ただで差し上げますよ」

「……え？」

「まったく、黙って消えられたせいでとんだ大損害です。あの時なら菓子折りのひとつやふたつで手を打っていたものを——魚屋の言う通り南の食堂とやらに行っても姿が見えないし、……おや？なんですか、変な顔して。私の解毒薬が飲めないっていうんですか」

聞きもしないのに延々と並べ立てられる愚痴に、思い当たることがあつて私は目を見開いた。知らないのは当たり前だ、顔を見なかつたのだから。会話だけ聞いて、その物騒さにすたこらさつたと逃げ出したのは——あの日。じゃあ言葉の端々に棘を含ませるこの若白髪は。

まさか、謎の液体Xを作った張本人で、私に水をぶっかけた怪しい職業の男——？

『光の巫女』

謝罪するつもりはあったということだろうか、あれだけ私を無視しておいて。私は若白髪がこぼした嫌味にしか聞こえない愚痴を何度か頭で繰り返した。食堂に行っても、というくだりは私の仕事上申し訳なかったと思う。しかしここで無視して帰ってすみませんと謝るのは変だろう、私は被害者なのだ。それなのになぜこうも責められている気分になる。……この解毒薬がいくらするのかは、聞かない方がいい気がした。

「相変わらずの守銭奴だな。……まるで成長していない」

「何を言うんです。仕事には正当な報酬がつきものでしょう」

「……奴らが毒を入手した経路、洗ってやろうか？ ええ？」

「おやおや。私がどれだけ国に奉仕しているか、忘れたわけじゃありませんよね？」

今、何か重要なことが聞こえてきたように思ったが、嫌な予感があったのでスルーしておく。どこか呑気なやりとり思わず手に力が入った。私がこんなにも——物語を外から見ているようなあやふやな気分になるのは、こいつらのせいでもあると思う。

……毒。ル力に抱きつかれた拍子に口から吐き出してしまったので、一口も飲み込んでいない、と説明した後でもこうやってわざわざ解毒薬を作ってくれたほどだ。事を樂觀視していい状況ではないはず。それなのにこの騎士達と闖入者一名の落ち着きようはどうだ。普通もつと慌てたり、何が何でも解毒薬を飲め一刻も早く！と強引に迫ったりしてくるように思うのは私だけなのか。

たとえ効果が現れるのは七日後だとして、そんな個人の体

質によっては縮まる可能性だってある。絶対の保証なんてものはない。こんな医療が発展しているとも思えない世界でなら尚更だ。

大体『みこ』云々の話も、昨日会ったばかり連中にばれているわけがない。その他に私が命を狙われる理由などさっぱり思いつかなかった。落ち葉のあの独特な臭いしかしい嫌な液体が入ったコップを両手で包みながら、そのゆらめく水面に視線を落とした。心は酷く落ち着いていると思うのに、……手の震えが止まらない。

「……こいつは、薬に関しては妥協しない男だ」

ふと、ぽつり、落とされた声。顔を上げると、何を考えているか全くわからない顔で黒尽くめの騎士が手振りで飲めと促してきた。解毒薬自体を信用していないと思われたのかもしれない。それ以前にそもそも口に入れたくない代物だということを、彼は分かっているのだろうか。砂の味がしそうな色だ。含んだ瞬間、あまりのまずさに吹き出してしまったらどうしよう。

これが本当に解毒薬だとしたらきつちり飲まないと、若白髪の言う「地獄」が待っていることになる。痛いのも苦しいのも絶対嫌だった。まして、今の状態で何か後遺症を抱えるなんて死ぬより悲惨なことになりかねない。

「どうしました？ 女性はすぐ苦いだの不味いだの騒ぐので、一応甘めにしておきました。そういう心配なら必要ありませんが」

「……。それは、わざわざ、ありがとうございます」

「どういたしまして。礼儀正しい人間は好きですよ」

だから文句を言わずさつさと飲め。そんな副音声が聞こえてきて、私は、どんな罰ゲームだと思いつつも——甘い、ということはきつと高力ロリーだと判断を下す。これは食料。これは栄養。これは生きるための糧。むしろタダで貰えるのだから喜ぶべき。暗示をかけるようにそう何度か繰り返してから、毒でないならそれでいいとばかりに一気に最後まで飲み干した。

意外と漢方みたいな味で抵抗なく胃に収まったことを、若白髪の名誉のために、忘れないでいてあげようと思った。

そこまでは良かったのだが、ただ飲む前、飲んだ後で胃がふくれた以外身体に全く何の変化もないことは疑問として残る。ジューズには本当にそういう毒が入っていたのか、これが本当に解毒薬だったのか、彼ら三人が仕組んだ狂言なのではないか——疑いだせばきりがないし、まだ納得はできていない。ただ真正面から問いかけられるほど図太くはないので、当たり障りのない、尋ねて当然のことから話を切りだしてみた。

「あの、……どうして、私が？」

もし何か確固たる理由があるのなら知っておくべきだと思う。今後のことを考えるならば。無差別だったならまだ気が楽になるのだが、どうやらそんな雰囲気ではなさそうだ。私の簡潔な質問に、騎士団長はまた何かを言いあぐねるように黙り、黒い人は壁に寄りか

かった傍観体勢を崩さず口を開く素振りすらみせない。だが唯一、若白髪だけがあっさりと答えてくれた。

「それはもちろん、今代の光の巫女のせいですよ。彼女は随分と“長持ち”しましたから——ね」

「おい、そういう言い方はよせ！」

「……。ああ、大変ですね騎士団長という立場は。言葉を飾らなければ務まりませんか」

「——！」

私が睨まれたわけではないのに、びくりと体が跳ねた。騎士団長はやけに厳しい表情を浮かべ、何か反論しようとしてか口を開いて……結局何も言わずに、舌打ちだけを残し顔を逸らす。そんな姿を鼻で笑うような仕草をしてから、若白髪は私に向き直った。そのまま心底どうでもよさそうに言葉を続ける。

「君も知つての通り、今代はもう少しで十二期も巫女を勤め上げたことになります。先代や先々代、そのずっと昔を遡っても三期、多くても五期で巫女達はその役目を終えたというのに、です」

何もかも特別でしたよ、と懐かしそうな目で彼は語る。これは恐らくあの祭りの話と同じように、この世界で常識と呼ばれることに違いない。知らないなんて言えるわけがなかった。しかし、役目を終える。……長く持った。それらの言葉の響きに、何か恐ろしいものを感じてしまう。

「それまで光の巫女とは金髪に翠の目を持つ者しかねない、と思われていましたよね。事実、選定を行った結果が常にそうだったのですから致し方のないことでしょう。けれど彼女は百年も続いたその前提を覆し、最も力の強いものとして選ばれた——そして歴代の巫女よりも遙かに“長く持っている”」

私はネヴィが言っていたことを思い出す。今代の『光のみこ』は、金色の髪に碧い瞳を持っている、と。つまり金髪碧眼でも『光のみこ』になれるとわかったから、私が殺されかけたというのか？やっぱり意味がわからない。まだ理解できない私をわかっているのかどうか、彼はだるそうに髪をかきあげて、少し皮肉気に笑ったようだった。

「彼らのような愚劣な連中にとっては、さぞ厄介だったでしょう。

せつかく捕まえた金づるがいつまで経っても金にならないのですから」

「金づる……」

「ええ、生きた金づるです。さらって能力があればよし。なければないで同じ色を持つ人間をあてがって——」

「——ディア」

黒い人の鋭い声が、若白髪の言葉を遮る。何を言わんとしていたか、なんて、考えたくもない。

「ああ、失礼。女性には酷な話でしたか。……とにかく、悪法だと

言っても差し支えないと思いますよ、あれは。祭りが近づくと馬鹿が増えて、本当に嫌になりますね」

「っ、その一端を担ったことを忘れるなよ！」

「いやですね、言いがかりはよしてください。薬に罪はありません」

——寒気がする。何だ、この話は。何を言っている。

これ以上聞きたくないと心のどこかが叫ぶのに、私は制止の言葉すら紡げなかった。

「もちろん、同じ色を持っているからといって、君が今代のような強い力を有しているかどうかは調べなければ分かりませんが。第一、素質があるかどうかさえ不確かです。今代だけが特別だと思う人間の方が多いでしょう。それでも世の中には可能性だけで動く人間なんて山ほどいますよ。君にとっては迷惑以外の何物でもないでしょうがね」

彼は多分、私の欲しい情報をきちんと与えてくれているのだろう。うまく働かない頭で何とか整理を試みる。つまるところ、『光のみこ』とやらは比較的早いサイクルで交代していて、その際、どんな理由かはわからないが金銭のやりとりが発生する。しかし金髪碧眼の『光のみこ』が現れ、彼女が長くその役目を勤めているため、その間交代による金儲けができない——？

「私の、この、色が……駄目なんですか」

「まあ、不幸なことに、君の色はまるで今代をそっくりそのまま写し取ったかのようですから」

——ああ。私はこれ以上己の瞳を晒していたくなくて、一度きつく固く目を閉じて、俯く。『光のみこ』をまるで消耗品であるかのように語る若白髪も、そして窘めはしたものの決して否定はしなかった騎士団長も、全く興味がなさそうに沈黙を守る黒尽くめの騎士も、……どこかおかしい。この世界は、おかしい。気持ちが悪い。

「でも、もし万が一私がああの飲み物を他の人に渡したり——途中で飲みかけを譲ったりしたら、関係ない人まで巻き込むことになるんじゃないですか？ その、確実性がないというか」

「ほう……君は、案外育ちがいいんですね」

「っ、どういう意味ですか？」

「人を拐かして金儲けをするような連中に、そんな分別があると思いますか？」

「！」

「君のことだって同じです。死ねばしめたもの、そうならなかったとしても躍起になって殺しにかかるほどではない——といったところでしょう」

事実を淡々と述べるその口調が、ただ、無性に憎らしかった。

祭りまであと少し

金髪碧眼、がこうもややこしい事態を引き起こすとは今の今まで全く思っていなかった。「あの男」は確か、私の黒目黒髪を地味だと貶して色を奪ったはずだ。そこに、他の意図があったというのだろうか。今代の『光のみこ』の色をわざわざ選んだ？金と、海のように深い蒼。——わからない。——知りたい。

『光のみこ』がこの世界での常識ならば、絶対図書館にある書籍に詳しく載っているだろう。未だに本ひとつ満足に読めないことをここまで齒がゆく思ったのは初めてだった。もっと頑張って文字を勉強しなければ。人に聞けないなら、自分一人で調べるしかないのだから。

内心そう密かに決意を新たにしていたそのとき、若白髪に声を掛けられた。

「それで、どうしますか？」

「どう……とは？」

問われた意味をはかりかねて顔を上げると、思いがけぬ真摯な目とかちあつて私は目を瞬かせた。さきほどまでのだるそうな、どうでもよさそうな様子はどこにも見受けられない。いったい何を言われるのかと知らず背筋が伸びてしまう。

「その色を持つ限り、ああいった輩が君を消そうとしてくる可能性は消えませんよ」

「え、ああいう人達ってそんなにたくさんいるんですか？」

「……そう、ですね。この類の事件に関してはかなり騎士団が頑張ったようですから？　組織としては彼らで最後だったと思います」

「――」

彼は言いながら視線を横に流し、それを受けた騎士団長は表情を忌々しそうに歪めながらもはつきり頷いた。なるほど、やはりきちんと対策は取っていたのか。その中に間に合わなかったものも多々あるのかもしれないが、それは私には関係のないことだった。

若白髪の言い方からして、大掛かりな集団での人さらいは暫くないと思っただろう。逆に言えば、個人での行為はこれから十分あり得るということだ。こればかりはもう自分で自分の身を守る他はないと思うのだが――何をどうする、って？

「今、調べてみませんか。もし君が次代以降の光の巫女になれる素質があると判断されれば、国へ保護を申請できると思います」

「え……。……調べ、る？」

「そうです。普通、選定は巫女がその役目を終える時期の、祭日が終わってから始まりますよね？　でも本当はいつだって調べるだけなら出来るんです。混乱を防ぐために公表はしていません。あ、これも秘密ですから誰にも言わないで下さいよ」

「――」

「ここから出て右手の奥、突き当たりに、巫女の祈りの間があります。そこに湧く水は特別でしてね、資格があるかどうかはもちろん力の強弱まで調べることができるそうです。まあ、私は入ることさえ許されていないので、中の様子は知りませんが」

軽く肩を竦めて、若白髪はその祈りの間という場所があるらしき方向を見やった。もう何が何だか、特別な水とか言われても詐欺にしか聞こえない。宗教か？そもそも、そんな国の秘密を知っている人間なんて絶対只者じゃないだろう。騎士団長と親しいという時点で油断できないことはわかっている。……彼らの顔色を窺う限り、私はまだ間違った対応をしてはいないようだった。どれをわかって、どれをわからなくていいのかいまひとつ判断がつかない。渦巻く私の葛藤をよそに彼らは勝手に三人だけで話し始めた。

「ディア、いい加減にしろ。俺の仕事を奪うな！」

「言葉を選んで時間を掛けることに、意味があるとは思えなかったからですよ。ルート、あなたもそう思いませんか」

「——それが、こいつのいいところじゃないのか」

「……はあ。……ま、たまに一服盛って黙らせたくりますけどね」

「っ、恐ろしいことを言うなよ……！」

国へ保護を申請する、と、守ってくれるわけか。けれどそれは『光のみこ』になる素質をもち、かつ三期以上持たなければならぬという。結局それは、私に守る価値がなければ動くつもりはないのと同義。……当然か。騎士団はボランティアじゃない。市民を守る義務自体はあるかもしれないが、私個人にいつまでも構ってはもらえない——私にその価値がなければ。この外見だけで力があると判断する馬鹿が湧くことは、誰にも、防ぎようがない。

私が取るべき道は何か？フラグを立てないためにはどうすればいいか？大人しく目立たないよう一人で生きていけばいいのだ。それがどんな形であっても、関係者に近づかなければいいのだ。私は『みこ』だそうだから調べれば何かしら反応が出るかもしれない。それで騎士団に守ってもらう、だって？……いたい誰から？

（本末転倒、にもほどがあるっていうか）

考えるまでもなく、ありえなかった。無理。絶対嫌だ。辿るだろう未来が手に取るようにわかる。

「まあ今でなくてもいいですか。選定は近いし、もう少しの辛抱です。今代の光の巫女は今期で——」

「っだから、そういう滅多なことを！」

「はいはい、あれだけ夜が長くなった状態でよく言えますね。言ってて空しくなりませんか？ ええとラギ、でしたっけ。祭りが終われば恐らく選定が始まるでしょう。君が選ばれるようなことがあれば絶対の安全は保障されますし、たとえ選ばれなかったとしても、力があることがわかれば補助金がですよね。その時にちゃんと保護を申請してくださいね」

「——はい。わかり、ました」

私はもう一度俯いて、表情を見られないようにしながらとりあえず頷いておいた。もしそうなったとしても隠し通せばいい。少なくとも今、彼は善意で話を進めているようだったから反発する気はおきなかった。ところどころ相手に配慮するような素振りを全くみせないところも、むしろ色々優しい言葉で誤魔化されるよりはよほどマシだ。『光のみこ』について少しわかっただけでも騎士団に來た価値はあったというもの。……そう思わなければ、なんだか、本当にやってられない。

「祭りはもうすぐですよ。今回は——とても盛大なものになりそう

ですね」

祭り。そう呟いた若白髪の声は、どこか空虚なものを帯びていたような気がする。祭りといえば、少し前町中に貼られたビラで募集した黒目黒髪の踊り子が何を披露するのか、はとも気になる。黒目黒髪ばかりが出演する演目とは何か、見てみたい気もちはある。

だが、こんな状況になってしまつては、仕事の行き帰り以外外出は控えた方がいいかもしれないと思う。金髪碧眼を晒して歩けば何が起こるかわからないのだから。

解毒薬を作るためだけに来てくれたのだろう。話がひと段落すると、それでは、とおもむろに若白髪が立ち上がった。机に広げた荷物をまとめて――今までとは全く違う笑顔を浮かべ、私を見る。これはあれか、いわゆる営業スマイルというものか。次いで、優雅に優雅に一礼すると、やはり今までとは全く違う口調で何やら語り始めた。

「もし何かご入り用な薬がありましたら、是非私のところへ来てください。報酬さえいただければ、風邪薬から毒薬、媚薬まで何でもお客様の要望にあわせておつくりします」

「えっ」

「今後とも、どうぞご贔屓に」

「騎士団の中で物騒な客引きをするな！　しょっぴくぞー！」

「いいですよ？　できるものならね」

「……っ上等だ！」

「リカルド、——落ち着け」

何でも扱う薬屋みたいな感じなのだろうか？今さらりと毒薬とか言ったような。騎士団長の言う通り物騒すぎる。さらりと見事な白髪をなびかせて、薬屋をやっているらしい男は静かに部屋から出ていった。そういえば彼がどこから部屋に入ってきたのかは、最後までわからなかった。

そして部屋に落ちる沈黙。私はどう話を切り出せばいいのかわからず、ただ手で空になったコップを弄ぶ。結局——これは、仕組まれていたことなのだろう、と思った。

お茶を淹れに行ったネヴィが今まで帰ってこないのもおかしい。でもその為にわざわざ値段の張るティーセットを割るなんて流石にしないだろう。単にいいきっかけだったから、出て行ったのか。食堂で私が彼らの前に引っぱり出される前に、何か彼女に話をしていたのかもしれない。二人の間で居心地悪そうにしていたのはそういう面もあったのだろうか。私の本題はきつと終わった。なら、彼女の本題は？

「あの……お話は、これで終わりですか」

「あ、ああ。っと、まだ二人が帰ってきてないから——そう、どうするか……っ！」

明らかに言葉を濁した騎士団長を、まさに助けるようなタイミングで、部屋に数回ノックの音が響いた。どこかで若白髪が出て行くのを見てたんじゃなからうか。黒尽くめの騎士が扉を開けると、そ

ここには新たなお茶を持ってきた青年と……ネヴィと、なぜかその後ろに、もう一人誰かがいた。どこか強張った表情で俯き加減に入ってきた彼女に続いて入ってきた、のは。

ここからでもわかるくらいにずーんと落ち込み、まるで背後霊でも背負っているかのように暗く、どんよりした様子で幽鬼のようにふらふらと歩く、あの、似非役人だった。

「きげんよう、さようなら。」

そのあまりに沈んだ様子に私を含め、誰もが黙ったまま似非役人の動向を見守る。似非——そう、彼は今日も町役場の役人らしい格好をしていた。ネヴィに対してまだ身分を偽っているのか、……その必要があったのか。いったい彼女と何をしていたか全く想像がつかないが、それこそ彼女の本題だったのだろうということはわかる。でもそれを、わざわざ私と引き離して行われたものを、どうして今こうやって私に匂わせる真似をするのか。

流石におかしいと誰だつて気付くだろうと男を見やり、私は、そのままそつと目を逸らした。……なんだか可哀想になるくらいに落ち込みようだ。もしかして、何も考えず、考える余裕もなくここまで来たのだろうか。傍迷惑だったとはいえ、図書館の前で黒尽くめの騎士に言い募るその強い意志を持った姿はもうどこにもない。

「シュルツ……？　ど、どうした？」

騎士団長が恐る恐る、といった感じで漸く声を掛けた。よくやった。だが彼は私達のことなど全く意に介さない様子でさっきまで若白髪がいた場所にだらりと座り込み、そのまま机に顔を突っ伏した。その際の凄く痛そうな音が響いたのだが、……本当に大丈夫だろうか。いい歳をしているはずの大人がここまで弱っていると、どう対応していいかわからなくなる。

「な、なんかさ。仕事に失敗したらしくって——」

「失敗？　まさか、なにか問題でも起こったのか？」

「——いえ……ちょっと、自分の甘さを痛感しているところですよ……」

「……飲むか？」

ちやんとお茶を淹れてきましたよというポーズのためかどうか、青年はきちんと人数分のお茶を持って来ていた。そこからひとつ——恐らくは自分の分だろう——を取り上げた黒い人は、似非役人にそれを差し出す。お茶のいい香りに惹かれたか、がばつと顔を上げた似非役人は一気にそれを飲み干し、やかましい音を立ててカップを机に置いた。どんよりした顔の額にくっきりと机の木目模様がついてしまっているのを、なんとなく生暖かい気持ちで眺める。

「——私の搜索は、完璧だったはずなんです！」

しかし、一息ついた彼の口からまるで奔流のように飛び出してきた言葉の羅列に、私はびしりと音を立てて硬直してしまった。——
——曰く。

「ま、待てシウルツ。ちょっといいから待て、今の状況を」

「知らせが来た時点で国境は即刻封鎖していますし、そもそもこの城下町から出た人間はすべて調査済みなんですよ！伝えられている特徴に一致するものはいませんでした、ええ、ただのひとりもね！」

「ああ、騎士団こき使いやがったから知ってるっつの！」

「踊り子選抜で集めた者達だって、特別に“あの場所”を開いてひとりひとり確認して——もちろんそれで見つかるなんて思っていないはずでせんでしたよ、きつと我々に対していい感情を抱いていないはずで

すから」

「……………ああ」

そこまで聞かなくても、彼が何について話をしているのか理解できた。——私、だ。黒目黒髪を持つ、私を、探しているんだ。……今も？似非役人は顔を両手で覆ってしまっただけその表情を窺うことはできない。一介の役人だといったその口でよくまあ喋る喋る。発言がおかしいぞ、似非役人め。

私はこの部屋から今すぐに走り出ていってしまいたい自身をなんとか抑えつつ、考える。もちろんネヴィについて、だ。彼女が呼ばれたこと、彼女に彼女だけの本題があったこと。そして似非役人が零したことを繋ぎ合わせれば、答えは明白だった。彼、いや、彼らは「あの男」に召喚された黒目黒髪を捜していて、ネヴィがそうであると、この色は本物ではないと言ったにもかかわらずまだ疑っていたのだ。だから事の真偽を調べるために彼女を呼んで、今、この状況は……。

（そうではない、と、証明できたってこと？）

証明する、術があるのか。ここに。けれどネヴィと青年が走り去っていった方向は、例の祈りの間とやらとは逆方向だったと思う。私は、未だに愚痴り続ける似非役人にもう視線を向けることはできなかった。怖い。逃げたい。ずっと考えないようにしていた感情が、明確な形を持って私を苦しめている。立ち上がることも出来ず、かといってこの空気の中、呪文のように語られる言葉を遮る勇氣もなく。この時間が永遠にも続くと思われたその時、——ふと、肩に暖かい体温を感じた。

「帰ろつか、ラギ」

思わず振り返ると、そこには、ネヴィがどこか泣きそうな顔で笑っていた。

彼女のその様子は、まるで一刻も早くここから離れたいと言っているように見える。当然、私も同じ気持ちだ。差し出された手がまるで天使の助けのように思われ、すっかり呪縛の解けた私は深く、深く頷いた。これ以上あの愚痴を聞いていたら何か妙なことを口走ってしまいそうだった。

似非役人を宥めるのに必死な騎士団長は放っておいて、一番つつき易そうな、親切そうな青年に声を掛ける。ルカに対する態度からしてもいい人そうなのは感じ取れたからだ。

「すみません、私達、そろそろお暇させて頂きます」

「えっ、あ、う、うん！　そうだ今、馬車を――」

「いいえ。私、少し歩きたい気分なんです。ラギ、いいかな？」

「もちろんです。せっかくだから、歩いて帰りましょう」

ネヴィの意図するところはわからなかったが、私だってこれ以上騎士団と一緒にいたくない。迷うことはなかった。騎士団周辺の地理に全く詳しくはないが、道は彼女が知っているだろう。それならせめて入り口まで送るよという青年の申し出まで断るのは気が引けて、いつまでもぶつぶつ呟いているひとりと共に騎士団長を生贄に置き、私達はその部屋を――出た。

今朝馬車が止まったあたりで、青年と黒尽くめの騎士が立ち止まる。青年は私達へ振り向くと、人をほんわかさせるような優しい笑顔で口を開いた。

「何か困ったことがあったら、いつでも相談所に来てよ。大体俺が居るから、さ」

「あ、貴方って相談所の人だったんだ！」

「うん、俺の仕事場なんだ。場所はわかる？」

「えっと……確か……」

ああ、平和だ。ネヴィと青年の穏やかな会話に、ゆっくりと身体から力が抜けていく。外の光がとても眩しい。開放感に浸っていると、真横にずいっと黒い人が近づいてきて私はびくりと身体を跳ねさせてしまった。……なんだろう。疑問の視線を向ける間もなく、落ち着いた声が降ってきた。

「とりあえず、自分の周辺には気をつける」

「周辺……です、か？」

随分と密やかな声だった。それはまるでネヴィに聞かせたくないと思っているかのようで、こちらの声も自然と下がる。

「マリア——今回の被害者と共に行方不明になった彼女の友人は、

遺体で見つかっている」

「な……っ！」

「金のために友人を“売って”、結局口封じに殺されたのだろう。誘拐の手引きをしたのはその友人だ」

「——」

なんつーことをこんな帰り際に言いやがるのだろう、と私は切実に思った。思わず声を上げそうになって、しかしネヴィのことが気になり唇を噛み締める。確かに、東の赤い店とやらで働くルカの姉の友人、とくれば、その友人も貧困に喘いでいるだろうことは間違いない。金に困ったゆえの……。日々の糧を得るので精一杯な私には、何も言うことができなかった。

「ご忠告……ありがとうございます。考えておきます」

「……………」

「……………善処します」

頭上からじつと見られていることはわかっていたが、会話を終えたネヴィに話しかけられるまで、そのまま私は顔を上げなかった。

私に友人と呼べる友人はいない。いない、はずだと私は隣でゆつくりと歩くネヴィをちらりと窺った。最初より距離がぐんと近くなっているのは自覚している。けれど、どこか私達の間には越えられない壁があるのも——知っていた、から。

城下町を見下ろして

甘い解毒薬のおかげか、朝のお菓子ののおかげか。真昼だというのに空腹で苦しくなるといことはなかった。まだ十分我慢できる程度だ。私より少し背の高いネヴィが、隣でゆつくり歩を進める。すれ違う人々――木造、石造、様々な建物が並ぶ大通り。これだけを見れば私の生まれた時代より少し前の外国、なんて思えるのに、その実態は似ているようでいて全然違う。

どこか遠くを見ているネヴィの歩幅に合わせながら、私は今まで一度もまともに見たことがない町並みを眺めてみた。道を知らないから彼女より先へは進めない。真つ直ぐ食堂へ向かっているのか、それとも寄り道しようとしているのか、……思考がそこまで追いつかなかった。あまりにも静かな時間。町の喧騒がどこか遠く、世界に私達だけしかないような――世界から取り残されたような――とても心もとない気分になる。

「ラギ。ちよつと、あの高台に行かない？」

「……いいですよ。今日は一日、暇ですから」

ぼつり、と呟くように落とされた誘いに私は一も二もなく承諾した。家に帰っても勉強は手につかないだろう。それにこのまま一人になって、また以前のように答えの出ない思考に囚われるのも嫌だった。彼女の示した高台とは、図書館を挟んで中央公園とは間逆に位置している眺めのいい場所である。城下町が一望できる観光名所だとアニーさんが教えてくれたが、まだ一度も行ったことがない。出勤ルートには掠りもしていないからだ。

「うん。——いい風」

そうですね、と軽く頷きながら私は眼下に広がる光景を見た。この場所からは城下町をぐるりと覆う塀がはつきりと確認できる。南、東、西と三つの門があり、あの似非役人の言葉を信じるなら、そこで黒目黒髪が通るかどうが見張らせているのだろう。

城下町で、まず目に付くのは水路の多さだった。湧き水があちこちにあるのだとしても、ここまできちつと整備されているのは珍しいような気がした。……私が単にそう決め付けているだけなのかもしれないが。

町の隅に粉引き用の風車があると思えば、近くに日本の農村でよく見るような昔ながらの水車がある。夜を照らす必要がないから、外に照明のようなものは存在しない。しかし夜に外出しないということは、夜中に調子が悪くなっても医者に行かず朝まで我慢するということだろうか？そのせいで手遅れになったら諦めるのか？甚だ疑問だが私にはその答えを知る術はない。

町の一角には麦に似た植物が重く穂をたらす。ここの主食だ。そして私達が出したゴミは、回収されるとどこかで焼かれているらしい。食堂でのちょっとした会話を耳に挟んでわかったことだ。そういった廃棄物を処分する体制が確立されている——なんともちぐはぐな世界だ、と思った。文化が統一されていないような、奇妙な違

和感がつきまとう。

(……異世界、だから?)

それで片付けてしまっているのかどうか。決定的な違いはあっても、ある程度の常識は通用するのでどこか油断してしまう。油断したところにまた別の違いを見せ付けられて、私はまた……。やめよう。余裕があるからといって無駄にカロリーを消費したくはない。ループしかけた思考を遮り、再び城下町を見下ろした。

食堂で働いているとこの町は随分広いと思ったものだが——こんな高台から全体を見渡してしまえるほどには小さいのか。ゆるりと視線を巡らせ、しかし視界に灰色の城が入って私は思わず目を逸らした。未だに直視する勇氣は、ない。

ここは私が思っていた以上に、平和な、平穏な町だ。犯罪は昼にだけ行われるので夜は絶対的な安心感を与えてくれる。ああ、でもこんな緑溢れる美しい国を眺めても、まったく何の感慨も愛着もわかないひとかけらの好意すら生まれない私は、人間として大切なものを失ってはいないだろうか——？

「ラギは、さ」

掛けられた声に振り向くと、同じように城下町を見下ろしていたはずのネヴィが、私に背を向けていた。彼女は足下にあった小さな石を蹴り密やかな溜息を吐く。石は大して跳ぶこともなく地面に落ちた。周囲に響く、乾いた音。

「……死ぬのが怖い？」

「怖いですよ」

考えるよりも先に口が動いた。たとえ考えたとしても答えは同じだっただろう。私は死にたくない。死ぬのが怖い。それを認めることに、なんら躊躇いはなかった。認めてしまうことを恥ずかしいとは思わなかった。……なぜそんなことを聞くのか、という至極真つ当な問い掛けは、喉に絡まって音にならない。ネヴィはただ淡々と言葉を続ける。

「死ぬのは、嫌？」

「嫌です」

「……自分が死んだら、助かる人がいても？」

これは、いったい、何の話だ。胸が押し潰されそうな苦しさを感じながらも、なぜ私の口は答えようと動くのか。この質問をはぐらかしてしまうことはできる。冗談にしてしまうこともできるだろう。しかし彼女の声が——表情が見えない分、そこに潜む真剣さが、刺さるように届くから。

「それは、助かる人によります」

「……？」

「命を捨ててまで助けたい人なんて、正直、ここには——」

いない、と言い切れずに私は言葉を濁した。迷う心があったからではない。ネヴィを目の前にして、彼女を切り捨てて言葉を何のて

らいもなく告げることはできなかったからだ。どんなに会話を重ねようと、どんなに仕事の苦勞を共にしようと、命と引き換えに彼女を助けるような自分を思い描くことはできなかった。その事実はどう繕ったところで変わりはいしない。彼女に対して、繕いたいという気持ちもなかった。

「……そっか」

私の言いたいことは十分伝わったのだろう、ネヴィは軽く頷いて再び城下町に視線を向けた。私はその横顔に向けて更なる言葉を投げかける為に口を開いた。普段の私なら決してそうはしなかっただろう。そう、騎士団に行く前の自分ならば。それは今までもずっと避けていた——彼女の内側に踏み込むこと、だったというのに。

「居るんですか」

「え？」

「……命と引き換えにしても、助けたい人」

息を呑む、ような気配がした。ネヴィがこちらを向く前に私も視線を外し、目を合わせないよう俯く。らしくもないことを聞いてしまった。安い好奇心とかじゃない、馬鹿みたいな興味でもない、けれどどうしてか、その時の私には聞かずにはいらなかったのだ。

「うん——。ひとり、ね」

「……………」

「でも、もうすぐいなくなっちゃうかもしれないから、……意味はないかな」

彼女は笑う。私を見て、笑う。その助けたい人を想っているのだろうか、ひどく愛おしそうに。心のどこかがずきりと音を立てて軋むのを感じながら、私は心地良い風に身を任せてただ沈黙を守った。ひとりという答えが意外だったような気がするのに、どこか納得している自分もいる。面倒見が良くて優しいネヴィは人によって態度を変えることはない。そのたったひとりは、彼女にとってどんな存在なのだろう。いなくなるとは——どういう意味なのか。

私はもう一步踏み込むことはできなかった。踏み込まないのは踏み込まれたくないから。それは今も変わらない。私は、そうなんですかと意味のない返事をしてその会話を断ち切った。これ以上はお互い言葉が続かなかっただろう、と思いながら。

「ね、ラギ。もうすぐ祭りが来るね」

気を取り直してか、今までの会話がなかったかのような朗らかさでネヴィが声を上げる。話題が切り替わったことに安心する反面、どこか妙な表現だと、頭の隅で思った。含まれたニュアンスに知らず眉を顰めるが、幸いにも彼女はそんな私に気付かなかった。

「たくさん食べ物を持ち寄って、そう、お酒もいっぱい飲んで。踊り子が舞を披露して、皆で朝まで大騒ぎして」

その祭りには殆どの町の人間が参加するらしく、いわゆる無礼講の飲めや歌えやの大宴会——だそうだ。半年に一回、唯一その日だけが何も気にせず外に出られるとあって、本当に嬉しいのだろう。その感覚を私が味わうことはないだろうが。

「神様に許された、大切な時間——」

彼女は笑う。私を見て、笑う。ひどく愛おしそうに、あるいは、…懐かしそうに？

「終わらなければいいって、……私は、思っの」

その言葉になんと応えたか、どうしても思い出すことができない。

お祭り？いえ、私は帰ります

おお、と、感嘆の声が漏れた。ここまでたどり着くのによろしい。どれだけの労力を要しただろう。私は万感の思いを胸に、それを壊さないようゆっくり両手で包んだ。色々おまけをつけてくれたからずしりと重い。この日、私は初めて――己の給料だけで――念願のお菓子を手に入れた。お菓子と馬鹿にしてはいけない。下手な保存食よりよっぽど美味しく、またきちんと管理しておけば長く持つ。ここまで本当に長かった。この努力は賞賛されてしかるべきだ。主に、自分自身に。

「な、泣くなよ姉ちゃん……」

「……泣いてません」

店を手伝っている私より若そうな男の子にそんな言葉を掛けられつつ、庶民向けのお菓子屋さんを後にした。

今日は朝から町全てが浮き足立っていた。そわそわしていると言えはいいのか、誰も彼も今夜に控えた“祭り”の用意に大忙しだ。それは私の働く食堂でも例外ではなく、泥作業組の私にも買出しの仕事が回ってきた。いつものネヴィからのお願いはない。

食堂の本領発揮というべきだろう、祭りで皆に振る舞われる食糧の半分はここから出るらしい。騎士団長の兄が経営しているからかどうか、とにかく忙しくて忙しくて仕方がないのだ。……まあ、そ

の買出しの間にちょっと自分の用事を済ませたところで誰も咎めはしないからこそその寄り道なのだが。

私とネヴィが騎士団に連れて行かれてから——今まで。外出を極力控えた私は、特に何の事件に巻き込まれることもなかった。国に關係するような人物を見かけることも。ネヴィもまた彼らの探す対象ではないと証明されたから、その後絡まれたりするようなことはないようだった。あまりのあっけなさに本当に大丈夫なのかと心配になるほど。

（それに、……ネヴィは）

彼らはいいだろう。当てが外れたとはいえ、目的を果たして一定の満足を得たのだから。けれどその対象だった彼女は日が経つことにどんどんその表情をかげらせていった。仕事中也ぼんやりすることが多くなり、監督の人間から怒られてばかりいる。

昨日なんて、食材のいっぱい入ったカゴをまたひっくり返してしまったくらいだ。私が一緒にいたのが幸いして、誰かに見咎められる前に片づけることができた。——私は、彼女に掛ける言葉を持たなかった。……ある種の予感はある。彼女が日々やつれていく様を、どうすることもなくただ見守っていた。

食堂に戻り頼まれた食材を台所に置きに行くと、珍しく店長が表に出てきており、指示をあちこちにとばしていた。通常営業の傍ら祭り用の料理を作るので、色々と手が回らないのだろう。

「さあさ！ 夜になったら思う存分騒げるんだから、アンタ達、きりきり働きなさいよ！」

ただ野菜の下拵えを延々と繰り返していればいい私と違って皆は大変だろうなあ、と他人事のように思いながら、店長の檄を飛ばす声を背に、裏庭へと戻る。ネヴィは案の定そこにはいなかった。買出しに出る前、別の仕事を言い渡されているのを何となしに聞いていたから驚きはしなかった。

そして——定時。普段なら皆帰り支度に忙しい時間帯だというのに、食堂はのんびりとした空気に包まれていた。出来上がった料理はもう祭りの会場に運ばれたらしく、ここに残っているのはもう後は遊ぶだけの暇な人間と、最後の後片付けを押し付けられてしまった不運な人間しかない。それでも仕事が終わればもう朝まで自由だ。

自分の配置場所の掃除を終わらせた私は、台所でまだ捨てられていないゴミを集めている女性を見つけた。彼女は確か……私が騎士団長にもらったクッキーを実験よろしく食べさせた人だったか？

「あの、それ、私が捨ててきますよ」

「え？ いいの？」

「私、特に誰と待ち合わせしてるわけじゃありませんから」

待ち合わせる相手がいる、と話しているのを聞いた記憶があった。だからこんなところでゆっくりしてたくはないだろう。クッキーに何もなかったからこそ罪悪感の僅かに残っていて、罪滅ぼしの為にそう声をかけた。すると彼女は、それはもう嬉しそうに笑って何度も頷き、ありがとと手を振って食堂を出て行った。——罪悪感が消えるどころか、どこか重みを増したような気がする。複雑な気持ちを抱えながら、そのゴミ袋を両手に持って、とりあえず外へ向

かうことにした。

ネヴィは会場に料理を運ぶよう言われていたから、今頃はそこに留まっているのだろうか。ゴミ捨て場の静寂がどこか落ち着く。臭いは少々いただけないが。……本当に奇妙な夜だった。じりじりと姿を消していく夕日が町を照らしていて、こんな時間になっても人の気配がそこかしこにある。日本でならむしろ当たり前の情景がこんなにも珍しく感じるなんて。よっと力を込めて、既に山積みになっているゴミの上にまた新たな袋を置いた。——瞬間、遠くから大きな音が響いて私はその方向へ振り向く。

「あ……」

散る光。そして、音。祭りにはこれが付き物か、と思っただけからここが日本ではありえないことを思い出す。もう少し暗くなってからならもっと綺麗なのに、まったく気が早いことだ。もったいない。薄闇に咲く花を、私はこんな路地裏のゴミ捨て場から見守る。

（花火、……なんて）

安い。そしてしょぼい。花火といったら色とりどりでもっと大きく派手じゃないと。花火製作者に文句が言いたくなるような出来栄えだった。あちらでの花火の方が数百倍、数千倍は綺麗だ。……そう思うのに、私は断続的な光と音が消えるまでそれから目を離すことができなかった。薄汚れた場所で、ぼんやりと立ち尽くしていた。夜空を照らす火花が消え薄闇が戻ると同時に、わあっと歓声がある。となると——あれは祭りが始まる合図だろうか。そうだとし

たらあの光の下で、これから選抜をくぐり抜けた黒目黒髪たちが踊るのだろうか。その演目を見に行きたいという気持ちは、厄介事に出くわすかもしれないという恐怖の前にあっさりと力をなくした。

随分とゆつくりしてしまつたらしく誰も居なくなつていた食堂を後にしながら、この時間には珍しく大量の光——篝火、が集まる場所とは反対方向に足を進めた。今日の夜と今までの夜は、いったい何が違うのだろう。こんな夜に堂々と外を歩くのは初めてだったが、特に何かが変化しているようには感じない。人の流れに逆らう形で私は家へと戻る。すれ違う人々は皆楽しそうで、ひとり逆走する私を特に気にかけてはいないようだった。

ふと、私は行く道の先々に、例のつるつばげ集団が一定の間隔で立っていることに気づいた。彼らは周囲を油断無く厳しい顔で見回したかと思えば、町の人に声を掛けられて笑顔を返したりしている……ああ、そうか。警備しているのか、この町を。祭りに殆どの人間が参加するのなら彼らの家はがら空きである。また、夜が何事もなく過ごせるなら闇に紛れた犯罪のチャンスでもあるというわけだ。騎士団だって人間だ、この祭りに参加したいだろうに。お仕事ご苦労様、と適当なことを口の中で呟きながら私は先を急ぐ。いつも通りこの十字路を真っ直ぐ——

(……うお?!)

行かずに無理矢理九十度方向転換して、わき道に入った。早足だったのをゆるやかなスピードに戻しながら、今日に入った情景を思い出す。十字路を真っ直ぐいけば突き当たりで道が左右に別れるのだが、ちょうどそのど真ん中に、三名ほどたむろしていた男達を見つけてしまった。

一人は多分知らない男だったが、残る二人は——黒尽くめの騎士とお人好しそうな青年ではないか！騎士団なのだから警護にあたっ

ているのだろうかとはわかるが、なにも集団でいることはないだろう。騎士の二人と一緒にいるからにはきっとそいつも騎士に違いない。剣を差しているかどうかは確認できなかったが、色々どきどきしてしまつて反射的に避けてしまつた……。

（大丈夫。今のは距離があつたし、怪しくはないはず）

変な事に巻き込まれない限りもう流石に会うことはないだろう、と落ち着いたところだったのに。まあ、むしろ何も気にしていませんよとばかりに笑顔で挨拶できれば言うことはないのだが、声が震えそうで怖い。彼らの前で変に怖がつて不審を誘発するのはもっと怖い。

そもそも交友関係を広げるつもりはないんだ。あの相談所に勤めているらしい青年は、きつと私を見つければ親しげに声をかけてくれるだろうという予感があった、その親切さゆえに。一瞬しか見えなかったが彼の隣にいた見知らぬ男を紹介されないわけがない。

——面倒だけど、迂回するか。安全第一。だって怖いし、特にあの黒い人。

道に迷わないよう、全く知らない道へは行かないことにして、私は忌々しさを胸に一步を踏み出した。と、視界の端に何か光るものがうつつた、ような気がして立ち止まる。祭り会場とはまた別の方だ。

あれは——なんだろう？

昼と夜の『狭間』

まるで誰かに操られているかのようにだつたと、後になって思う。

ちよつと迂回して彼らから離れ、でもすぐに家に戻るつもりだつたのだ。誰にも会わないよう部屋という密室に籠って祭りが終わるのをただ待とう、と。ぽたりと冷たい雨が一粒、私の頬に落ちた。向こうの方でちらちらと瞬く光に引き寄せられていく自分を止められない。まるで蛍のような淡く、どこか儂い光。近づけば近づくほど遠のくそれに、単なる錯覚かもしれないとわかっていながら、ただふらふらとついていってしまった。何の光なのか全く疑問に思うこともなく。

いったい何がそんなに気になったのか、説明しろと言われてもできないだろう。夢見心地のまま私は歩き続けた。思考の止まった頭でも、光を追いかけて行く道のりは知らないものではないと理解できる。そう、一度通った道だ。それもついこの間、ネヴィと二人で歩いたのではなかったか――。

(……あ、れ?)

二人で帰った道を今、逆に辿っている。つまりその先にあるのは？ろくに物も考えられない頭が答えを弾き出す前に、私はそこに辿り着いてしまった。そう、まだ忘れるほど時間が経っていない。

……ここは、騎士団の詰め所だ。光はこちらへ来いと言うように奥へ、奥へと私を誘う。警備に殆どが駆り出されているのか人の気配はなく、固く閉ざされた門がひどく冷たい。門の傍を通り過ぎた光は騎士団の詰め所を囲う柵に添う形で、ゆっくりと移動していた。

本当に、――私は何をしているのだろうか。こんな怪しすぎる光な

ど放っておけばいいのに。まるで明かりに群がる虫にでもなった気分だ。……と、一定の距離を保って配置されている篝火が照らした場所に目が行った。柵越しに見えるそのただっ広い空間は、確かつるつばげ集団が訓練という名の殴り合いをしていたところじゃないか？これじゃ外からも丸見えだ、あんな訓練風景など見たくもないが。光についていきながらぼんやりとそう考えていると、突然、ふっと一瞬で光が掻き消えてしまった。

「……っ！」

ここで消えるか！と思わず突っ込んでから、あれだけやけていた頭がいつの間にかはつきりしていることに気付く。まるで呪縛から解き放たれたかのようにその違いは明らかだった。しかしよくよく考えてみれば、私、かなり危ない状態だったのでは……。まさか「あの男」が使っていた法術なんだという意味不明な術を何者かに使われたのか？一氣に不安が襲ってきて、しんと静まり返っている周囲を慌しく見回す。誰かが見ているのではないか、誰かにつけられているのではないかと怖くなったのだ。

そうやってきよろきよろしていると、……私の少し前、篝火の明かりがぎりぎり届くか届かないかのところに、何やら蠢く影を見つけてしまった。瞬間ぎりりとして、けれどその痛いまでの緊張はすぐ驚きに変わった。

（——って、ええ?!）

しげしげ観察するまでもなく、どこからどうみてもネヴィだった。今日最後に見たときと同じ髪型、同じ格好だった。間違いない。私が言葉を失っていると、彼女はその柵を今まさによじ登ろうとして

いるところだった。いやいや、いやいやいやいや。どうしよう、どこからどうみても不法侵入を試みているようにしか見えない。不審者丸出しだ。これは流石にやばいだろう！こんな騎士なんていう人間が普段集まるところに無断で入って見つかりでもしたら、問答無用で切り捨てられたって文句は言えまい。

——でも、と混乱しきつた頭はぐるぐると考え出す。彼女は真面目だし常識も弁えている人間だ。今自分がしていることがどんなことなのか、理解できないはずはない。そして彼女にそんな真似をしなければならぬ理由などあるだろうか。

あ、……もしかして、祭りで出されるというお酒で酔っているのだろうか？そうかもしれない。いや、そうであってほしい。きっとそうだ！そういうことなら私は、同僚として、彼女が犯罪に手を染める前に止めてあげなければ。

「……………あ、あの！」

そんな決意と共に勇気を振り絞って掛けた声は、緊張ゆえの震えを伴いながら、訓練場に空しく響きわたって——そのまま消えた。応えは、ない。

（無視……？ え、無視なの？）

まるで全然聞こえなかったと言わんばかりに反応ひとつみせず、ネヴィは柵に足をかける。今にも身を空中に躍らせようとしているかに思えた。聞こえない距離ではない。聞こえない声量でもない。そのあまりのナチュラルなスルーっぷりに、私はなんだか泣きそうになってしまう。

酔っているかどうか以前の話として、ネヴィに、……毎日会話を

交わしている彼女に、こういう態度をとられたのは初めてのことだった。自分で思っていた以上に私はショックを受けていた。抱える秘密の大きさゆえ、距離をとっているのは確かに私だ。だけでも。

「待つ……！」

ぼつりぼつりと、頭上から雫が落ちてくる。それは勢いを増すことはないが止む気配もない。雨は雪と同じように音を吸収するといふ。私のこの声は、彼女には届かないのだろうか？

——駆け寄ればいいのに。

どこから湧いた思考に私は思わず顔を顰めた。

——駆け寄って、肩を掴んで、止めればいいのに。

止める？それが出来れば苦労はしない。こうしている間にも柵に足をかけては戻し、戻してはかけるを繰り返しているネヴィを見やつた。暗闇に目が慣れてきたのかその横顔を窺うことができる。

……私に、何が、できるだろう。彼女の表情には、酔いの欠片も感じ取れなかった。そんなこと、本当は最初から分かっていた、けれど。

ネヴィには何か目的がある。この柵を越えて不法侵入してまで、行かなければならないところがあるのだろう。でもそこはもう“国”の領域だ。私は、行けない。今彼女に近づけないのも、近づいて触れて振り向かせられないのもその所為だった。そこは“国”だ。私が最も忌避する「あの男」の——。

(……行け、ない)

怪しい光に導かれてここに来たことなど最早どうでもよかった。

私の全身を支配しているのは紛れもない恐怖であり、今すぐ回れ右して逃げ帰らなければならない状態にある。それと同時にネヴィを、彼女をこんな所に置いていくわけにはいかないという思いもあった。私がこの国に連れて来られてから今まで、いったい何度彼女に助けられた？彼女の差し出すお菓子が、それに宿った優しさが、何度私の命を救った？もちろんそれらが同情や憐憫から来るものだったとしてもその価値は変わらない。このまま彼女が罪を犯すのを黙って見逃すのか。……止められる立場にいるのに、一人逃げ帰るのか。見て見ぬ振りをして次の日の朝、ネヴィが捕まりましたなんて知らせをどんな顔で聞けばいい？

(ね。だからもう止めよう、って)

喉がひりつく。この静寂の中、声を張り上げるには相当な意志の力が必要だった。彼女は真っ直ぐ柵の向こうを見据えていて、私のことなど目に入らないといった様子だった。怖い。止めなければ。二つの相反する感情が私の心を支配する。しかしこんなにも私が必死になっているというのに、彼女は再び柵に手を伸ばした。

「——」

待って、(その先は)待ってよ、(その先には行きたくない)待ってってば。(その先には、何か、よくないことが——)

夕日が完全に沈んだ暗闇。この世界の人間が、何の制約も受けることなく自由に行動できる唯一の夜。人々はそれを昼と夜の『狭間』と呼んでいる。

「——ネヴィ！」

ああ。己が口から放った単語に、私は胸を掻き毟りたくなるような苦しさを覚えた。ああ、……やってしまった。それは、私がずっと敢えてしていなかったこと、だから。それでも私は引きとめたかった。こちら側へ戻ってきて欲しかった。そんな風に思うくらいには——私はきつと、彼女のことを。

「……初めて、」

雨が降る。私と、彼女と、恐らくは今も祭りを楽しんでいるだろうこの町の人々に。私という異物がこの世界に紛れ込んだことを知っている誰かにも、平等に。立ち尽くしたままそれ以上動けない私の前で、彼女は、強く握り締めていた柵からそつと手を放した。そしてゆっくりと——こちらへ、振り向いて、ほんの少しだけ笑ったようだった。

「初めて……名前、呼んでくれたね。ラギ」

——あめが、ふる。私達の、間に、ずつと。

昼と夜の『狭間』（後書き）

一章終了。

長い、長い夜の始まり

日本で暮らしていた間、私は名前が特別なものだと思ったことはなかった。もちろん、親に貰った名前なのだから愛着はある。しかし私にとってそれはただの名称であり、個人を識別するための記号でしかない。と、思っていた。いや、そう考えることすらなかったのだろう。名前を持つことは当たり前のことだったのだから。誰かと名前を呼び合って生きること、何の疑問も持たなかったから。

今——この世界に、文字通り誘拐されて、そこに生きる人々と出会って。私にとっての“名前”が、特別な意味を持ち始めた。私が私であるということ。この見も知らぬ世界で唯一私という存在を証明するもの。髪と目の色を変えられた状態では、外見は最早別物だと目を逸らしてしまう。

名前。私は、名前を呼ぶことと呼ばれることで、そこに見えない繋がりが出てしまうような気がしていた。それはコミュニケーションの一種だから当然なのかもしれない。逃げ出した私に、隠れたい私に、この世界との繋がりなど必要なかった。西洋風の名前の中で変わった名前ね、と目立ちたくもなかった。そしてそれ以上に、唯一私が私であると証明できる音の並びを誰にも教えたくなかった――。

『ラギ』。それはただの欠片だ。呼ばれても何の感情も湧かない。

だから私は同じように誰の名前も呼びたくなかった。私の頭の中ではお菓子の人はいつまでもお菓子の人で、黒い人もずっと黒い人のまま。ここに馴染むつもりなど毛頭ない。別に名前を呼ばなかった

って生きていける。他だってどうせ仕事でしか会わない人達ばかりなのだから、「すみません」だの「あの、ちょっと」だのと声を掛ければ事足りる。深く関わろうとしなければ。

……まあ、私が住む家の管理人さんだけは個人的にどうしようもなかったのだが。店の人に紹介され会ったその日に、アニーさんと呼び。と命令口調で言われてしまったのは逆らう気などおこらなかつた。恰幅のいい女性が仁王立ちしていると大人しく従いたくなるのは何故だろう。——ああ、その中でも、確かにネヴィは特別だったのかもしれない。

敢えて呼ばないように努めなければならなかつた。心の中では、ずっと彼女の名前を言葉にしていたのに。私は嬉しそうに笑うネヴィを見て、その笑顔をこれ以上直視できず、少し横に視線をずらした。

「……そう、でしたっけ」

「うん。だからラギは、名前を覚える気ないのかと思ってた」

「そ、それは流石に性格悪すぎるような……」

台詞がどこか辛辣に聞こえるんですが、わざとですか？嫌味ですか？食堂で働いている姿からすればちよつとイメージが違ふ彼女に若干焦りが生まれる。ネヴィはさっきまでよじ登ろうとしていた柵に背を預け、可愛らしく首を傾げた。ううん、やっぱり含んだものはないんだよなあ。彼女の言葉はまっすぐ心に届く。ゆえに余計くさぐさと突き刺さるのだが。

「ふふ。……ね、ラギ。もう一回呼んで？」

「——」

「えええ、もう打ち止め？ けち！」

繋がりはもう、できてしまっただろうか。私はどうしてかそれが恐ろしいことのような気がしてならない。乞われるまま開きかけた口は何の音も発さずにただ、沈黙だけを吐き出す。そしてそんな私にむくれてみせる彼女は、到底、今から罪を犯すような人間には見えなかった。

「あの、……もう、帰りませんか。こんな物騒なところ、見つかったら危ないですよ」

「やだ」

「っ！」

即答か。その短く、けれどはっきりとした拒絶に私は二の句が継げられない。どうしてと尋ねるのは気が引けた。彼女の目的が何かを知ることは、私にとってとても危険な臭いがする。さつき、その柵を越えた向こうに行きたくない強く本能が訴えたように。

理想はこのままネヴィを説得して連れ帰ることなのだが——やはり、そう上手くはいかないようだった。私を見据える瞳に宿る力は強く、篝火の明かりしかない暗さでも彼女の感情を伝えてくる。

「というか、無理。だって、今しかないんだもの」
「今って——」

「今日は祭りだから、騎士はほとんど全員町へ警備に出てるでしょ？ もちろん城の中は近衛兵とかが残ってるだろうけど、そもそも祭りは王族全員参加だしね。油断はできないけど、でも、ここをがち

がちに固めることはないわ」

「いや、だから、犯罪ですし！」

「——それでも」

それでも。決して語気が強かったわけじゃない、むしろ囁きのように柔らかな口調で彼女はそう言った。駄目だ、と思う。あれは自分の中で答えを決めていて、それを絶対に譲らないと決めている人間の目だ。説得は恐らく意味を成さないだろう。……それでも。私は心の中でネヴィの台詞を繰り返した。……それでも、私は。

「流石に騎士団に忍び込むのはまずいです。ね、今日は帰りましょう」

「……………」

「騎士団に捕まって処罰されてほしくありません。だから、私と一緒に帰ってください——ネヴィ」

「む。そういう使い方は卑怯だと思う」

「知りませんよ！」

ネヴィはくすぐったそうに笑う。恥ずかしそうに、どこか嬉しそうに？名前を呼んだだけでそういう反応をされると、こっちまで赤面してくるのはどうすればいいものか。今が夜で本当に良かった。動揺で声が震えそうになるのを何とかこらえて、私はただ彼女を見つめる。これ以上の言葉は重ねるだけ無駄だった。私の主張は、きつと、彼女の想いには敵わない——。ネヴィが頷かないだろうことは痛いほどにわかっているのに、私はただ願っていた。

「じゃあ、ラギも行く?」

だから、そんな斜め上の言葉が返ってきたときには自分の耳を疑った。

「嫌です!　っ、ていうか今の流れでどうしてそんな話になるんですか!」

「うーん、実は一人じゃちよつと怖かったんだよね。ラギがいてくれるなら私、頑張れそうかな」

「何を頑張るんですか、むしろ怖くない方が異常ですよ。怖いなら止めましょう、ね!　そもそも見つかったらただじゃすまされないし、……　本当、死刑とか勘弁してください」

「大丈夫大丈夫。騎士団さえ抜けたら、後は——今の時期は、誰も近づいたりなんかしないもの」

どこに。反射的に問いそうになって私は唇を引き結んだ。彼女の目的地、の話だろうか。騎士団そのものへ用事があったわけじゃないのかと安堵しつつ、だったらどこに用事があるのだろうと疑問が湧く。騎士団を抜けた先に何があったか?　ネヴィが入ろうとしていたところから行ける場所とはどこか。城の中に入りたいのなら明らかに遠すぎる。他に、と視線を彷徨わせるが、暗闇でよく見えなかった。そもそも必要がないからか篝火の数はひどく少ない。

「ラギ、お菓子あげるから一緒に」

「行きません。割に合わなさすぎます」

「そうだよねえ。——あ、じゃあ、夜の神子について教えてあげる

から一緒に行かない？」

「……………え？」

一瞬、何を言われたのかわからなかった。あまりにもさらりと放たれた“それ”。頭が理解することを拒否したかのように、思考の止まった私は目を瞬かせて呆然と立ち尽くした。ネヴィは何の含みももたない表情でにっこりと笑う。対する私は、十中八九、蒼白だったに違いないけれども。

「よ、るの——『みこ』……？」

「ラギって本当に食べ物のことしか興味ないんだから、もう。祭りの演目だってわかってなかったでしょ？」

「……………わ、私、は、」

怖い、と。ネヴィに対してその感情を抱いたのは初めてだった。

彼女がどういふつもりでその発言をしたのか判断がつかない。あまりにも一般常識のない人間に対する同情からくるものか、それとも何かを知って——いる、のか。優しく笑うその様子からは本当にわからなかった。私は下手な発言をして墓穴を掘りたくなくて、ただネヴィを見つめ返すことしかできない。

「そういうこと、全部教えてあげる。ラギの知りたいことぜんぶ！」

——どうすれば、いい。

いいからこの際、釣られます。

ネヴィに同行するか否か、——その報酬は『情報』であるという。どう？と首を傾げて、につこりと笑う彼女が可愛いと思う私の頭はどうかしているに違いない。現実逃避も大概にしろと自嘲しつつ、それでも私は答えを選べずに黙り込む。私が知りたいこと、全部？今置かれている状況を考えればそれは願ってもない申し出だった。

こんなに頭が悪かっただろうか、と悔しくなるほど全然この世界の文字を覚えられない状態で、いったいいつになったら本の一冊や二冊、簡単に読破できるようになるのか。あるいはそのいつかに読めたとしても、書かれている文章を私が正確に翻訳できたかどうかって証明する？

誰にも聞けないから一人でやろうと苦しんでいるのだ。他人に、何て書いてあるんですか？と内容を問うのは、私にとってあまりにもリスクが高すぎる。……それが驚くような内容だったら、私自身「おかしな」反応をしないとはい切れないからだ。それもある種のフラグだろう。

まあそもそも、そういう細かいことが書かれている本をきちんと読める人間がこの界限にどれだけ存在するか、という問題もあるのだが。きちんと教育を受けている貴族や国の息が掛かった連中には絶対に関わりたくない。——論外だった。

「全部、って、どういう意味ですか」

「全部は全部よ。私、ラギよりは物を知ってるもの。何でも聞いて

？」

「……ええと」

さらりと言い放たれた失礼な言葉に腹が立たないのは、紛れもない事実だからか。それとも言ったのが彼女だからか。私はその提案にぐらりと揺れる自分を自覚していた。……揺れた時点で、答えはほとんど決まっていたのかもしれないけれども。

まず、ネヴィについて行った場合に起こり得るだろう、思いつく限りの懸念事項を頭の中で並べてみる。小さなものから大きなものまで。その中でも一番怖いのは、この人間に見つかって捕まることだ。私はいまいち世界史に明るくはないのではつきりしたことは言えないが、こういう王制が敷かれているような国で罪を犯した場合、驚くほど簡単に極刑行きなイメージがある。言い訳すらさせず。特に国の権威を失墜させるような——罪、は。

（でも、ネヴィの言う通り、確かに人はいない）

ここでこれだけ会話して……というより騒いでも、誰もやってくる気配がない。見回りもない。ここ一帯がしんと静まり返っている。騎士団そのものは大通りに面しているのに、ここが裏側だということを考えても人っ子ひとり見かけないのは……祭り、だから？しかし、騎士がひとりも詰所にいないとはどういうことだろう。

町の警備で精一杯？この国の騎士団はそんなに規模が小さいのか？なんだか釈然としないものの、今柵を乗り越えても見つかりそうにない、のは、素直に認めよう。

「あつても！報酬は後払いだからね。踏み倒されちゃ困るもの」「踏み倒す？！って、ああもう、私はただ性格悪いんですか！」

「そっか、じゃあこうしよう。もし万が一誰かに見つかりそうにな

「つたら、ラギ、逃げていいよ」

「っ、だからそういう——……じゃなくて！ 人の話を聞いてくださいー！」

ここでもうひとつ、重要なことがある。それは、ネヴィ本人が信用できるかどうか、だ。彼女のもたらす情報が本当に正しいものかどうか、何も知らない私にはわからない。私に情報を提供することそのものが何か他の目的に繋がっていたとしても、私にはわからないのだ。

騎士団を出るとき、黒尽くめの騎士は周囲に気をつけると言った。ルカの姉は友人に裏切られ、売られた。その事が私の身に起こらないと、どうして言える？

——でも、と私は思った。

この世界で、いったい誰が信用できるだろう。この世界に、“彼女よりも”信用できる人間が果たしているだろうか。私は、小首を傾げたまま辛抱強く待つてくれているネヴィを見やった。根底にどんな理由があつたところで、あれこれ世話を焼いてくれた彼女には本当に感謝している。信用度の絶対値は低くても、この世界で一番信用できる人間は、と問われれば私はネヴィを選ぶだろう。彼女が優しいことを、身を以って知っている——。

「ついで、いくだけですからね」

「……え？」

「私、危ないことは嫌いなので、何もしませんから。でも報酬につられたのでついていきます」

「っ、本当？ いいの？」

なんとかひねり出した答えに、ネヴィは意外だというように驚いて声を上げた。いや、それこそ意外なのだが。どこかほっとしたように肩の力を抜くさまを眺めながら、思う。

もし危ないことがあったなら、彼女がどんなに嫌がろうと無理矢理引き摺ってでも連れて逃げよう。日々の重労働で鍛えた腕の力を見せつけてやるのだ。だから置いていくことがないように、置いていかれることがないように、できるだけ近くにいればいい。

「いいもなにも……そもそもネヴィが言ったんでしょ。あ、もちろんお菓子つきですよ」

「……。……ラギ、がめつい」

「褒め言葉ですか？」

情報を得たらそれを鵜呑みにせず、まず考えればいいと自分に言い聞かせる。先入観というものはどうしてもついてまわるが、いや、それでも全くの無知でいるよりは遥かにマシなはずだ。私が思いついた幾つかの懸念事項に目を瞑ってでも——知りたい、という欲求は強かった。そしてネヴィはきつと真実を語ってくれるだろうという全く根拠のない自信も、また。どうしてか。……餌付けされたからか。

「ん。——いいよ」

じゃあ今回は、奮発しちゃうから！そう言って力強く拳を握る彼

女から、私はまた目を逸らした。一緒に行くよ。傍にいる。だからどうか、そんな泣きそうな顔で笑わないでほしい。……どうすればいいかわからなくなるから。

柵を越えるのはかなりの勇気が必要だった。侵入者対策などとられていないのか特に上部が尖っていたりはしないのだが、足を掛ける場所が少なく、よじ登るのはもちろん飛び降りるのにも少々時間を要してしまった。

それから私達は静かに、けれど大胆に訓練場のど真ん中を突っ切り、ついこの間通ったばかりのやけに足音が響く廊下に身を滑り込ませる。ああ、これで完全に不法侵入をやらかしてしまった。こちらとしては助かるのだが、本当にこれでいいのか、騎士団よ。危機管理はどうなってるんだ。

廊下に立つとネヴィに促され、余計な音が響かないよう木だか皮だかで出来た靴を脱ぎ、裸足で歩く。石造りの床から直に伝わる冷たさが心地いい。同時に、表面の凹凸が少し痛かった。

(……靴下、あつただけだな)

脅されるまま着替えさせられたときだったか、いつの間にか「あの男」に服諸共隠されてしまって今はもうどこにあるのかわからない。もちろん今持っていたとしても、靴下を身につけているのは大抵金持ちと決まっているので履けなかっただろうが。そう、貴族と

呼ばれる類の人間は、私が持っているのと似たタイプの靴下を使用しているらしかった。……やっぱりこの世界の文化はわからない。

ネヴィは決して急がなかった。ゆっくり歩いて周囲をやたら見回すのも、最初はやはり警戒しているのかと思っていたが――暫くすると、むしろどこか辿り着くことを恐れているようにも見えた。彼女はこの間行ったあの執務室を通り過ぎ、奥へ奥へと進む。……ひどく、慣れた足取りだった。

やがて足の裏が冷えて温度を感じなくなった頃。私の目の前に、美しい装飾を施された扉が現れた。

(ここは――)

『ここから出て右手の奥、突き当たりに、巫女の祈りの間があります』

ふと、若白髪の声が甦る。知らず呟きが唇から零れた。

「祈りの、間……？」

「そう。光の巫女は、ここで祈るの」

何を？この国の平和を？あるいは、この世界の平穏をか。冷めた思考が頭を過ぎった。祈りの間とやらに続く扉はとても分厚そうで、執務室以上に頑丈な造りをしているように見える。固く閉ざされたそこは何者をも拒絶しているかのように、ひどく冷たい。……どうしてか、見ているだけで寒気がした。

「ラギ」

こつち、と袖を引かれて、私はその扉から意識を引きはがした。ネヴィは祈りの間には全く興味がないようで、私の服を掴んだまま更に奥へと歩き出す。すると扉の前からは丁度死角になっていた場所に、人ひとりがうしろ向きに立っている。狭い階段があった。両壁に手すりがつき、上へと螺旋状に延びている。そんな狭いところを彼女が先導する形で階段に足をかけた。ビロードのような布が張られたこの床は石の冷たさを伝えない。

高さにして丁度二階分ほど上がっただろうか。

螺旋階段の先には、どこまでも白く、息が詰まりそうなほど神秘的な扉があった。

ただ、終わりを待つ人

神々しいと本当に言ってしまったていいものかどうか。それは病的なまでの白さだった。木なのか石なのかはたまた金属なのか、指先で触れてみてもよくわからない。じつと見ているとそのまま吸い込まれてしまいそうなほど綺麗な扉。ここの真下に祈りの間があることを考えれば、それは『光のみこ』に関わる何かだと私が思い至るのは当然で、……今、その先に何が待っているかは明白だった。

「ここが——ね。光の巫女が、住む部屋よ」

ネヴィの言葉にやはり、と思う。その声の柔らかさにまたどこか胸が痛んだ。優しく、そしてどこか懐かしそうに語る口調はあの高台で聞いたものと同じ——そして彼女の視線は、白い扉を通り抜けた向こうを真っ直ぐに見据えている。

この部屋に通じる螺旋階段は毎日使うにしては少々不便なように感じたが、住んでいるのが『みこ』という特別な存在ならば仕方ないのかもしれない。警備面からしても、外から以外は階段を塞いでしまえば入れなくなるので守りやすくなる。……そもそもここへは騎士団の詰所内を通らないと来ることができない構造のようで、階段に重点を置いているわけではないだろうが。

私は高台から町全体を見下ろしたときの光景を思い出してみる。広いようで狭い町。いや、そういえばあの位置からだと言所の向こうに城があったので、直ぐ目を逸らしてしまったのだった。私はこの外観を思い浮かべることができず、ただ想像するだけにとどめた。

一階の祈りの間と、高さからすれば三階にある『光のみこ』の住居。それらを繋ぐのは細い螺旋階段だけ。建物全体の高さこそ低いものの、これではまるで塔の上に閉じ込められたお姫様のよう――。と、そこまで考えて、それが全く笑い事にならないことに私は軽く唇を噛み締める。長く持った、だなんて消耗品のように言われる『光のみこ』。住む場所さえ決められていて、毎日ただ祈る、そんな生活を送っているのだろうか。だとしたらさしずめここは牢獄とでも呼んだ方が相応しいかもしれない。幾何学的な紋様が描かれた白い扉の先がどんな様子なのか全く予想がつかなかった。

本当にこの先に――いる、のだろうか。私は隣で扉を見つめるネヴィをそつと窺う。不法侵入という危険を冒してまで会いに来た彼女にとつて、今この部屋にいるのはきつと、あの日言っていた『命を捨てても助けたい人』……。

（ん？ 待てよ。まさか連れ出しに来たとか？）

不法侵入に加えて誘拐の片棒をも担がされ――……は、流石にしないか。想像に思わず引き攣りそうになった口元を押さえ、私は扉に視線を戻した。ついていくだけで何もしないと最初に言い切っておいたからなと思ういたい。おまけにネヴィは明らかに手ぶらだったし、格好も食堂で働いていたものと同じだった。そこまでやるならもつと準備をしてくるはずだ、きつと。うん。たぶん。

妙な思考に囚われて動けなくなっていた私の脇をすり抜けるように、彼女はゆつくりと腕を伸ばした。そしてそのまま扉の取っ手を握り、手前に引く。

（っ、ええ?!）

何の抵抗もなく開いたそれに驚く私をよそに、ネヴィはさつさと

その部屋に入っていつてしまった。完全に私を放置して。って、ノックもなしかい！確かに最初から不法侵入だけど！今更かもしれないけど！

彼女の口ぶりからして多分女性だろう『光のみこ』の部屋に無断で入るのはもう、途轍もなく気が引けた。……だがしかし、この細い階段で一人残されるのは更にもっと嫌だった。私はせめてと控えめに「お邪魔します」と声を掛けて、ネヴィの後を追った。私の背後で、少し勢いのついてしまった扉が耳障りな音を立てて閉じた。

こここそ部屋の中に入ると、案外広い空間に出迎えられた。今日が特別な夜だからか、こんな時間でも部屋の数箇所にも明かりが灯され、特に暗くは感じない。それをいいことに私は不躰にもきよるきよる周りを見渡してしまった。その、あまりのギャップに。

どこまでも白く神秘的な扉から勝手に連想していたイメージとは真逆に、なんとというか、こう、いわゆる、少女趣味が全面に出た内装だった。全体的にピンクだの白だのレースだのがふんだんに使われていて――、一気に生活感が押し寄せてくる。神秘的、言い換えれば無機質な入り口とは裏腹に、ここで人間が“生活”しているのだと十分にわかった。

その感覚にはっと我に返った私は、人様の部屋で失礼すぎると慌てて正面を向く。するとちょうど部屋の中央に置かれたベッドの天蓋にネヴィが手をかけたところだった。そう、ベッド。部屋のと真ん中に。

(天蓋つき……なのは別にいいとして)

使われているレースが綺麗だとか、お姫様用かと思うほどに豪華だとか、そういうのはまあいい。しかしなぜそういう配置なのかがもの凄く気になる。扉を開けた真正面にベッドってどうかと思うのだが、それとも天蓋つきだから気にならないのか？

金持ちの考えることはわからない、と僻みにも似た感情を覚えつつ、私はネヴィが布を横に退けるのを何となしに見守る。……いや、ベッドということは、もしかして件の人は今お休み真つ最中なので……？その可能性を完全に失念していたことに気付き、私はばつと身を引いた。部屋を明るくしているから油断していた。ネヴィと違って、私は赤の他人でしかない。寝姿など見られたくないだろう。

(――――)

そう思つて、目を、逸らした。そのつもりだった。けれど間に合わなかった。私は、目の端に飛び込んできた色彩に、全身の動きを止め立ち竦んだ。――最初に私が認識したのは、鈍く光る金色。長く長くシーツを覆うそれは、ネヴィが開いた天蓋から差し込む灯りを反射して煌めく。足が床に縫い止められたかのように、私は、動けない。

「――」

ネヴィが何かを言ったような気がする。彼女は、絵に描いたように華やかで美しいベッドに横たわる誰かへと駆け寄り、その身をかめた。ベッドの奥は薄暗くてはつきりと見えない。だが、その人物は彼女の呼び掛けに応えてかゆつくりと身を起こしたようだった。

膝について枕元に顔を寄せるネヴィの、頬を、優しく撫でた――
――手。

「
」

指先から凍えていく。息が、できない。この場から逃げるという選択肢すら思いつかず、目を閉じることも忘れて私は無意識に一歩後ずさった。――嗚呼。ネヴィはその手を自分の両手で包み込み、笑う。優しく、ただ、優しく。そこに居るのは、何だ？ベッドに身をもたせかけ彼女と見つめあう、ソレ、は。

嗚呼、なんて。

（――おぞましい）

己の思考にぞつとして、私は咄嗟に口元を覆った。それでも胸いっぱいに広がる嫌悪感はますますその強さを増していく。見つめ続けて目が慣れたのか、次第にソレの姿かたちが理解できるようになった。伸ばされたしわくちやの手、深く皺が刻まれた顔、ネグリジエのような夜着から覗く身体はまるでミイラのように骨と皮だけ。ネヴィは……ソレを、確かに「おねえちゃん」と呼んだ、のに。

「えへ、来ちゃった。……久しぶり」

「
」

「うん？ 大丈夫だってば、誰にも見つからなかったし」

けほ、と小さな咳が耳に届いた。するとソレ——いや、ネヴィの姉、だという人物のしわがれた声が、こちらにも聞こえてくる。本当にひどく現実味がなかった。

「なに、しに……来たの」

「ええと——お姉ちゃんを看取りに？」

「っ、早いでしょ、うが……っ！」

「……。……そうかな」

気持ちが悪い。老婆のような人間が、老婆のような声で、まるで若い女性のように喋ること。気持ちが悪い。二人の会話は耳を素通りして消えていく。内容を理解できない。

「てか、頼んで、ないわよ、……。っそんな」

そんなこと。と全て言い切れずに再びネヴィの姉は苦しそうに咳き込んだ。その痛々しい姿にも私の中の嫌悪感は消えなかった。おぞましい——それはあまりにも理不尽な感情だどこから窺める声がする。『光のみこ』は消耗品、それは誰が言ったことだったか。

「でも私に来るってわかっててくれたよね？見張り、見事にひとりもいなかったもの」

「……。まったく、あんたって子は……。いつも無駄に、行動、力が――」

「うん！ それに今日は、友達についてきてもらったから！」
「——とも、だち？」

あの老婆が若い女性なら、ネヴィは幼子か。にこにこ笑う彼女がとても幼く見える。家族の前だから？それはわからない。私はどこまでも付き纏う違和感に軽く苛立ちを覚え、消えることはない激しい感情を抑えこむのに精一杯だった。私がソレにどんな感情を抱いてしまっても、ネヴィを傷つけるようなことはしたくない。

「ああ、……あなたが、“そう”なのね」

ふと、明らかにこちらに投げかけられた言葉が耳に届く。思わず視線を向けると、——海のように深い蒼が、真っ直ぐに私を貫いた。

その瞳の奥にある『誇り』

初めましての挨拶も何もかも頭から吹き飛んだ。あまりに不意打ちだったため大袈裟なまでに身体が跳ねる。無知なふりをして誤魔化すこともできないくらい、私は、驚愕に目を見開いていた。

老婆——ネヴィの姉は揺らぐこともなく、さっきまでの弱々しさはどこにいったのか、強い視線をこちらに向けている。私は彼女から目を逸らすことができず、見たくないと拒絶したその姿を真正面から見る羽目になってしまった。痩せこけた、というよりも老いのせいで衰えきつた外見の中、金色の髪と蒼の瞳だけがただ色鮮やかに。そのアンバランスさが、余計彼女の不気味さを際立たせていた。

「ど、ういう……意味、です、か」

けれど唯一救いだっただのは、騎士共と相対したときのような焦燥感が全くないことだろう。彼女が今にも命潰えそうな老婆だから？「あの男」や騎士のように、私を傷つけることのできる凶器や凶器になり得る力強い腕を持つてはいないから？

——それとも、この色のせいかな。色だけがひどく際立って、鏡を見ているような錯覚に胸が苦しくなった。若白髪が言った通り、それらは今の私と同じ、まるでうりふたつな色をしていた。そのまま“写し取った”ような……？

「あら、……流石に、色をうつされたことぐらい、わかる、わよ」
「——あなたの？」

「そう、あたしの。——あいつが勝手にそうした」

皺の寄った口元を曲げ、どこか吐き捨てるように老婆は言った。その部分だけ低く囁くような声だった。あいつ。私に色をうつした人物、それはたった一人しかない。その考えに思い至るだけで心臓が痛みを訴えてくる。

「え、やっぱりラギのって、お姉ちゃんの色だったんだ！」

突然横から割り込んだ声に、またもやびくついてしまった。ぎりぎりと軋む首を何とかそちらへ向けると、思案顔をしたネヴィがひとり納得して何度も頷いている。彼女は今何を言っただろう。あいつ、という単語にぐらりと揺れた頭が急激に冷静さを取り戻していく。

最近、そう、騎士団に行ってからだ。彼女の考えていることがどうにもわからない。そして彼女が——どこまで知っているのか、も

「……“やっぱり”？」

「うん？ うーん、いや、深い意味はなくって。城下町に金髪碧眼ってまあそれなりに居るんだけど、そこまで深い蒼は、いないから。もしかしたら、って思ってただけ」

だからどうしてそこでもしかしたら、なんて思えるんだ。なんでもない両手を振るネヴィがどこか胡散臭く思えてしまう。……いや、待てよ、そういえば彼女は己の色を自前ではないと言っていたのではなかったか。彼女もまた、私と同じ経験をしたから、そんな

風に思ったのだとすれば――。

何かの答えに辿り着きそうになったとき、ベッドの方から恨みがましい声が聞こえてきて私は視線をそちらへ戻した。そこには不気味なオーラを纏った老婆が、恐ろしくもくつくつと笑っていた。ホラーだ。

「あいつときたら、……人に無断でそういう、こと、して」

「――」

「は、……あたしも、昔やったか、ら？ 人のこと、言えないけど。だから、って、ねえ」

苦しいな呼吸をしながらも、ネヴィの姉は喋ることをやめなかった。私は何を言えはいいのかわからなくてその様子をただ見守るしかない。老婆は手触りがよさそうなシーツをぎゅっと枯れ枝のような指で掴み、次第に興奮してきたのか爛々と目を光らせて――大きく息を吸って。

「ほんと、……忌々しいったらありやしないわ！」

絶叫にも近い、声が、部屋中に響いた。当然のことながら彼女は直後に激しく咳き込み、お姉ちゃん、と慌てて駆け寄ったネヴィの手に背中を預ける。そのままゆっくりと身体から力を抜いていくのがこの距離からでも見て取れた。

しかし、私は脳に直撃したその悲痛な叫びのせいで完全に思考が止まっていた。なんだろう、この感じは。惨い外見からは到底想像もつかないほど快活な声。しわがれているというのに、どこか若々

しいと言いたくなる力強さ。蒼い瞳に宿る光は、今にも死にそうな老婆が持ち得るものではない。

「まったく、よくまあ、……しでかしてくれた、もの、だわ。信じられない。ありえない。同情？ 憐憫？ はっ、これが、侮辱以外の、なんだっていうの?!」

ねえあなたもそう思うでしょ?!と鬼気迫る表情且つ、かつと見開かれた目で睨まれ、私は半分以上意味がわからないながらも反射的に頷いておく。ぶっちゃけ怖い。激しい怒りが皮膚を突き刺すようだ。

「あたしは、ずっと真面目にやってきた! あたしにできる精一杯をやった、終わりが見えてきたってずっと頑張ってきた、それは評価されてしかるべきよ! 少なくとも、こんな最後の最後で、今までの全部を台無しにするような侮辱を受けるいわれはないわ。っああもう! だからくだらない邪推とかされるのよ、あの馬鹿!」

「お姉ちゃん、水、水!」

今までとは違ってかわって滑らかに喋ることだとか、その心に引っ掛かる内容だとか、あの馬鹿とやらと随分と親しげだとか、そんなことはどうでもよかった。心配そうに枕元にあった水差しを手取るネヴィも目に入らなかった。

ただ唯一私の目を引いたのは、ネヴィの姉の、その蒼く光る瞳だった。怒りと、苦しさ、悲しみに満ちたその奥底に――私は確かに、“誇り”を感じた。

（……どうして？ 搾取、されているのに？）

ネヴィに連れられてこの部屋に入って、老婆と化した女性を見たとき。私は、全てがわかったような気がしていた。もちろん実際は何もわかってはいないのだけれど。『光のみこ』は文字通り消耗品で、選定で指名された人間は哀れにも命を捧げてこの国のため、ひいては世界のために祈らなければならない。国から補助金が出るなどというのは所詮命の売買でしかないだろう。

それなのに老婆は今、毅然と誇りを持って前を見据えている。彼女が怒っているのは――ただただ、己の使命を邪魔されそうになったことに対して？

（国がそういう教育をしてる、とか……？）

国のため世界のために死ぬことを美德としているのだとすれば、考えられないことではない。しかし城下町でさえ識字率が低いらしいのに、そんな徹底した教育を施せるだろうか。その考えが完全に国民の頭に浸透しているなら話は別だが、日常生活でそんな話題が出たことは一度もなかった。私の貧乏仲間であるネヴィの姉なら、やはり貧乏だと考えるのが普通だろう。幼少から教育機関に通う余裕などなかったに違いない。

……それに、とは思う。私が色をうつされたことを彼女は知っていると言った。話の流れからすれば、それがつまり彼女の今までを台無しにすることに繋がる、ということになる。要するにだ、彼女は「あの男」の目的を知っている、あるいは、私がどんな立場にあるか理解している――？

「……ああ、ありがと、ネヴィ。とにかく、いくら国王陛下だから

ってやっていいことと悪いことがあるわよね」

「や、っぱり、王様だったんですか、……あのひと」

「え？」

「……っ」

まずい、思わず反応してしまった。私は口元をおさえて顔を伏せる。凶器を振り翳す「あの男」の語ることなど何も信じられなかったから、余計、今の言葉には驚いた。

ネヴィの言葉に含むものがないように、明るく快活でわかり易い彼女の姉のそれも信じてもいいと思っている。——この世界の、他の人間の言葉よりは遥かに。そんな私の様子に何か思うところがあつたのか、老婆は渡された水を一口飲み込むと、真剣な光をその瞳に宿して口を開いた。

「まさかとは思うけど、……あいつ、あなたに、なにも説明しなかったの？」

説明。私はあえて返事をせず、その単語を口の中で繰り返した。

……説明。ものすごく、いやむしろ吐きそうになるくらい嫌だったが、頑張つて、閉じ込められていたあの日々を思い出す。彼に、いったい何を言われたらう。凶器に気を取られて頭が真っ白になっていたときが多く、あまり「あの男」の言ったことなど耳に残ってはいないのだが。

『国を救うためだ』——祈れ』『悪いようにはしない』——
——さあ、』

何か尋ねようと思っただけでも問答無用で繰り返される命令に、突きつけられる剣に、私は次第に口を閉ざした。話しても意味がないと思ったからだ。「あの男」は私が頷くことしか求めてはいなかった。拒否すれば斬ると行動で示していた。

（あ……でも、焦ってた？）

記憶にある「あの男」は無表情でいることが多かったが、私の反応の薄さに何度か声を荒げた様子を思い返せば、どこか急いでいた印象を受ける。けれど何の為に。今、それをネヴィの姉に尋ねるべきだろうか。はつきりと言葉にしてはいないが、色をつつされたことを否定できなかつた以上、何のことだかわかりませんと言いたくてもどうしようもない気がする。

ならばここはきちんと情報収集に徹するべきか。――ネヴィが、私に情報をくれると言ったのだから。そしてそれを私は信じたのだから。

心を決めて、なにも、と静かに首を振って答えを示すと、なぜか姉の方ではなくネヴィがにつこりと笑った。

「それじゃ、ね。……まず、夜の神子の話をしようか」

本当に、どこまで知っているのやら。彼女の提案に、私は諦めにも似た感情が身体を支配していくのを感じていた。

闇に閉ざされた世界

そもそもの始まりはわからない。たぶん、誰も知らないんじゃないかな。

長いようでいて、後から考えれば案外内容の薄いネヴィの説明はそんな言葉から始まった。こういう難しい話の説明が苦手なのか何度も考えながら話す彼女に、けれど苛立ちには起こらなかった。一気に情報を詰め込まれて困るのは私の方だったからだ。

ネヴィの姉があれだけ叫んだというのにやはり誰も来ない。この空間だけ切り離されたかのように、黙ってしまえば静寂が訪れた。老婆は沈黙を保ったまま横たわっている。説明を終えて水を口に含むネヴィの姿をぼんやりと眺めながら、私はもう一度この世界について——そして私自身のことについて、整理することにした。

まず、この世界は五つの国、五つの大陸で構成されている。世界ひとつに対して国が五つだけとはあまりにも少ないと思ったが、ひとつひとつが大きいのだろつと言及を避けた。国家間の関係は今ままでずつと良好だという。こういう文明の時代にしては珍しくも平和なことだった。戦争のひとつやふたつ、あってもおかしくはないはずなのに。

もっとも、出歩けば頭がおかしくなるという『夜』が存在する時点で、そもそも戦争を起こせるかどうか、という話だが。……実際やらかしてしまえば、もの凄い泥仕合になりそうだった。

「この世界では、昼と夜は常に反発しあっているの。どうしても、いつからか、なんてわからないけど。とにかく早朝とか太陽が沈む

瞬間とかは特にその影響が強くて、屋内に入っていないとひとたまりもないって聞くわ」

つまり屋内に入ってさえいれば影響を受けないということか。夕方になると皆が慌てて帰りだす光景が脳裏を過ぎった。そして日が沈んでから外に出ようとした私を止めた、アニーさんの剣幕も。

夜の間に歩けば頭がおかしくなるといふ怪しげな話だって、ネヴィに幾つかの実例を挙げられれば納得するしかない。例えばついこの間全裸で見つかった男はなんと今も、どこかにある国の医療施設で治療を受けているという。完全に治るかどうかも定かではないと――。

「……そういうのを抑制するのが、夜の神子の役目だった。なんて言えばいいのか、うーん、確か闇を使役できるとか、闇を司るとか、そんな能力だったような――」

使役ときたか。まさに御伽噺もいいところだ、と思わず溜息を吐きそうになったが、まああえて突っ込むまい。ここで私が培ってきた常識なんてゴミと同じようなものだ。せつかく話してくれているのだから、一通り否定せずに聞いてみようと思はしう。それがここでの常識になるのだろうか。

「そうすると、普通『闇のみこ』って呼びませんか？」

「ああ、それ？ 確かいつかの神子が、悪の手先みたいで嫌だって言っただけという逸話があるわよ」

「……………へ、へえ」

昼と夜では後者の方の力が強く、何もしなければ次第に昼は夜にのみ込まれて全てが闇に閉ざされる。なんとも抽象的な話だった。それを阻止できる存在が——“神の子”。かつてそう呼ばれていたのだという。闇にのまれかけた世界を幾度も救った——なんて笑ってしまいそうな物語は、事実として存在しているそうだった。だからそれで、『夜の神子』と称する。

対する光の……は、ネヴィの口振りと今まで得た印象からして、どうやら巫女、と変換するのが妥当だろう。金髪に翠の目なら誰でもなれるというのだ、ネヴィの姉は例外だったようだけれども。それに夜とくれば昼なのだが、確かに『昼の巫女』なんてぱっとしないな。

「夜の神子は、こことは違う世界に生きる存在。私達は彼らを召喚して——利用してきた」

こことは違う世界、という言葉は私は静かに受け止める。驚くことではなかった。私自身が誰よりもそれを知っている。そして、今となってはむきになって否定すればするほど真実を語るようなものだった。ネヴィはともかくとして、おおよその事情を知っているとされる彼女の姉の前では。だがしかし私はそれとは別のところが気になって仕方がなかった。

「……彼、ら？　って、男もいるんですか」

「え？　記録によれば、夜の神子は大体男女半々だそうよ。光の巫女は女性ばかりだけだ」

返された答えがひどく意外で、私は何度か目を瞬かせる。自分で勝手に神子とは女性ばかりだと思い込んでいた。どうしてか、『みこ』といえばイメージを固定していたのだ。

男女半々——これまで合わせて何人が喚ばれたか知らないが、男なら行動力もある。抵抗する力もあるかもしれない。だとしたら、彼らの中で私と同じように“逃げ出した”神子は存在するのだろうか。押し付けられた使命とやらを投げ出した誰かは……？そんな疑問は、次にもたらされた新たな情報に頭の隅へと追いやられた。

「五つの国で、代わる代わる夜の神子を召喚していたのだけど、その……ね。ある代の夜の神子を、死なせてしまった国王がいるの」
「……死なせた？」

「うん。随分と、そう、酷い扱いをしていたらしくて、……」

召喚された時から泣くばかりで何もしない『神子』に言うことを聞かせるため、暴力を振るうことすら厭わなかった男がいるという脅しても宥めすかしても、それでも首を縦に振らない神子に、行為はエスカレートしてやがては拷問まがいのことまで——。

痛ましそうに語るネヴィをよそに、当たり前だと私は思った。突然何もかもを奪われ、見知らぬ場所に連れてこられて「祈れ」などと意味不明なことを言われて、誰がそれを許容できる？それまでの代々の夜の神子が役目を受け入れたという事実すら信じられないというのに。

抑えきれない吐き気がこみ上げてきて、私はそつと深呼吸して心を落ち着かせる。もしその神子が私だったら、拷問なんてものに一秒たりとも耐えられないと思う。

「それはつまり、殺してしまった、ってことですか？」

「……殺した、ようなものだと思うわ。夜の神子は、祈りの間で自ら命を絶ったそうなの」

「——自殺……？」

「そう。祈りの間には小さな泉があるんだけど、水の中に沈んでいたのを侍女が見つけて」

その左腕には縦に深く大きな傷が刻まれ——赤く赤く染まった水の中で、黒目黒髪の少女は亡くなっていた。

「そしたら、その日から太陽が沈んだままになったんだって。……三年もの間、ずっと」

『神子』が死ぬと世界は完全な闇に包まれた——なんて俄かには信じがたくて、辛そうに俯くネヴィをただ見返してみる。嘘ではないと思うが、でも、太陽が出ない、日光が得られないって、そんなの普通に死ぬんじゃないだろうか？

真っ先に植物が枯れ、食物連鎖によってそれに連なる動物達も姿を消し、やがては人間も死に至る。貧富の差が激しいこんな国に、国民全てに行き渡る食物の余剰が三年分もあるとは思えなかった。餓死か、あるいは『夜』による狂死か？どちらにしても、被害は甚大だっただろう。

その地獄を、ここでは『漆黒の三年』と呼ぶそうだ。災いを引き起こした戒めとして子々孫々に語り継がれていくのだとネヴィは言う。ふと、ここで私は何か奇妙だと思った。

……彼女はいい、ここまで沢山の情報をどこから手に入れた

のだろう？光の巫女である姉から聞いたのか。それともこれは、貧富の差に関わらず全ての国民が弁えているべき常識だともいうのか。

「『神子』を死に追いやった国王が亡くなった直後に、太陽はまたその姿を見せてくれた。だから夜の神子の呪いだって誰もが思ったってわけ」

世界を覆った闇への恐怖は、それを引き起こしただろう夜の神子への恐怖に変わる。新たな夜の神子救世主を召喚することもできず、この世界の人間は僅かな光に縋って、ただ傷が癒えるのを待つしかなかった。そして太陽が戻ってきたとはいえ徐々に侵食されていく昼――生きていくためには夜を抑える以外に方法はない。

人々の思考はどんどん変遷していった。あんな過ちを繰り返さないよう、夜の神子を絶対に傷つけないようにしよう、必ず守ろう。けれどまたあのように非協力的な神子が喚び出されたらどうする？もう一刻の猶予はない、泣き暮らしている間に夜が昼を飲み込んでしまう！

地獄と言ふべき三年間の恐怖はこの世界の人間の心を縛り付ける。――そもそも本当に夜の神子を召喚しなければならぬのか、何か他に方法は？探せ、方法を！被害が少ない方法を！

もちろん、夜の神子自体に同情する声がなかったわけではない。そういう様々な要因が重なって――最終的に考え出されたのが、光の巫女制度だった。

「世界中の術師が集まってね、調べて。夜の神子とは性質が真逆で、ええと、あれ？ ああ、昼を夜から守る力ならこの世界にあるんだ

つて。まあ、夜の神子と違って生命力が必要なんだけど」

「生命、力……」

「だから光の巫女は、この国——つまり夜の神子を殺してしまった国王の子孫が統治するここから、選出することになっているの。償いのために」

せめて、その三年間で傷ついた大地が、人が、完全に癒えるまでの間は——。

「ネヴィ。悪いけど、あたしにもお水ちょうだい」

「ん、わかった。飲んじゃったから汲んでくるね。ちょっと待って」

ぱたぱたと小走りに、迷う様子もなく部屋の奥へと向かうネヴィを見送りながら、私は白い扉に背を預けた。今にも崩れ落ちてしまいそうな身体を支えたかった。長々と話していたが、結局は簡単なことだ。

いつからか、この世界は夜の神子を召喚することで昼と夜とのバランスを保っていた。しかし不幸にも夜の神子が死ぬと世界は完全に闇に閉ざされることが判明し、安全策を求めた結果、光の巫女として選ばれた人間が命を捧げるという方法を発見した、と。この世

界は、この国は、百年も前に夜の神子を召喚することを止めたのだ。

（だったら、どうして「あの男」は）

事情を知っているらしいネヴィの姉をちらりと見やると、ぱつちり視線が合ってしまった。そのままおもむろに彼女が口を開くのを、紡がれるだろう言葉を、待つ。

「……あなたに、お願いがあるんだけど」

「えっ、あ、なんですか？」

「こんなこと言えた義理じゃないけど、せめて、あの子が生きている間だけは、……どうかこの世界を壊さないでほしいの」

「……………はい？」

思わず素っ頓狂な声が漏れた。なにそのラスボス。世界を壊すとか、この人は何を言っているのだろう。私にそんな力があるわけがない。私が夜の神子であるか否かを論じる以前の問題だ。仮に今ここで私が死んだとして、そのかつての夜の神子のように、世界が闇に閉ざされる？流石に、到底無理だと思った。

「壊すって、なにをそんな——」

「あなたはこの世界を恨んでいないの？」

「……！」

「きつとね、そういうことだと、あたしは思ってる」

世界に恨みを持った夜の神子が死んだら——？そんな荒唐無稽な、

と跳ね除けられないのは、彼女が間違いなく『光の巫女』だからだ。そして私が無知であることもそれ以上の反論を許さなかった。私は、ぐっと耐えるように唇を引き結ぶ老婆の言葉を、黙って受け止めるしかなかった。

「あの男」へ、この国へ、ひいてはこの世界への恨みが、憎しみが消えるときなど来るだろうか。日常生活で、決して表面には出せないほの暗い感情は胸の奥底で燻り続けている。

「許さなくて、いいわよ。あいつのことも、……あたしのことも」

「……？ あなた、も？」

「正直、謝って済むことじゃないとはわかってる。でもね、言うわ。——ごめんなさい」

ぎしり。心が、痛む。

「あたしが……昔、あいつを唆して城の宝物庫に忍び込んだの。いたずらのつもりだった。開かずの間なんて言われてたから余計気になって、だから」

早口になりながら老婆は語る。好奇心の強い子供だった頃、幼馴染の少年と共に城を大人に黙って探検して、そして忍び込んだ先で見つけてしまったのだという。その、とうの昔に廃れたはずの“法術”を記した書物を——。

「使うときが来るなんて思わなかった。昔の人が秘密にしたものを見つけられてただ、それが嬉しかった。それだけなの！ でも、あの時あたしがそんな所に行こうなんて言わなければ……っ、中身を

見たりしなければ、あいつは方法すら知らなかったのに……！」

胸元を握り締めて声を震わせるネヴィの姉を、私は、冷や水を浴びせかけられたような気分で他人事のように眺めていた。

（ねえ、ネヴィ。あの光は、あなたが作ったの？ この為に私をここへ連れてきたの？）

この人の、ただ終わりを待つこの人の、心残りを消し去るために……？

誰にでも笑顔を振りまいて愛想がいい彼女の真実に、少し、触れられた気がした。

そして訪れる穏やかな眠り

「本当に、……ごめんなさい」

手を胸の前で組み俯くネヴィの姉は、まるで懺悔室で祈っているかのようだった。たとえここで私が詰つても彼女は構わないのだろう。声を荒げて責めたところで、彼女にはそれを受け止めるだけの覚悟がある。

赦しを望んですらない——ただ断罪を待つその姿は、老婆という外見を差し引いてもひどく哀れに思えた。そんなの、……ずるい。謝罪の言葉を口にできた時点で、少なくとも彼女の心は軽くなつたはずだった。彼女が召喚を全く望んでいなかったことはその態度から十分にわかる。おまけにここまで弱りきつた姿かたちで真摯に謝罪されて、それでも責められるほど私は子供にはなれない。

宝物庫に忍び込んだという他愛ない悪戯は、所詮、ただのきつかけでしかないのだ。

「使わない、という選択肢を持っていたのは『あの男』でしょう」

「っ！ あなた——」

「どう言えいいのかわかりませんが、でも、あなたには関係ないと思います」

「——。そう、……そう、よね。……ごめんなさい」

傷つけた、かもしれない。儚げに笑う姿にどこか罪悪感にも似た思いが胸に浮かぶ。彼女を責めることはできず、けれど謝罪を受け入れるのも何か違う気がして、私はただ、流した。許す許さない以

前の問題だった。この話に入ってこないで欲しい、そう漠然と思う。ネヴィの姉でなかったら——私はまた違う言葉を返しただろうか？私の返答に彼女は少し逡巡する素振りを見せたが、しかし直ぐに気を取り直してこちらに視線を超越した。

「向こうであいつに会ったら、またすっかり念入りに殴っておくから！　ね！」

（——え？）

祈りの形をしていた手をほどいてぐつと両手を握り締める、老婆口元は意志の強さを表すようにきゅつと引き結ばれて。その変化の一部始終を目の当たりにした私は息を呑んだ。……何だろう、今、なにかが……“切れた”ような感じがした。そのまま引つ張られていくような、どこかへ飛んでいってしまうような。彼女は確かに私の目の前に居るのに、一気に存在感が希薄になる。

すっかり念入りにつて何だ、と妙なところに引つ掛かりを覚えつつ、私は老婆から目を離せなくなってしまった。生真面目な顔を作ろうとして力んでいるようだったが、私を見るその海のように深い蒼に浮かぶ、その感情は。

（満足……？　いや待って、意味がわからない。なんで満足？）

ひきとめなければ。自分でも理解できない強い感情が私の頭を支配した。早く、今すぐ、引き留めなければ——！

「お姉ちゃん、はい、水！」
「ん。ありがとう」

何を言おうとしてか口を開いたものの、計ったかのようにネヴィが水差しを持って戻ってきたせいでタイミングを逃してしまった。勢いを殺がれてただ見守っていると、彼女はそのまま枕元に移動して、近くにあったティーテーブルに置いてあったカップを手取る。この世界の食事は少ないため食器も比較的小ぶりなものが多いのだが、水分摂取だけは私の世界と変わらないようで、水差しもカップも標準的な大きさだった。ネヴィはその豪華なカップにほんの少しだけ水を注ぎ、姉に渡す。一方、注がれたたった一口分をさも美味しそうに飲み干した老婆は、再びゆっくりとベッドに横になった。

彼女が浮かべる満足気な色に妙な胸騒ぎがする。今夜ネヴィと出会った訓練場で感じたような焦燥にも似た、なにか。

……また、暫し沈黙が落ちた。ネヴィが私達の会話をどこまで聞いていたかわからない。どこまで彼女が知っていて、どこまでが彼女の思惑だったのか——知りたい、知りたくない、どちらも本当の気持ちだった。表情からそれを読み取ってしまうのが怖くて、自然と視線は床に向かった。

（ここも、石……冷たそう）

大理石のようになめらかで、高級なものだとすぐわかる床の素材。この部屋にある豪華な調度品は、命を捧げる代わりに与えられるものなのだろうか。候補にさえ補助金が出るというのだ。巫女そのものにはどんな保障がついてくるのやら。でも、あれ？そうだとすればネヴィがあんな給料の低い泥作業組で日銭を稼ぐ必要はないのでは……？

巡り巡る思考の中で一度妙だと思ってしまえば、次から次へと新たな疑問が湧いてくる。さっきネヴィの姉は、「昔、あいつを唆し

て宝物庫に忍び込んだ」と言っていた。あいつとは「あの男」——もちろん当時も王族の一人だったはずだ。王族を唆す、宝物庫に忍び込む、そんなことを一般庶民ができるだろうか？まさかやんごたない出身だとか……しかしそれなら尚更ネヴィの貧乏っぷりがおかしい。

ぐるぐると同じところを彷徨っていると、ふう、と溜息のような呼吸音が聞こえてきた。誘われるように顔を上げると、視線の先、すっかり落ち着いた様子の老婆が曇りのない晴れやかな表情でにっこりと笑っている。

「ありがとう、ネヴィ。それにあなたも。……来てくれて嬉しかった」

「……お姉ちゃん」

「でもそろそろ時間のようね。選定が始まれば、流石にここにも見張りが戻ってくるわ」

行きなさい。さあ。枯れ枝のような腕を伸ばして扉を示し、出て行くようにと老婆は言う。あまりに唐突なことに私は驚きを隠せなかった。何を……言って？ネヴィはわかっているというようにひとつ頷いて、少しくすんだ金色の髪を慈しむように撫でた。お疲れさま。優しさと思いやりに満ちた彼女の声は、ひどく空虚な響きを纏う。

『ええと——お姉ちゃんを看取りに？』

どうしてその言葉が今頭に甦るのだろう。確かにネヴィの姉は光の巫女として生命力を奪われ続け老婆のような姿になっているが、でもほんのついさっきまでは声の張りとか表情とかにまだ生気が満ち溢れて——いた、ように、思うのに。

終わりはとても静かに訪れた。

口元に耳を寄せたネヴィに何事か囁いてから、老婆はゆっくりと瞳を閉じた。……それきりだった。

(……待、って)

あまりにもあっけない終わり。おやすみなさいとネヴィが言うのをどこか遠くで聞いていた。彼女は泣かなかった。眠りに落ちた姉の髪をそつと撫で続けたまま、微笑んですらいる。だからだろうか、どうしても、現実のように思えないのは。

「光の巫女は、ね、任期を終えたら選定が終わるまで……こうやって眠り続けるの」

白いネグリジェから覗く骨と皮だけになった胸は僅かに上下している。それは眠りだ。死ではない。しかし、生きているとも言い難かった。やがて訪れる死まで眠り続けることは、死と何が違うのだろうか。

彼女は眠り続けるという。何の為に？引き継げる相手が見つかる

まで、ずっと？二度と目覚めることのない眠りに落ちた老婆の、その口元がネヴィと同じく笑っているように綻んでいて——私は……私は。

（光の巫女は……生命力を消費して、祈る。取り替えのきく消耗品で、だから）

そんなこと頭では理解していた筈なのに、どうして、こんなにも身体が震えるのだろう。老婆のような姿に強い嫌悪を感じていたというのに、私は、名も知らぬ彼女の死が怖かった。

「——ネヴィ」

こんなのって、ない。今まで私はその事を知識としてしか捉えていなかった。どうしようもない現実なのだと心に刻んではいなかった。私は今にも死にそうなネヴィの姉を見てもおぞましさしか感じないまま、ああ、何も——何も、何も！

「……っ、ネヴィ！私が、……『あの男』に従ってたら、この人は助かったの」

「——」

「逃げずにちゃんとと言う通りにしてたら、この人は、こんな——」

「……ラギ」

「っ、質問には答えてくれるんでしょう！」

私は常になく動揺していて、叫ぶことを止められなかった。これ

がただの八つ当たりにすぎないとわかっていても。明言を避けていた事実を、はつきりと認めてしまうことだとわかっていても。

ネヴィの姉が眠りに落ちた今も、私は、「あの男」に従っておけばよかったなどとは思えない自分に気付いていた。思えないことに自己嫌悪しながら、でも、そう言葉に出さずにはいらなかった。もしもあの時——なんて、選ぶ気もない選択肢。

ネヴィと真つ直ぐ正面から向き合う勇氣も、ネヴィの姉の力なく横たわる姿を見る勇氣もなくて強く目を閉じた私の身体を、暖かい何かが包み込んだ。

「光の巫女は、役目を負うと途中で辞めることはできないの。夜の神子がいてもそれは変わらない」

私より少し身長が高いネヴィが少し屈んで、私の耳元で囁くように言う。感情の窺えない声だった。暖かい他人の体温に少し頭が冷え、逆に落ち着かなかったが、私を抱き締めるネヴィの腕が震えているのを感じ取って迂闊に動けなくなってしまった。そしてそんなことよりも、今ネヴィが言っていることの方が重要だったから。

「辞められない、んですか？ 絶対に？」

「そう。一度でも祈りを通して世界と繋がってしまったら、ね。もちろん、光の巫女と夜の神子が同時に存在したことはないから、詳しい仕組みはわからないけど」

光の巫女でなくなるとすれば、それは死が訪れたときだけ。含まれた諦観に似た響きが胸に刺さる。

「突然変わっていく自分の姿に耐えられなくて、自ら“辞めた”人もいる。頭がおかしくなって、そのまま衰弱死した人も。……お姉ちゃんの身体の衰弱は、止められたと思う。でもね、ラギ。進行を止めるだけなんだよ。元に戻すことは、できないの」

「……でも、」

「こんな姿のまま助かって、後どれだけ生きられると思う？　ろくに歩けもしない状態でほんの少し生き長らえることに、意味があると思う？」

それは、——その人によるだろう。苦しそうな声を聞きながら、私は心の中でそう返した。死に向かう人が一秒でいいから長く生きたいと願うか、ただ自然に任せることを望むか。ネヴィの腕に力が込められたが私はその痛みを甘んじて受け入れた。伝わる震えが全てを物語っている。

……彼女の姉は、きっと、願わなかったのだ。

「こんなことをするくらいなら、もっと早くにやれば良かった。こんな遅くにやっただって意味ない、間に合わない！　助けたいなら最初にそうすべきだったのに——」

「……間に合ってたなら、ネヴィは、……どうしてた？」

「え？」

「間に合っていたら。あの人が助かるなら、私を、国へつきだしてた？」

はっとしたように緩んだ腕から抜け出さないまま、私はぽつりと呟く。多少の意趣返しのもりだったかもしれない。今の会話でネヴィは私が召喚された『夜の神子』だと確実に知っていることが証

明された。いつからかはまだわからないが、知っていて、私をあの老婆に会わせたのだ。

未練などありませんという顔をして眠りについたネヴィの姉。お互いを大事に思っているだろうことは考えなくても理解できる。

「っ、……した。したよ。——したに決まってる！」

また強く、強く抱き締められる。意地悪な質問をしたと自分でも思う。けれど少しも誤魔化さない、謝らない彼女の強さが、なんだからとても羨ましかった。

冷たい光が降り注ぐ下で

それから私はネヴィに半ば引き摺られるようにしてその部屋を後にした。行こうと促されてもなかなか決心がつかず、足が動かなかったからだ。文字通り死んだように眠る老婆と、煌びやかな内装のアンバランスさに息が詰まる。よく見れば窓には鉄格子のようなものが嵌められていることに気付いた。ここは、本当に牢獄そのものだった。

——ネヴィは反応の薄い私に痺れを切らしてか、私の腕を掴んで無理矢理扉の方へ一步を踏み出す。やはり彼女は泣いていない。今一番辛いのは家族であるネヴィだろうに。強い力に流されてふらふらとついていきながら、ぼんやりと思った。ここに不法侵入すると腹を括ったときの決意は、いったいどこへ消えてしまったのだろうか。

靴を脱いで音が響く廊下をやり過ごし、周囲を警戒しつつ訓練場へ出る。外の空気はとても涼しくて思考の止まった頭に心地いい。ぽつぽつと降っていたはずの雨はすっかり止んでいた。頭上には怖いくらい綺麗な円を描く月——元の世界で言う月、に相当するなにか——が煌々と輝き、篝火の明るさと相まって不思議な空間を作り出している。もちろん、篝火から少しでも離れてしまえば足元は真っ暗だ。

ネヴィはその暗さを物ともせず、柵を越えればまた私の腕を引っ掴んでずんずんと進んでいく。その足取りはしつかりとしていて、目的地が決まっているかのようなだった。掴まれているところがほんの少し、痛い。それでも私は振りほどかなかった。……今は、何かに縋っていたかったのかもしれない。

「ねえ、ラギ。もう一回、高台に行ってもいい？」
「……いいですよ」

交わされる会話はまるであの日と同じように。けれど確実に違っているものが、ある。私は夜風に吹かれて少しずつ冷静さが戻ってくるのを感じながら、ゆっくりと息を吸い込んだ。

「——いつから、気がついてたんですか」

「……うん？」

「私がそうだ、ってこと」

「確信があったわけじゃないよ。ただ、そうなのかなってだけで、別に」

唐突な質問にも、返事は即座に来た。私の知りたいことは何でも教えてあげると自ら提案した以上、予測済みだというわけか。しかし確信がなかったと言ったわりに、迷う素振りも見せず光の巫女の部屋へ私を連れて行ったのはどうなんだろう。

私のほんの少し右斜め前を歩くネヴィの横顔をちらりと窺ってみる。……暗くてよく見えなかった。ただ少し腕を掴む手に力が入ったような気がした。

「そういう事態になったのは、お姉ちゃんの落ち込みようで知ってはいたしね。でももう、間に合わなかったから。今期が始まったときから老化が始まって——終わりだっかわかってたから、無意味だと思って。正直、どうでもよかった」

夜の神子が召喚されたことは最初から知っていたと彼女は言う。
ひどい落ち込みようだったという言葉に、私はまた僅かに湧き上がった罪悪感に視線を正面に戻した。

ネヴィの姉は、自分に与えられた仕事をこなしたただけなのだろう。その結果あんな姿になったとしても、それはやり遂げた証に他ならない。己の身体が老いていく様子に心折れることなく彼女は最後までやりきった。……誇るべき、ことなのだ。

「ラギはそもそも、変だった!」

「変ってなんですか!」

「仕事はちゃんとこなせるのに、物を全然知らないところ? なんていうか、普通の常識が全くないっていうの?」

見えないけれど、きつとにこにこ笑いながら言っているに違いない。悪意の欠片もなく。その様子がありありと目に浮かぶように私は引き攣った笑みを浮かべた。こんな風に言われても貶されていると感じないのは一種の才能だろう。

「知る環境にいなかったんじゃないかとは思ったけど、それにしては手が綺麗だし。東の町から来たにしてはそういう雰囲気もないし。考え方も何か違う。うーん、とにかく全体的に色々変だったかな」

「……………」

「あ。お姉ちゃんの話聞いてなかったら、ラギはただの変人だと思ってたかも」

手が綺麗、か。いちいち刺さるネヴィの言葉を聞き流しながら、掴まれていない方の腕を上げ手の指を唇に当てる。少しかさついた肌の感触。連日の水仕事で流石に荒れてきてはいるが、それでも周囲と比べればまだマシな方なのかもしれない。そう、店に雇って貰ったばかりのころはもつと。

私としてはごく普通に――目立たないように過ごしているつもりだったが、他人から客観的に見ればやはり違いはあるのだろう。自分では思いもつかないようなところで。

「えつとね、後は――」

「その話はもういいです。次、騎士団に行ったときのことなんですけど」

「な、なに？ ラギ。そんな改まって」

私がどれだけ変だったかを更に語り続けようとするネヴィを遮り、私は次の質問へと移った。今後の参考に聞いてもいいのだが、役に立つというより無駄に時間が過ぎる予感がひしひしとする。今日という時間は有限だ。今のうちに、とにかく重要なことを色々聞いてしまふに限る。

「報酬なんですからきてきばき答えてください。ネヴィ、あのとき、何してたんですか」

「……。……あは、やっぱりばれてた？」

「あれじゃ怪しすぎます。いっそのこと、用事があるからって普通に出て行った方がまだマシでしたよ」

「うっん、自分でもそう思っではいたんだけどね。途中で折を見て抜け出して欲しいなんてあの人が言うから……」

ティーセットが割れたこと自体は偶然だったかもしれない。それにわざとらしく乗っかってどこかへ消えたネヴィは、背後霊を背負った男を引き連れて戻ってきた。この国に、この世界に恨みを持つ『夜の神子』が死ねば世界は闇に覆われる——らしい、ことを考えれば、あの似非役人が必死になって探すのも理解はできる。

「あのときはね、私が夜の神子じゃないって証明してた」

「……え、どうやってですか？」

「光の巫女の、祈りの間があるでしょ？ 城の中心を境にして、そのちょうど反対側に夜の神子の祈りの間があるの」

祈りの間。私は若白髪が言っていたことを思い出した。そこに湧く水は特別で、資格の有無、力の強弱を識別することができるという。夜の神子のそれもまた同じことができるというのか。……いや、少し違うかもしれない。私みたいに逃げ出したりしなければ、資格の有無など調べる必要はないのだから。

「私が本当に夜の神子だったら、そこにある泉に手を突っ込んだら変化が起きる。ええと、水が真っ黒になるとか」

「っ、気持ち悪！」

「こら！ 神様の啓示なんだってば！」

ネヴィの窘める声も、その感情を消すことはできなかった。手をつけた途端、一面に広がる墨汁。そんなものを想像してしまい、そ

れはないわと私は軽く首を振る。何の啓示だ。しかし、確かにそれはわかり易いことだと思った。外見がどうであれ、突っ込んで何も変わらなかったらその人間は『夜の神子』ではない。

つまりネヴィがそうだと強い自信を持っていた似非役人は、覆しようのない、誤魔化しようのない結果を示されて撃沈したのだろう。なるほど、私という部外者がいても形振り構わず落ち込むわけだ。よほどショックだったに違いない。

（ざまあみる、とは、もう思えないけど）

結構思い込みで動いていたんじゃないかなと思う節があるので、一切同情はしなかった。

次の質問、次の質問。私は口の中でそう呟きながらネヴィと共にゆったりと歩いていた。話しながらだと格段に歩くスピードは落ちる。彼女が選んでいるのは恐らく大通りから少し外れた道だと思う。少し狭い上に篝火の数が少ない。たまに遠くの恋人同士とおぼしき男女が寄り添う姿が視界に入るだけで、騎士の姿は行きよりまばらになっていった。ネヴィの姉が言っていたように見張りとして騎士団に戻っていったのだろうか。

——選定。言葉だけを考えれば、踊り子を募集するときにもその言葉が使われていた。これから『光の巫女』の選定が始まるらしい。それがいったいどういうものなのか、音の響きからはまったく想像できなかった。

「……選定って、どうやるんですか」

この話題がネヴィにとって愉快なものではないと知っていながら。けれど、私はそう質問した。腕を掴む手にまた力が入ったが、しかしそれはもう私に痛みを与えるものではなくなっている。さっきは彼女も動揺していたのだろうか。思った以上に静かな声が、私の疑問に答えてくれた。

「湧き水」

「はい？」

「とにかく、湧き水に手を触れるの。汲んだりして少しでも時間が経ったものは駄目。地面から湧いてくるその水に直接触らないと効果はない。これが前提、いい？」

「……………はあ」

ぶつちやけると、この人は何を言っているんだろうと思った。湧き水なんて毎日私達が仕事に使っている生活用水、この町ではとてもありふれたものだ。それをさも重要な——神秘的なもののように彼女は語る。

また御伽噺の世界かと頭が痛くなりそうになったとき、ようやく目的地である高台へと続く坂道に着いた。ネヴィはふと足を止めて私の方へと振り返った。

「資格を持っていれば、触れた瞬間に光が溢れる」

そして私の腕を掴んでいない方の手を頭上に掲げ、ある一点を指差す。

「『月^{ルナ}』——選定のときにだけ現れる、神様のしるし。それが欠けてなくなるまで」

だからその期間はあちこちで光の粒子が飛び交う。選定の長さは大体七夜。その間に国中の金髪翠目の女性は必ず選定を受けなければならぬ……。私は、ネヴィの説明を半ば聞いていなかった。間抜けにもぼかんと口を開けたままそれに見入っていた。

気付かなかった。夜空に星はあつたし、夜の間はアニーさんの目もあり外に出られなかったから今の今まで気付いていなかった。この世界には普段——月がないのだ。選定期間に現れても、たった七夜で姿を消す。

（それに、……どうして“ルナ”？）

その単語だけどこか浮いているような印象を受けた。この世界にそぐわない、わけではないが、月そのものという意味もある単語だと私が理解できるゆえの違和感。選定のときだけ、ならば最初に現れたときにはもう既に『夜の神子』は存在しておらず、命名はこの世界の人間がしたことになる。太陽は太陽と呼ぶのに——どうしてだろう。

「選定で資格ありとされたら、この町なら城へ。他の町ならそれぞれの役場へ申し出るの」

「それ、任意ですか？」

「義務よ。って言っても、補助金が出るから皆こぞって行くけどね。貴族は……国民なら全員行かなきゃならないけど、ああいう人達から光の巫女が選ばれることって少ないよ。そもそも金髪に翠の目の女性がほとんどいないから」

なんでも結婚相手に金髪に翠の目の家族がいるとわかったら、どんなに話が進んでいても断って、その血を入れないようにするほど徹底しているらしい。その話を否定も肯定もできずに私は黙り込んだ。ネヴィの姉がどうなったかをこの目で見てしまえば、何も言うことはできなかった。

高台のてっぺんに立って、ぼんやりと篝火に照らされる城下町を見下ろす。ここからでも篝火に囲まれた城はなんとなくわかった。今が夜だからか、この前とは違って比較的心穏やかにそれを見ている自分がいる。

城から少し離れたところに騎士団の詰め所、そして前見落としていた小さな塔が目に入った。つまりはあれが光の巫女の――。ネヴィの言葉通りちょうど反対側を見やると、そこにも同じような塔が立っていた。

（あそこで、……いつかの夜の神子が自殺した）

直後に起こった天変地異により、この世界は学習したのだ。何を引き起こすかわからない異世界から引つ張ってきたものに任せるより、自分達でなんとかしよう、と。

その心意気は認めてもいい。むしろ痛い目に遭わなければそんな風に思えなかったことを詰るべきか。けれどそれが人間というものだ、と自分に置き換えて考えてみる。ちらりと視線を回せば、篝火が一方所に大量に集まっているのが見える。あれが祭りの場所のようだった。

「ラギ。……そろそろだよ。あつちのほうを見て」

ここに着いてから私の腕をあつさりと放したネヴィに、あつちと天を示され上を向く。当然のことながら、吸い込まれそうなほどに綺麗な満月が視界に入った。私の世界のそれと何ら変わらないように見える月。首がつりそうだと思いながら見ていると——きり、と、何かが光った。

瞬間、

もの凄い量の光の粒子が、雨のように降り注いだ。天から？いや、あの月からだった。

落ちてくる光は途中で方向を変え四方八方に飛び回り、私達の遥か頭上で弾けるようにして次々と消えていく。短い時間がとても長く感じた。——それはまさに魔法だった。綺麗、だと、素直に思った。

わぁっ、と遠くで歓声があがり、私ははっと我に返った。隣にいたはずのネヴィの姿が見えず、慌てて振り向く。と、ネヴィは暗さを取り戻した高台の隅にしゃがみ込んでいた。どうしたのかと思つて近づくと、彼女の正面に、小さな湧き水があった。

ああ、それに手を突っ込めば、資格があるとさっきのような光の粒子が溢れ出すのか。ひとり納得して頷いていると、そこでまた私は首を傾げることになった。どうしてネヴィは、そんな真剣な顔をして袖をまくっているのだろう。そんな震える手を伸ばして、何をしようとしているのだろう。

選定は光の巫女を決める為のもので、金髪に翠の目と決まってい

る。ネヴィの姉は例外だったかもしれないが、条件から外れまくった、むしろ真逆な黒目黒髪で何を。

（あ、そうだ、……ネヴィのは自前じゃない！）

まさか、彼女の元の色は――。ネヴィが息を呑む音が聞こえた。そして恐る恐る、本当に恐る恐る、指を近づける。光の巫女たる資格があるかどうかを判断する方法。素質を持つ者が湧き水に触れば、光が溢れる。

「……どうして、」

ぼつり、落とされた眩き。今にも泣きそうな声が私の耳に届く。

「どうして――！」

そして、何も、起こらなかった。光の一粒さえ、現れなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6327s/>

薄闇の眠りを

2011年6月24日11時24分発行